昭和八年七月七日第三種郵便物認可
昭和九年十二月廿五日印刷納本 隔月一回一日發行
昭和十年一月一日發行

# 精神分析

第三巻 第一號

## 第(二)兒童心理研究號

昭和十年一月・二月

（巻頭言）兒童のために憂ふ……………………（一）

研究

子供の精神分析的研究……………霜田靜志…（二）
子供のコンプレクスその他――カイン・コンプレクス――
五歳男兒の恐怖症の分析（フロイド）…大槻憲二譯…（一九）
幼兒ハンスの性感について――
トルストイの最幼兒期記憶の分析（オッシポー）
………平塚義角譯…（三三）
小序――「わが最初の記憶」トルストイ――個人我と自我リビドー
ゲーテとフロイド（F・ギッテルス）………武田忠哉譯…（四四）
水に誘はれる人の精神分析…………高橋鐵…（五一）
A、水底凝視の辯――B、美味求眞道の辯――C、水の流轉性
D、透明體凝視に於ける水――E、「胎内空想」の漂ふ水
――F、むすぶ言葉――
科學としての精神分析學の特殊性…大槻憲二…（五七）
一、種々な解釋の可能について――二、解釋と認識――三、科學性の複雜――四、過度決定――五、個人的偏見を恥ぢよ。

――（裏面へ續く）――

東京精神分析學研究所出版部

## 文藝

理想の家族（K・マンスフィールド）……岩倉具榮譯‥（六三）

## 時評

時言數題……大槻憲二‥（七三）

一、非常時への言葉——二、クリュッペルハイムの運動——三、保護兒童早期發見法——四、五十嵐博士の源氏評——五、再び英語教育者に望む——六、永井博士の婦人論——

映畫「母の手」を觀て……岩倉具榮（七九）

## 資料

子供の犯罪實話數例……窪田甲子郎‥（八一）

一つの幼兒期記憶……土屋喜一‥（八四）

子供の生活を觀て……倉橋久雄‥（八四）

知的ナルチスムスの自己分析……奥本島田‥（八八）

母の分析手帳から……大槻岐美‥（八九）

一、カナリヤと卵——二、室を怖れる——三、父と子

## 講座

幼兒性感とその取扱ひ……記者‥（九五）

精神分析學語彙（一五）……（一〇一）

## アプフウプ

初夢分析考……森巣山人‥（一〇三）

## 探訪

（第八回）バーナード・リイチに英國心理學界の情勢を聽く……（一〇六）

## 內外彙報

米誌「精神分析評論」昨年七月號——「精神分析教育雜誌」昨年、三、四月號——同誌、昨年五—八月號——英文「國際精神分析學雜誌」昨年、四—七月號——最近國內事實——「子供の家」兒童美術展——本研究所研究會例會——本研究所講習會例會……（一〇八）

## 相談

家に落着かぬ夫……（一一三）

編輯後記……（一一三）

前號正誤表……（一〇七）

# 《精神分析》第三巻 第一號·巻頭言

## 兒童のために憂ふ

人間は分析せられるまでは（分析されてからでも不斷に自己分析してゐないと）始終度の狂つてゐる色眼鏡をかけてゐるやうなものだ。自分自身も危險だし、身邊のものはなほさら迷惑だ。併し他人のそのやうな危險を避ける能力ある成人はまだいゝやうなものゝ、子供は可哀さうだ。分析せられざる人間はみな自分のコムプレクスで子供を右や左にこつき廻してゐる。自分が幼兒時代に苦しめられた人は自分の子供にも非常に虐待的になるか、或は極端に甘くなる。何れも子供を神經症にする。自分が長男であつた人はどうしても子供の內でも長男にひいきするやうになる傾向がある。學校の先生でも生徒の內の何れかに、自分の幼兒時代の面影を發見して、それを偏愛したり、或は幼兒時代に不快な人の面影を見出して憎んだりすることがよくある。こんなことは極單純な方だが、複雜なものになると實に恐るべき結果をまねくのがある。世の父兄たちや學校先生たちも、考へ直さねばならないことでないだらうか。分析を學ばずして子供を育てることは罪惡であると、我々は敢て斷言する。

# 子供の精神分析的研究

## ——シャール・ボーヅアンに依る——

霜田靜志

Charles Baudouin の近著 L'ame enfantine et la psychanalyse は、一九三三年に出たもので、クラインの「子供の精神分析」と双壁を爲すべき文獻である。フロイドも指摘して居るやうに、精神分析の研究は結局幼時にまで遡らなければならない。此の意味で斯學が愈々此の方面に大に力を盡しつゝあることは、まことに喜ぶべき傾向であると同時に、吾々教育に携はる者にとつては、之によつて子供の理解を深め得る新しき境地を拓かるゝ事を感謝しなければならない。以下述ぶる所は此の書を讀んで得た所のものを、私自身の言葉によつて話るものに過ぎない。從つて自分の興味を感じた所に詳しく、興味を感ぜざる所は簡單に片付けてしまふといふやうな所もある事を、豫め御承知置き願ひたい。以下文中、私とあるは原著者自身を指すものである。

### 子供のコンプレクス　其の他

私は前著「フロイドと分析的教育」に於て、精神分析と教育との關係を明かにしたが、この書の緒言に於て「精神分析」と「子供」とについて明確なる定義を下すことに努めた。今、其の時の分類に基いて、次に之を述べる。

一、**基本的機制**(メカニズム)——フロイドによつて明かにせられたる本能的感情的生活に於けるメカニズムは、子供の心にどう働いて居るか。抑壓、轉移、昇華、內向、同一化作用其の他に對して、それがどう働くか。第一に此の問題を明かに

しなければならない。

二、**コンプレクス**――次に個々の子供を觀察する事によつて、彼等内心の葛藤、即ち精神分析學上に言ふ所のコンプレクスについて、之を明かにしなければならない。

三、**主なる心的障害**――更に又、親達や教育家の大に注意すべき子供の心的障害、子供の行爲性格の缺陷に對して、精神分析學は如何なる光を與ふるかを明かにしなければならない。

四、**方法**――最後に、精神分析學者は子供を如何に取扱ふか、又吾々は子供の訓育に際してそれをどう應用すべきであるか、といふ點を明かにしなければならない。

私は之等の問題を解決せんとして此の書の著作を思ひ立つたのであるが、此の目的のためには子供の持つて居るコンプレクスをよく研究して行くと、確かに問題の核心に觸れる事が出來る。そして遂に子供の心の根本構造に到達する事が出來る。從つて彼等の心的障害も、之によつてはつきりと解つて來る。併し之を明かにするためには、解剖よりも病理を研究しなければならない。

精密なる研究の結果によれば、コンプレクスは神經症者にも常人にも等しく存在する事が明かになつて居る。而して個人的なコンプレクスは原始的な種族的コンプレクスの分れである事を知らなければならない。今まで病的現象であると思つたものが、研究の結果、實は普通の心理現象に過ぎぬ事の分つて來たものも隨分と少くない。フロイドの言ふコンプレクスとは、結局子供の時の意識が後年の無意識の中に殘存せるものに過ぎないのであつて、氏は三十年の研究の後、一九二五年になつて、子供こそ精神分析の最も大事な對象である事を指摘して居る。

精神分析では性を重要視すると言はれるが、フロイドの言ふ幼時性慾は成人の性慾の萠芽となる身體全體に擴がつて存在する性感、愛情等の要素を意味するのである。

子供の心理を明かにするには、心のモザイクなるコンプレクスを明かにするより外はない。而してコンプレクスも煎じつめれば、結局は本能的要素に歸着するのであらうけれど、吾々の研究はまだ其處までは達して居ない。

以上の立場から私はコンプレクスを研究して行かうとするのであるが、扨てそれならばコンプレクスにはどんな種類のものがあり、どんな部面にまで亘ものであるか。私は之を次の如くに分類する。

一、**對象のコンプレクス**

これは吾々が對象に對して、それに執着を感じ、それを所有せんとする傾向、それを自分のものとして獲得せんとする傾向であつて、所有のコンプレクスと呼んでもよい。之に屬するものは、次の如くである。

**カイン・コンプレクス**――兄は弟妹を斥け、弟は兄姉を斥けて、母又は父を獨占せんとする傾向で、これは子供の間に甚だ多く見られるコンプレクスである。

**エヂポス・コンプレクス**――男の子が母を愛し父を斥け、女の子が父を愛し母を斥ける傾向が卽ちこれであつて、極めて普遍的なコンプレクスである。

**破壞コンプレクス**――これは對象物又は仲間を傷けんとするコンプレクスであつて、サヂスチックな傾向の現れである。

二、**自我のコンプレクス**

**虛榮コンプレクス**――見たり見られたり、賞めたり賞められたりする事を喜ぶ傾向であつて、之は女の子に多い。

前項の虛榮コンプレクスは、よく考へて見れば對象のコンプレクス、所有のコンプレクスとは言へないかも知れない。自分を賞められたいのは自己尊重から來る。他を見ようとするのは好奇心から來る慾望である事が考へられる。そこでこれは所有以前の問題、自我の問題に遡つて行かなければならない。自我のコンプレクスを明かにしなければならぬ所以である。所で此のコンプレクスに屬するものを研究して行つて見ると、凡そ次のやうなものになる。

**切除(去勢)コンプレクス**――女の子は自分の身體を男の子と比較して見て、これは身體の一部分を切り取られたものではないかと考へる。そこから劣等感が生れる。此の傾向は女の子に於て多く見られる。

**ダイヤナ・コンプレクス**――女の子が劣等感を持つ所からして、男になりたいといふ要望を持つやうになる。此の

傾向をダイヤナコンプレクスと名づけるのである。

**誕生コンプレクス**——子供は赤ん坊の誕生に對して特別な解釋を持つて居るが、それが一つの偏つた傾向となりコンプレクスを生ずる。

### 三、態度のコンプレクス

子供の興味は理論的にばかり動かない。そこで誕生のコンプレクスから胎內に歸りたい願望も起つて來る。その結果として態度のコンプレクスなるものが、第三に問題になるのである。それは對象を獲得せんとする個人的追求でもない。自我の主張としての、攻擊的な表出でもない。それは全く多くの事物、生活それ自身に對しての態度の問題である。それが色々な傾向を帶びて來るのであるが、此の項に屬するコンプレクスは次の二つである。

**離乳コンプレクス**——母乳を引離された時、乳房に對する激しい執着が殘る。それが一つの偏つた傾向を作る。乳を求めるのは對象物を獲得せんとする所有の慾望であるが、之を阻止せられた時、後にはそれに對する執着の心、その態度だけが殘る。それが此のコンプレクスである。

**逃避コンプレクス**——これは前述の離乳コンプレクスから派出するもので、乳を取り上げられた後に殘る渴望が、いつまでも赤ん坊で居たい心を起させ、その結果悔恨、退行、內向等の態度が現れて來る。卽ち、此處に當然現實を逃避して隱れ家を求めんとする態度が現れて來るのである。

### 四、コンプレクスの交錯

對象のコンプレクス、自我のコンプレクス、態度のコンプレクス、これ等の三つのものは互に相交錯する。從つて之等の二つ乃至三つが結びついて特殊なコンプレクスを形作つて行く事も珍らしくない。此の點についても、研究する必要がある。

### 五、超　自　我

最後にフロイドの言ふ超自我なるものに觸れなければならぬのであるが、之は一つの純粹なコンプレクスであつて

言はゞ道德的訴訟の最高法庭である。それ故に此の超自我なるものは、他のコンプレクスに對し、支配者の位置に立つ。且つ又此の超自我は理想や良心の發生に大きな力となるものであつて、此の點で親達にとつても、教育家にとつても、重大な問題になつて來るのである。

## カイン・コンプレクス

所で子供のコンプレクスを研究するに當つて、先づ第一に兄弟鬪爭の心理を明かにする此のカイン・コンプレクスから始めようと思ふのであるが、舊譯聖書に於けるあのカインが兄のアベルを殺したる著名なる一事實は兄弟鬪爭の原始の姿を示すものであり、以來兄弟の爭は人間に負はされた宿命的なものであると考へられる。

私はジュネーヴ大學の講義にヴィクトル・ユーゴーの精神分析を取扱つたが、その際私は彼の「良心」と題する詩を取り上げた。此の詩に於てユーゴーはカインが兄を殺した後の悔恨をまざ〳〵とした姿に表現して居るが、此の詩に現れた兄弟喧嘩の心理は、實はユーゴー自身の心の底の無意識の中に藏する激しい葛藤が形を變へて現されたものに過ぎない。

ユーゴーは三人の男の兄弟の中の末子であつた。而も偶々長男は其の洗禮名をアベルと附けられて居たのも不思議である。少年ユーゴーが反逆するのも宿命的なものであつたかも知れない。彼は抑もの最初から虛弱な子供であつたそれ故彼はいつも兄達に負けないやうに、同等に取扱はれん事を望んで居た。否彼は兄達を凌駕し、兄達に取つて代らうとする祕かなる野心をさへ持つて居た。

此のやうな願望が小さい子供に起つて來ると、大概は相手の死を希ふ形に於て現れて來る。併し此の場合子供がロでは相手の死を望んで居ると言つたからとて、それは決して殘酷な事でも何でもない。何故ならば、小さい子供は死とは何であるかを本當には知つて居ないからである。屢々それは「不在」と同意義に使はれて居る。

ユーゴーの全生涯と作品との中に於ては、此の兄弟鬪爭の無意識的心理が、明瞭に認め得るのであつて、之を樣々

に分類し、細かく說明して行く事は意義ある企であると言ふことが出來る。ところで、それならユーゴーの如きは兄に對して反逆するカインの如き不德漢であると認める事が出來るかといふに、勿論さうは考へられない。寧ろ彼の場合は特別なものであつて　普通の人なら兄に對する反逆的な心持を實際問題の上に及ぼし、色々な不祥事件を起し易いのであるが、彼の如き天才にあつては、自分の幼時の兄弟鬪爭のコンプレクスを眞に美しい形に於て昇華して居るのである。

併しコンプレクスといふものは、決して例外的な特別なものではない。それは誰にもあるものであつて、むしろそれは法則である。人間の性質は斯く構成せられて居るといふ法則を示す手係りとなるものがコンプレクスであつて、此の事實の前には、何人も頭を下げざるを得ないのである。

小さい子供が自分の下に赤ん坊が突然現れ出たのを見ると、大抵の場合直ちに激しい嫉妬を現すものであるが、斯くの如き嫉妬は決して例外的なものでなく、普通に何處にでも見られるもので、性質上實は純粹に動物的なものである。此の嫉妬心は後年に至るまでついて廻るのであるが、それは潛伏して存在し、時には理性の力によつて相當うまく制御せられて存在する事もある。

嫉妬心といふものは、人間にだけ存在する特別なものではない、時に動物に於ても屢々見られる所のものである。私の長男が生れた時、私共は小さい黑猫を一匹飼つて居たが、そいつは不思議によく言ふ事をきく可愛いゝ猫であつた。夕方私共がよそに出掛けると、猫はかなりな所までついて來て、別れた所で必ず歸りを待つて居る、數時間たつてから歸つてもちやんと其處に待つて居るといふ忠實ぶりであつた。此の猫が始めて私達の赤ん坊を見た時、意地惡さうな眼つきで子供を眺めて居たが、突然飛びついて赤ん坊を思ひきり引つ搔いた。私達は吃驚して、猫を斥けしたゝかに之を懲めてやつたが、それつきり此の小動物は逃げて行つて、何處に行つたか再び歸つて來なかつた。

赤ん坊が家族の一員に加はつた時、上の子供から敵視される關係上、赤ん坊の方も兄や姉に對して或る程度の敵意

を現すことは事實である。併し最も顯著なる事實として現れるのは、小さい子供に對して大きい子供が起す敵意であつて、之については甚だ興味ある觀察が十分に爲されて居る。屢々起る兄弟喧嘩なるものは、多くの場合此の幼い時代の敵意に原因するものであつて、それが僅の刺戟によつて爆發し、多くの母親を懊惱せしむるのである。斯くの如き兄弟喧嘩の場合、外面的な理由にならぬ事を理由にする子供が隨分あるが、それは全く表面的な口實に過ぎない。眞の原因は潛在的な幼時の嫉妬心に基くのである。

最初は大抵の人が斯ういふ強い斷定に對しては反對した氣持を抱くであらう。然るに精神分析を理解するやうになると、其の立場から吾々の周圍に存在する無數の事實に注意するやうになる。いやそれ所ではない、さうした現象が存在して居たのに、少しも氣付かなかつた事を、吃驚してしまふ程である。これは精神分析的觀察に於てかなりに屢々起る現象であるが、つまり之は、以前には事實を見ようとしなかつたから事實を見なかつたのであつて、それは一種の抑制作用である。併し一度事物に對する見方を自覺するや、すべては明瞭になつて來るのである。

殆ど總ての人々は、自分の幼年時代に於て、斯ういふ部面を通つて來て居る。併し多くの人々は巧に之を抑制してしまつて、さうした感情の經驗を少しも記憶に殘して居ないのである。子供は道義心の發達の程度によつて、ごく小さい幼兒時代から、必ず自分の心に對して多少の抑制を加へて居るものである。幸にして大多數の子供は兄弟に對する敵意を、ぢきに統御し得るやうになり、それに代ふるにもつと正しく言へば、それに重ねて眞實の愛を置くやうになる。時には、その出發に於て、既に自分は事實弟や妹が好きだ、といふ風に信ぜしむるやう訓練する事が出來るかも知れない。併し斯樣な訓練によつて得た信念は、必ずや多少とも强ひられた信念に過ぎないもので、其のために自然な敵意は抑壓せられてしまふ。その結果後に至つて、其の抑壓せられたものが時々現れて來るいふ事になる。此の事は經驗のつんだ觀察者にははつきりと分るのである。

此の狀態の研究は困難であるけれども、苟も人間性を深く究めたる人であるならば、精神分析的研究の現れるのを待つまでもなく、既にそれ以前の時代に於て、幼兒期の嫉妬の事實存在する事を認めて居るのである。聖オーガスチ

ンは「私は子供が嫉妬のために全く病氣になつてしまふのを見た。其の子供はまだ言葉も言ひ得ない赤ん坊であつたが、他の赤ん坊の乳を吞むのを見て、顏色を變へ悲みを見せ、苦しげな眼付をして居た。」と言つて居るが、之はキーレルの「子供の神經質」といふ書にも引用せられて居る。キーレルは又、同じやうな事實を殆ど毎日の新聞の中から拾ひ出す事が出來るといふ事を注意して居る。それ等の中にはニウヨーク・プレスに出て居た次のやうな激しい事件さへある。

生後二十ケ月の男兒、二日前に生れた赤ん坊の妹に對して嫉妬を感じて居た。此の子供が赤ん坊と二人だけになつた時、猛烈に赤ん坊に摑みかゝつた。子守が歸つて來た時には、赤ん坊は引搔かれて傷だらけにされて死んで居た。そして此の男の子は赤ん坊にのしかゝり、呆然とそれを見つめて居たといふ事である。

精神分析者は之等の事實に注意するやうになつてから此の方、澤山の子供の言葉を集めて居るが、それ等の言葉は子供の心を眞實有りのまゝに物語つて居る。私は五歲の女の子を世話した事があるが、其の子には恰度その時赤ん坊の弟があつた。此の女の子に向つて冗談に、赤ちやんを手車にのせて連れて行つてしまつてもいゝか、ときくと「いゝわよ、だけど手車だけは持つて歸つてね」と平氣で答へたものである。リンネットといふ此の子が弟を嫌ふ態度は其の後も永く續いた。

或る二歲半の男の子は、新に生れた妹を見せられた時、「僕は見たくないや」と言つた。丸一週間といふもの、此の子は赤ん坊を見ようとしなかつた。そして赤ん坊が乳を吞むのを見た時、母の胸から之を引き離さうとした。偶然にも此の男の子は氣管枝炎を患つた後、間もなく死んだ。

更にもう一つの觀察の實例がある。ナニといふ四歲の女兒、その妹のジヅーは三歲である。或る時、此の妹の方が一寸轉んでその結果病氣になり、寢床にねかしつけて置かれなければならなかつた。母親は病室を一寸離れたが、其の時突然病室の方から苦痛の叫び聲が聞こえたので、すぐに引返して來た。室々は電燈はまだついて居なかつたが、夕暗の中にジヅーの顏に二つの暗い穴が見え、其處から血が流れて居るやうに見えた。ナニは隅の方に打ちしほれて

立つて居た。母親は一目見て、姉がきつと妹の眼をえぐり出してしまつたに違ひないと思つた。幸にして事態はそれ程の事ではなかつた。見るとナニはヨヂーム丁幾の一瓶をジヅーの眼に空けてしまつて居るのであつた。皆がびつくりしたのは言ふ迄もない。醫者に電話をかける、眼科醫を迎へる、注射をする、等々と大變な騷ぎ、それでも幸に怪我は外側だけだつたので、子供の眼はつぶれないで濟んだ。ナニは何故そんな事をしたかと訊かれた時、最初は「あたし、少し馬鹿だつたの」と答へた。それから一種名状すべからざる顏色で、「ジヅちやんの綺麗なお目々をやつつけてやつたの」と附け加へた。ジヅーは大變に可愛らしい子供だつた。その上に此の子の眼のことは始終ナニの面前で賞められて居たのであつた。ナニが妹に敵意を感じたもう一つの理由としてはそれは種々の場合に誰もが觀察した事であつたが、ジヅー誕生後母親はひどく身體が惡かつたもので、ナニは六ケ月も他所へやられた。此のやうな追放に逢つては、子供心に、これはきつと赤ちやんが出來た爲めに自分は見捨てられたのだ。母親から愛せられなくなつてしまつたのだ、といふ氣持を起すやうになつたのも決して無理ではない。而して子供が母から愛せられなくなつたと思ふ事が、幼時の嫉妬の發生に最も重要なる役目を爲すのである。

他を斥けて母親を獨占しなければ濟まされない此の心持は、時に非常に原始的な形をとるものである。アンナが二歳の時、妹は療養所に於て生れた。アンナが始めて赤ん坊を見たのは此處であり、それを大變面白がつて居た。やがて母親が赤ん坊をつれて家に歸つて來た時、赤ん坊は母の胸に抱かれて居た。それを見てアンナは泣き出した。子供を默すために父親は、赤ちやんはお母さんを食べやしないから、と言つて聽かせた。此の時からアンナは直接間接に赤ちやんはどうして生れるのかといふ事を訊き始めた。訊かれる度に父親は、赤ちやんはお母さんのぽんぽの中で大きくなつたのだよ、と話してやつた。明かに此の答は値打のある答であつたに違ひない。併し、アンナの心の奥底には、赤ちやんは鸛の鳥が運れて來るのだといふ話がこびりついて居て離れなかつた。アンナは眞實を認める事を拒んだ。

此の事實を報告して居るイムレ・ヘルマン氏は、これは嫉妬に因るものであると言つて居る。アンナは自分の妹が

母親に抱かれる親しさを、どうしても許す事が出來なかつた。併し乍ら、結局アンナも眞實を認めさせられるに至つた。そして欝積した嫉妬は、積極的な證明によつて解消せしめられ、此の子供も亦母の身體との接觸を喜ぶやうになり、母の胸に取りすがり再び乳を呑むやうになつた。

弟や妹の現れ來つた爲めに起す嫉妬心は、上の子供の性格や行爲の上に、多少なりとも必ず面白くない影響を與へるものである。ウェスターマン・ホルスチイン・ウィッセリングは或る女の子の夢について次の如き事實を報告して居る。マヤは三歳の女兒、三月前に弟ヤイラが生れてから、マヤの性質は明かに變化した。マヤは別にはつきりした理由もないのによく泣く、そして其の泣いて居る間は、すつかり赤ん坊の泣き聲を眞似する。斯ういふ眞似はふざけて居る時にもする。マヤの夢は次のやうである。

1 暗くなつて、叔母さんが自動車でやつて來た。お母さんはマヤを自動車にのせて連れて行つて呉れると約束した。併しお母さんはマヤを置いて一人で出て行つてしまつた。

2 男の人が寢室にはいつて來た。そして窓からお皿をみんな擲げた。そこでお皿は皆こはれてしまつた。

此の夢の第一の部分に於ては、マヤが母親に見捨られはしないかと感じて居る事をよく物語つて居る。第二の部分に於ては、此の狀態に對する反應が見られる。併しその反應は覆面せられて居る。事の眞相は次の如き事實との聯合によつて始めてはつきりして來る。其の前夜、マヤは猫が窓から落ちて怪我をしたといふ事をきいた。此の時猫はひどく泣いたといふ。マヤにとつて此の話は強く響いた。少し後マヤは庭に居たが、其の時赤ん坊の泣く聲を聞いて、マヤは斯う言つた。「ヤイラは泣いて居る、きつと窓から落ちたに相違ない」と。誰でも自分の信じようと思ふ事を信ずるものである。そしてマヤの此の假定は自分の心の中に甚だ不合理乍ら眞實として燒付けられ、マヤの弟に對する感情は、夢の中では皿が弟の身代りとなつて現れて居る事を、當然吾々は認めなければならぬのである。

皿に對する此の解釋は、當然過ぎる程當然であつて、子供といふものは殆ど大多數の場合、マヤが夢の中でしたや

うな行爲を事實の上にするものである。斯ういふ時子供は物を窓から擲げる。之等の行爲を分析して見れば、此處に吾々は代表的な象徵的な行爲に直面して居る事を認め得るのである。其處で子供は自分の氣に食はぬ敵を擊退するために、自分の慾求——無意識の中に押し込められたる慾求——を間接に表現するのである。斯ういふ行爲はクラシックの作家の書いたものゝ中にも現れて居る。ゲーテは或る日窓から壞れ易い品物を澤山に抛り出し、それが粉々になるのを見て、目茶に敵をやつつけたやうな痛快味を經驗したと言つて居る。精神分析から言ふと、之等の品物は若き詩人の澤山の兄弟を象徵すると解釋せられる。此の點から見てゲーテはユーゴー以上に人非人であつたかといふ事が問題になるがさうは言はれない。(フロイド「分析藝術論」の內)

併し子供の行爲といふものは、必ずしも常に叙上の如く明確にきまつた形に現れると限つては居ない。實際物によつては、其の物の眞の意味を發見するために、愼重なる分析を必要とする場合もある。バーバラ・ロー Barbara Law は「行爲に於ける無意識」の中に、十歲の男の子で次のやうな一例のある事を擧げて居る。

此の子供は、算術の計算をするとか、代數の問題を解くとか、其のほか何でも考へごとをする時には、いつも幻想の中で一種の模樣を織つて居る。此の模樣については、子供は別に何の意味も考へて居る譯ではない。子供は何といふ事なしに之を眼前に空に描き出すのであつて、而も此幻影は常について廻つて追ひ拂ふ事が出來ない。分析の結果やつと手懸りを得た、それによると、此の幻影は、彼が自分の弟に對して抱いた嫉妬と、母が弟をばかり可愛がる事に對する敵意、さういふ樣な幼い時代の心的經驗に關係あるものであつた。

兄弟喧嘩に基く子供の性格の動搖は、時に家庭悲劇の結果である場合があつて、兒童期を過ぎても尙繼續する事がある。斯くの如き場合に於ける悲劇の發展は屢々全生涯を通じて見られる。私は或る二人の兄弟の場合を思出す。此の二人は二年半しか歲の隔りがない。兄の方は弟が生れるとすぐ反逆し始め、橫暴な態度を採り、赤ん坊の存在を全く無視するが如く振舞つた。而も此の兄の仕事の內容、其の勢力、其の成功は、いつも父親の激賞する所であつたから、それは弟にとつては絕えざる屈辱の源泉であつた。弟はいつも冷遇せられて居る心地がして、母に對して優しい

愛撫を此の上もなく願ふやうになつた。併し此の渇望は滿たされなかつた。その結果此の子供は後に至つて無駄遣ひ屋になつた。それで母親は始終此の子供に小遣を當てがつてやる事にばかり骨折つて居なければならなかつた。母親は此の子供のために總てを捧げて盡したのであるけれど、子供は母親が自分に善い事をして呉れたとは思つて居なかつた。彼の要求する所のものは、滿し難いものであつたからである。彼が子供の時代に受けたと信じて居る不公平な取扱ひに對しての埋合せは、何物を以てしても足らないからである。子供は家庭を嫌ひ拔いて遂に家出し、金を澤山持ち出して使ふやうになつた。十八の時入營したが、ぢきに又兵營から脫走した。此の子供の落付がない、そして不平ばかり言ふ性質は、如何なる地位にも長く留る事を困難ならしめ、身を固める事を不可能ならしめた。其の間に兄の方は成功して立派な人間になつて居るのである。此の事は二人の兄弟の相違を益々大きくする計りであつた。併し乍ら結局之は、弟の方が母の愛撫を常に要求して、いつまでも子供で居たいと希ふ所から來て居る事、まことに明白である。

幸にして物事はいつも斯うなると限つて居ない。とは言ひ乍ら兄弟姉妹の間に於て、大人になるまで拔けきれない祕かなる怨恨を持たない者と言つては甚だ稀である。此の怨恨は幼時の鬪爭心の殘骸であつて、それを吾々は「どうも兄弟でも違ふもので」とか「私の弟は性質が全然私と違ひますので」とか、或は又「私達は仲良しですけれど、何處かに氣の合はない所があるのです」といふやうな言ひ譯をして居るのである。斯ういふ言葉を吾々は何と多く聞く事であらう！ 此の骨肉の間に於て、相似るべき自然の性情は失はれて、相異る姿のみが作られて行く事實は、何人も認めざるを得ないであらう。一たび精神分析的方法が斯かる問題に適用せられた時、吾々は始めて精神分析なるものゝ正當なる價値をはつきりと見出し、之を評價し始める。

此の種の惱みは、唯單に惱む人の行爲及び氣質を見るだけに局限すべきではない。神經症的徵候の素因となる本人の健康如何をも掘り下げて行つて、それが如何なる現れを爲すかを見るべきである。

アルフレッド・アドラーの報告せる七歳の女兒。此の子の父親は此の子を溺愛して此の子を臺無しにしてしまひさうであつたが、併し母親は此の子に對しては非常に嚴格で、反對に下の子供に對してはひどく甘かつた。それ故に女の子は自分の妹に對して、全くひけ目の位置にある事を感じて、之に對する反應を起して、學校でも家庭でも自慢ばかりして居た。女の子は妹を少しも可愛がらなかつた。此の子にとつては妹は常に敵であつた。此の子はちつとばかり身體の具合が悪いと大騷ぎをした。そして何か病的な徵候が現れると、此の子は復讐の感情を滿足させる事が出來た。病氣となると父親は此の子に全く奉仕し、母が此の子にかまつてやらない埋合せに、子供の氣儘と空想とを思ふ存分遂げさせるやうにした。或る日母親はそんな事をしては子供を臺無しにしてしまひますよと、とても強く責めた。此の女の子が神經症的苦惱の發作を始めて起したのは、實に此の晩であつた。之は明かに此の女の子が激しい反逆を起したもので、此の發作の故に、父親は更に一層多くの時間と勞力を此の小さき娘のために費さなければならなくなつた。そして母親も、もう斯うなつては苦情を言ひ出す事も出來なかつた。

「人間の無意識的闘爭」に於て、ウィルフリッド・レーは他の著者の文を引用して、或る女兒の心理的盲目に就いて述べて居る。此の女兒の病的狀態は分析の結果、類似作用——否、次に記すが如き同一化——が根柢になつて居る事が明かになつた。此の女の子は弟や妹を世話しようと絶對にしなかつた。(弟も妹も同格な人間だ、弟や妹が自分に何もして呉ない以上、自分も何もしてやる必要がない、と考へたのである。)女の子は一層のこと盲目になつたらとさへ考へた。盲目になれば弟妹のために色々な事を見てやらなくともよい事が分かつて居たからである。換言すれば、盲目になれば無能力者と同樣になる。そして、段々責任を負はなくてよい事になるからである。此の子供は、家族の者に對しては何も責任を負ひたくないと思つて居たし、事實又何にもしなかつたのである。

私の弟子が報告して呉れた次の如き遺尿症の例がある。これなどは覆面せられたる復讐の驚くべき適例である。マデレーンといふ女兒、生後十七ケ月になつた時、妹のジャッキーは生れた。マデレーンは妹に對して嫉妬を起さなかつた。反對にマデレーンは赤ん坊に非常に興味を持ち、赤ん坊のおしめの世話を手傳ひ、他の者には決して手傳はせ

なかつた。そして子供らしい言葉でいつも「私の赤ちやんよ」と言つて居た。ジャッキーは善いおとなしい赤ん坊で食べ物を食べさせるとか、洗濯をするとか、着物をきせるとか、いふ以外は、他人に厄介をかけるといふ事が全くなかつた。マデレーンは十八ケ月になつた時、殆ど寢床におしつこをしなくなり、二十ケ月になつたら全くしなくなつた。ところが赤ん坊が大きくなつて、もつと世話をしなければならなくなり、芝生で遊べるやうになり、咽喉を鳴らし足で蹴る事が出來るやうになつた時、即ち簡單に言へば皆が赤ん坊を注意し、赤ん坊について騷ぐやうになつた時、マデレーンは變つて來たのである。三歳半になつた時、此の子供は又寢床におしつこをするやうになつてしまつた。そしてどんな事をして見ても、此の惡習は治る樣子がなかつた。マデレーンは赤ん坊と同じやうになり、同じやうに保護せられんことを望んで居た。此の子は人に世話して貰つて居さへすればよいのであつた。

併し此の子は兩親が居ると態度が變り、妹のジャッキーを虐る事ばかりした。其の頃子供は母に對して不快な氣持を現し始め、言ふ事をきかなくなつた。そして母親が小言をいふと「父さんに言ひつけるから」と言つては母親をおどかした。三歳七ケ月になると此の女の兒は、母親がジャッキーばかり可愛がると苦情を言ひ續けた。此の頃段々神經質になつて來て、咽喉を變に鳴らすやうになつた。惡習は段々ひどくなつて來た。そこで子供は五日間ばかり他所にやられて自分の友達と一緒に泊らせられる事になつた。所が其處に行つての第一夜に於て、マデレーンは決しておしつこをしないからと言つて敷布の上に防水布を敷く事を承知しなかつた。そこで言ふ通りにしてやつたところ、五日間といふもの一度もしくじらなかつた。併し家に歸つて來ると直ぐ又寢床をぬらすやうになつてしまつた。其處で其の次の晩母親は防水布を取りのけて、お前にはもう大きい子と同じやうにして上げるのだからと言つた。それからといふもの、四日に一度位しか、しくじらぬやうになつた。ところがマデレーンは今度は自分の寢床と妹の寢床を比較し始めた。此の頃妹の方はもう蒲團をぬらさぬやうになつた所から、大きい綺麗な蒲團に寢させられて居た。其の頃一時家族は他所の家に起臥せねばならぬ事になつたので、寢床をぬらしては大變だといふ所から、又防水布を用ひる事にした。それ以來マデレーンは又、毎晩遺尿するやうになつた。


15

數週間の後、マデレーンとジャッキーは母と共に獨逸を立つてジュネーヴに行つたが、其の時父は一緒に行かなかつた。此の長旅に出る前に、母親はマデレーンに向つて、ジュネーヴに行つたら、大人と同じやうに大きいベッドに寢させてやると話した。マデレーンは之を聞いて、かなり喜んだのであつたが、でも疑深く斯うきいた。

「そいで。ジャッキーもあたしと同じに大きいベッドに寢るの？」

「いゝえ、ジャッキーのは小いです。」

之を聞いてマデレーンの喜は底知らずだつた。そして、〝私は大きいベッドに寢るんだ、ジャッキーのよりも大きいベッドに寢るんだ。」と繰り返し〳〵言つて居た。

ジュネーヴに着くと、マデレーンは約束通り大きいベッドに寢かされた。それ以來此の子供は再び寢床をぬらさなくなつた。母に對する態度もジュネーヴ到着後數日にして、ずつとよくなつた。マデレーンはよく言ふ事をきく誠に愛すべき娘になつた。今ではもうお母さんは妹ばかりを可愛がる、といふやうな不平は言はなくなつた。

すべて之等の障害は、殊に最後の場合の如きは、密接にカイン・コンプレクスに關聯したものである事は疑なき所である。遺尿症の如きは事實、殆ど常に赤ん坊にならうとする隱れたる願望の現れである、それによつて夜も晝も大人の注意を自分に惹きつけて置かうとするものであると解釋せられる。最初に於てマデレーンは自分の心的葛藤を解決する二つの方法の間にさまよつて居る。一つは赤ん坊時代へ退行の願望であり、一つは優越的積極的態度の現れであり（妹に對して「私の赤ちやんよ」と言つて居る點）之によつてマデレーンは赤ん坊のジャッキーの出現によつて自分の感じた劣等感に對して、埋め合せをしようとしたものである。此の第二の方法は確かに第一の方法よりもよき解決法である。多くの場合斯くの如き埋め合せは其の結果に於て幸福感の充足となつて居る。何となれば弟なり妹なりに對して優越感を味ふ事を確實にする行爲は、其の子供を十分に滿足せしめるからである。

子供といふものは或る解決の仕方に赴くかと思ふと、又他の解決に赴くといふ風にいつも動いて行くものである。グリーンは此の事實を説明する二つの場合を報告して居る。九歳の男兒、此の子の鼻は赤ん坊の弟が生れてから、其

の附根から飛び出して來たが、それは母に對する深い怨恨の情と弟を征服しようとの願望に刺戟された爲であつた。此の子供は牝虎を殺す夢を見る。（牝虎は子を連れて居る時に一層獰猛になることは、周知の通りである）子供は牝虎を殺し赤ん坊の虎を捕へる、その赤ん坊の虎は、子供について歩いてよく言ふことをきく。斯ういふ夢を見るのである。併し支配しようとする願望、力を振はうとする意志は、單に幻想の方法によりては滿足する事が出來ない。吾々が今問題にして居る此の子供の場合に於ても、子供はそこで自分の室に閉ぢ籠つての方法を考へて居る、彼は床の中に這入つた時でさへも、冒險談やお伽話によつて、自分を滿足させる事を考へ、英國の事を取扱つたもの、昔の歷史を取扱つたものなどを盛に讀んで居る。第二の例は三歲の女兒で、自分より小さい妹が居る。此の子は母親が赤ん坊を世話するのを見て居られない。その苦惱を解決するために、色々な方法で母の眞似をする。危つかしい子供らしい手附で、赤ん坊の世話を手傳はうとする。併し此の子供の熱心さも、時に認められない事があつて、何故そんな邪魔ばかりし居るかと言つて叱られると、其の時の答はいつもきまつて「私がしたいからなの――」と、斯うである。

それ故に斯かる場合、吾々は決して針小棒大に事を論ずる必要はない。之等の子供らしい敵愾心が如何に激しく起つたにしたところで、總て何とかうまい解決をつけ得るものである。父母に對する愛と幼時に於て旣に現れ來る所の道德的義務感と此の二つが、都合よき解決に達せしむる力となる。マリー・ボナパルトはフランス語による精神分析學第五回會議の講演に於て、幼時に於て共に遊び得る兄弟姉妹を持つものゝ利を强調して居る。卽ちこれ等の場合に於ては、最初に感じた所の嫉妬の代償として盛な愛が起つて來る。斯ういふ子供が大人になつた時、多くの人々の中に伍して、人々に對する交情は非常に尊いものとなるのである。兄弟姉妹の間に生ずる自然な爭を解決し得た子供は其の方法を引き續いて學校友達の上に及ぼし、更に後に至つて世間の交際にまで及ぼすのである。

アドラーの指摘する所によれば、長男長女の中には何か知ら嚴然とした保守的な精神を持つ者が多いが、次男次女は反抗的な性質のものが多く、末の子は怠惰に赴く傾がある。何故ならば末の子は家中の者から甘やかされ大事にさ

れるからである。之等の相違は、一人一人の子供について生後最初の數年間の境遇について觀察するならば、之を容易に知る事が出來るであらう。"L'Action Francaise" の主人公シャール・モーラの場合を考へて見れば、長男が如何に保守的の性質を持つて居るかがはつきり分る。彼の幼年時代の回顧を述べた最初の數頁に於て、彼は次の如き告白をして居るが、之はたしかに强い自己省察を示して居るものである。

『父は歌つたり踊つたりし乍ら、赤ん坊が生れるんだといふ事を私に話して吳れた…だが私は永いこと獨りつ子としての生活に馴れて來て居る。それで私は自分の小さな敵を嫉妬の眼を以て見、「これから先、母さんが私を抱いて吳れることが、どんなに少くなつてしまふ事だらう」と思つた。すると父は私の手をとつて「おい坊主、俺達は男だ强くならなくちやア――」と言つた。』…此の場合、子供の地位は秩序と權力との間に追込まれてしまふのである。ところがもう一つ別の場合、下の子供が異常に野心的であり、大に獨創的な考へを持つといふ場合は、さきに例を擧げたビクトル・ユーゴーに於て之を見る事が出來る。

幼兒期の嫉妬の抑壓や轉移の總ては、進んで社會的な態度を採るに至つて始めて消え失せる。斯くの如き子供らしき鬪爭心は、實は吾々の社會的感情の基礎となり得るものであるといふ事を考へなければならない。フロイドによれば吾々の正義觀や責任觀も、幼時の鬪爭心に出發する。若しも子供が優先權を得られなかつたり、寵兒となる事が出來なかつたりしたならば、子供はせめてもの願望として現代の人々の誰もが同じき權利を持つべきである、と考へるやうになる。これは自己の望む最少の要求であつて、僅に「正義なれ」と望むに過ぎない。

之等の事實は、或る種の社會改造論者達が社會は「正義」と「友愛」の上に純粹に築き上ぐものであると說くが、それだけでは甚だ危き存在を持つことの理由となるのではあるまいか。正義は單に利己心の代りに過ぎず、友愛は鬪爭心の變形なる事明である。吾々は己れの欲すると否とに係らず正義以上に赴き慈悲に依つて進まなければならぬ。而して慈悲は愛である。併し愛は兄弟關係の境地からは生れない。それは親子の關係の間に生れるものであり、之が吾々の次に論ぜんとする問題である。（續く）

# 五歳男兒の恐怖症の分析（フロイド）

――Analyse der Phobie eines fünfjährigen Knaben (1909), Sigm. Freud――

大槻憲二譯

## 一　ハンスの幼兒性感

次に述べる極幼少患者の病歴並びに治療過程は、嚴密に云へば、私自身の觀察に依るものではないのだ。私は全般的に、處置の計畫を自分で指圖してやるにはやつたが、さうしてまた二三度、その幼兒と親しく對話しても見たことは見たが、併し處置それ自身は子供の父親が行つたのだ。で、私は彼の手記を公表することを私に許してくれたその父親に對して、深く感謝するものである。父親の功績は、併し、それのみに留らないのだ。普通の人には子供を動かしてそこまで本音を吐かせることは出來ないであらうと私は思ふのだ。父親としてその息子の種々な表情や表現の無意識的意義を、依つて以つて解釋し得たところの專門的經驗知識たるや、何物を以てしてもその代りとなすことは出來ない。それほど頑是ないものに對して分析を施すことの技法上の困難は、非常なものであらう。たゞ父としての權威と分析醫としての權威とが一人に體現せられ、慈愛的な興味と科學的興味とが同一人に於いて合致したが故に、分析法を兒童に適用する（普通にはこれは不適當なのだが）*ことがこの場合に可能となつたのだ。

註*今から廿六年前の論文であることを考へて頂きたい。この當時に於いてはフロイドさへ幼兒分析を不適當と考へてゐた。（譯者）

併しながら、この幼兒神經症病者の觀察の特別な價値は、次の點に存するのだ。――成人の神經症者を精神分析する醫師は、精神的構造を層的に剝がして行く彼の操作に依つて、遂に幼兒に於いて既に性感の存することを

容認しなければならないやうになつた。さうしてその幼兒性感の構成要素中に於いて、後年の生活のあらゆる神經症的症候の衝動力を發見し得ると、分析醫は信ずるのである。私はそれ等の說を、一九〇五年に公にした拙著『性說に關する三論文』の中に述べておいた。この說は、門外漢にとつては、如何にも唐突な說と見えることは、分析者にとつて、否認すべからざるものと見えると同程度であると云ふことは、私にもよく分つてゐる。併しながら分析者と雖も、また幼兒が性感を有すとのこの根本的命題をより直接的に、より手短かに、證明して貰へたら有難いと云つたとて、かまはないのである。そこで、直接兒童に就いてまざ〳〵とその性的亢奮や願望構成(それ等を我々は成人に就いては、非常な骨折りに依つて掘り出したのだが)を知ることが不可能であるにしても、我々はそれ等の性的亢奮や願望構成が萬人の素質的な共通財であり、たゞ神經症者に於いてはそれ等が强められ、或は不統一に露出してゐるのだと云ふことを、なほ主張しておく。

　そのやうな意圖の下に、私は年來自分の學徒や學友を促して、大抵は巧みに看過せられ、或は意圖的に否認せられてゐる幼兒的性生活に就いての觀察を蒐集して貰ふやうにして來たのである。このやうにして賴んでおいたゝめに私の手に這入つて來た材料の內でも、次に揭げる幼兒ハンスに關するものは、最も優秀な位置を占めることになつたのである。ハンスの兩親は共に私の說の支持者であつて、彼等はその長男を何等强迫的には教育せず善良なる風俗の支持にまで、無條件的に必要になる限りに於いてのみ强迫を用ひようと云ふことに意見の一致を見た。ところがその子供が成育してやがて明朗な、善良な、快活な少年となつた故に、威赫せずして彼を成長させ、自分を表現させようとの試みは、よき進展を示したのであつた。私は今や、幼兒ハンスに關する父親の記述を私に渡されたまゝに再錄する。さうして勿論私は、子供が自分の部屋で示した素朴さや正直さを因襲的な善惡觀念を以て歪めるやうなことは悉く避けるであらう。

　ハンスに關する最初の報告は、この子がまだ滿三歲にならない頃のことから始まつてゐる。彼は當時、旣に自分の身體の例の部分に對して特に活々とした興味を寄せてゐたことは、種々な話や質問によつて分つた。彼はその部分を『オチッコスルトコロ』"Wiwimacher" と呼び慣はしてゐた。で、彼は嘗てその母に向つて、かう訊いた。

　ハンス『ママちやんもやつぱりオチッコスルトコロあるの?』

母『えゝありますとも。どうして？』
ハンス『ちよつと考へて見たの。』
同じ年に、彼は或る時、或る牛舎に行つて、牝牛が乳を搾られるところを見た。『おや、見て御覽、オチッコスルトコロからお乳が出る。』

既にこれ等の最初の觀察を以てしても、幼兒ハンスが我々に示した多くを（大部分ではないまでも）子供等がその性的發展の典型的のものとして示すであらうと云ふことを、我々は期待するやうになる。私は嘗て論じたことがある、女子に於いて男性器を吸莖する觀念の存することを知つたとて敢て驚くには當らないと。それは實は何でもない原因（母親の乳房に吸付いたこと）に由來してゐるのだからである。で、この觀念の生ずるに就いて牛の乳房は適當な仲介——その性質から見れば母であり、その形態と位置から見れば男性器である——の役目を果したのである。幼兒ハンスが牛に就いて發見したことは、私の與へた命題のあとの部分（乳房と男性器との同一視）を確證してゐるのである。

オチッコスルトコロに對する彼の興味は、併し單に理論的なものではなかつた。男性器に觸れたいと云ふ衝動を感じたことは、察せられる。三歳半の時に彼はその性器を持つてゐる手を母親に抑へられた。母親は脅した。

『坊やはそんなことするなら、A先生（醫師）を呼んでオチコッスルトコロを切つて頂くよ。そしたら坊や、何處からオチッコする？』
ハンス『お臀でする。』

彼の返答にはまだ罪障感はないが、併しこの機會に彼は『去勢コムプレクス』を持つやうになつた。このコムプレクスは神經症者を分析して見ると、非常に屢々認められるものであるが、彼等は槪してそれを承認することに激烈に抗爭するものである。幼兒發達途上のこの要素の意義に關しては、多くの云ふべき重要な事がある。『去勢恐怖』は、神話に於いて（敢へてギリシア神話に於いてのみとは云はず）著しい痕跡を殘してゐる。私は拙著『夢の註釋』その他に於いて、このコムプレクスの如何に重大であるかを論じておいた。*

註（一九二三年附加）・去勢コムプレクスの說はその後 Lou Andreas, A. Stärcke, F. Alexander 等の研究に依つて一層廣汎な構造を持つやうになつた。乳房を引離されることは、その度毎に去勢として、當然自分の肉體に屬すべき重大な部分を奪ひとられることゝして感ずるものであると云ふことを、明かにした。乳兒が便通を出すことも同樣に感ずるものであり、また從前胎内に於いて合致してゐた母胎から出產させられることは、一切去勢の原型であることを

明かにした。このコムプレクスの根抵にこれ等一切のものゝ存在を承認するにしても、なほ私はこの去勢コムプレクスと云ふ名稱が、男性器喪失と云ふことに直接結びついてゐるところの亢奮や效果に限定せらるべきものであることを要求しておいた。成人を分析して必ず去勢コムプレクスの存在することを確信するに至つたものは誰しも、このコムプレクスを何か偶然的な、而もあまり一般的には起らない脅かしに因るなどゝは考へ得なくなるのである。さうして子供に於いてこの危險が最もおだやかな程度で（その程度に於いてはあらゆる子供に缺如してゐない）構成されてゐることを假定せざるを得なくなるであらう。實は子供に於いて既にかう云ふ傾向が見えるので、それに促されて、一般的に存するより深き根抵を探索しようと云ふ氣になつたのである。幼兒ハンスの場合に於いてその去勢脅威の存在が（而もまだこの子供の恐怖症が勃發せざるこの早期に於いて）兩親に依つて報告せられてゐると云ふことは、愈々以て我々には參考になることであるのだ。

大體同じ年頃に、彼はシェーンブルンの動物園で獅子の檻の前で嬉しげに亢奮して、かく叫んだ『僕、獅子のオチッコスルトコロ見たよ。』

動物は神話や童話に於いて相當重要な役目を果してゐるが、それは彼等が好奇的な人間の子供にその性器を、或は性的機能を露骨に示すためである。我等の幼いハンスの性的好奇心は何等懷疑に惱んだことはないが、併しそのために彼は研究的となり、正當な概念的認識を持つやうになつた。

彼は三年と九ケ月の頃に、驛頭で機關車が水を吐き出すところを見たことがある。『おや、機關車がオチッコしてゐる。一體、オチッコスルトコロは何處にあるの？』

暫時經つて、彼は追想するものゝ如くかう云つた『犬や馬にはオチッコするところがある。机や椅子にはない。』かくして彼は生物と無生物とを別する本質的徵象を知るやうになつた。

知識慾と性的好奇心とは、相互に區別することが出來ないやうに思はれる。ハンスの好奇心は特別に、兩親の上へ及んで行つた。

ハンス（三年九ケ月頃）『パパちやんにもオチッコスルトコロあるの？』

父『あゝ、あるともさ。』

ハンス『だつて僕は、パパちやんがそれを引張り出してゐるのを一度も見たことがないんだもの。』

また或る時、母が就褥前に着物を脱いでゐるのを、彼は緊張して見てゐた。母は訊いた。『坊やは何をそんなに見てゐるの？』

ハンス『ママちやんにもオチッコスルトコロがあるか

どうか見ようと思つて・・・。』

母『ありますとも。ぢやア坊やはそれを知らなかつたの？』

ハンス『知らなかつた。ママちやんは隨分大きいからオチッコスルトコロも馬のやうに大きいんだらうと思つたの。』

我々は、幼兒ハンスのこの期待を注意して居たいと思ふ。この期待がやがて大きな意義を帶びるやうになつて來る。

ハンスの生活に於ける大事件は併し、小さい妹ハンナの生れたことであつた。それは彼が三歳半の頃（一九〇三年四月から一九〇六年十月まで）であつた。この出來事に際しての彼の態度は、父親が直接に手記してゐる。――『早朝五時頃、陣痛の始まりと共に、ハンスの寢床は隣室に運ばれた。隣室で彼は七時に目を醒まし、産婦の呻きが耳に入ると尋ねた。『ママちやんは何を苦しさうに咳してゐるの？』――少し間をおいてから云つた、「今日は屹度、鴻の鳥が來るんだよ。」

『我々は勿論、その頃よく鴻の鳥が赤ちやんをくわへてくるのだと云ふことを話して聞かせてゐた。で、彼がその異常な呻きを鴻の鳥の來着と結付けたのは、全く正しかつた。』

『後に彼は臺所へ連れて行かれた。茶の間に彼は醫者の手提鞄を見て尋ねた。――「あれなアに？」それに對して人々は答へた。――「手提鞄よ。」そこで彼は確信した。――「今日は鴻の鳥が來るのだ。」と。取上げが濟んでから助産婦は臺所へ遣つて來て、お茶をいれて下さいと云ひ付けてゐるのをハンスは聞いた。そこで彼は云つた。――「ママちやんは苦しさうに咳をしてゐたのでお茶を飲むんだね。」と。彼はやがて産室に呼ばれて行つた。併し母親の方へは眼をくれないで、血水の這入つてゐる桶がまだその室にあつたので、その方に眼をやり、また血だらけの虎子(おまる)の方を指しつゝ、驚きつゝ云つた。――「併し、僕のオチッコするところからは、かう云ふ血は出ない」と。

『總て彼の云つてゐるところから見ると、彼がその場の異常さと鴻の鳥の來着と云ふことゝを結び付けてゐることが明かである。彼は自分の見る總てのものに對して、一つの甚だ不信的な、緊張した態度を持つてゐることが分る。就中、最も怪しいと見てゐるのが鴻の鳥である。ことが分る。』

ハンスは新來の赤ん坊に對して甚だ嫉妬的で、誰かがその赤ん坊を賞め、好い子だなどゝ云はうものなら、忽ち嘲笑的に「だつてまだ齒がないや」と云ふのであつた。

彼が始めてその赤ん坊を見た時の如きも、彼はそれがまだ口を利くことの出來ないのに驚き、それは齒がないためであると考へた。彼は最初の日に旣に明かに非常に淋しさを感じ、忽ち口峽炎を病むことになつた。熱の中で彼は囈語を發つのが聞こえた。――「併し僕は妹なんか要らない！」と。

『その後、約半年經つて嫉妬は克服せられ、自分の優越を意識した優しい兄となつた。

『少時後に、生後一週間の妹に人々が行水を使はせてゐるのを見て、ハンスは云つた。――「併しハンナのオチッコスルトコロはまだ小さい。」と。さうして慰め顏にかう云ひ添へた。「併し妹が大きくなつたら、あそこも大きくなるだらう」と。

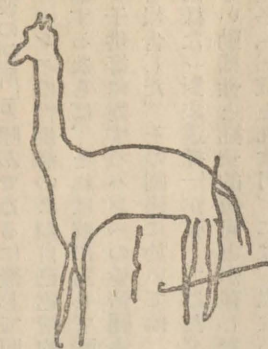
「同じ年頃（三歲九ケ月）に、ハンスは始めて夢の話をした。「今日僕は寢てゐた時に、マリちやんと一緒にグムンデン（譯者曰、オーストリの田舍の地名）に行つてゐたところを夢に見たよ。」

『マリちやんと云ふのは、十三歲になる家主の娘で、彼の平常の遊友達であつた。

ところが父親が本人の前でその夢の話を母親に話してゐると、ハンスは訂正するやうにかう云つた。「マリちやんも一緒ではなかつたの。マリちやんと二人だけだつたの。」

こゝで云つておかねばならないことは、「ハンスは一九〇六年の夏にグムンデンに行つてゐた。そこで彼は家主の子供達と遊び廻つてゐた。我々がグムンデンから出發した時に、ハンスには別れて都會に歸つて行くのをいやがるであらうと我々は信じた。ところが、不思議なことに、彼はそれをいやがらなかつた。彼は明かにその變化を喜び、幾週間もの間グムンデンの事をあまり口にしなかつた。數週の後に始めて、グムンデンで過した時分の華やかな記憶がより屢々活々と蘇つて來た。四週間ほど過ぎてから、彼は、これ等の記憶を空想化して行つた。彼はベルタ、オルガ、フリッツェル等の子供たちと遊んでゐるところを空想し、彼等が宛もそこに居合すかの如くに共に語り合ひ、このやうにして幾時間もを一人で樂むことが出來た。ところが今や彼は一人の妹を持つことになり、子供を持つことの問題が明かに彼の關心するところとなつて來たので、彼はベルタやオルガを單に「彼の子供」と呼び、また嘗て彼はかう附言した。――「私の子供のベルタやオルガもやはり鴻の鳥がくわへて來たのだ。」と。グムンデンを去つて以來、六ケ月目のこの夢は明かに、彼がグムンデンへ行きたいとの憧憬の表現として理解せられる。」

以上のやうに父親は述べてゐる。そこで私はなほ一歩を進めてから云はう。ハンスは最後に擧げてある、彼の子供に關する（子供らが鴻の鳥に依つてくわへて來られたとの話）に依つて、彼の心內に蟠つてゐる疑問に對して公然反對してゐるのだと。

父親は、幸にして、いろ〳〵なことを手記しておいてくれた。それが後になつて思ひがけない事に役立つのであつた。「ハンスは先頃屢々シェーンブルンの動物園に行つてゐたので、私は彼に麒麟を描いてやつた。彼は云ふ、「オチッコスルトコロも描いて――。」で、私は答へる「自分で描いたらいゝぢやないか。」それで彼は麒麟の畫に線を描き足す。（插圖參照。）その線を彼は始めは短く引いたが、後でも少し長く引延しながら云つた。「オチッコスルトコ、も少し長いや。」

『私はハンスを連れて、小便をしてゐる馬の傍を通り過ぎた。「馬のオチッコスルトコロ、僕のと同じに、下の方に付いてゐる。」

『生後三ケ月の妹を行水させてゐるところをハンスは眺めてゐて、愍む如くに云つた。「オチッコスルトコロ隨分々々小ちやいな。」』

『彼は人形を持遊び、それの着物を脫がせる。彼はそれをまじ〳〵と眺めてゐる。さうして云ふ。「併しこの人形のオチッコスルトコロは隨分小ちやいんだな。」と。

彼の發見（生物にはオチッコスルトコロがあり、無生物にはそれがないとの發見）が正しく支持されてゐるのは、このためであることは、我々に旣によく分つてゐる。

如何なる研究者でも、時には誤謬に陷ることのあるものだ。併しその研究者も、次の實例に於ける我々のハンスのやうに、たゞ一人で誤つてゐるのではなく、言葉の用法にもやはりそれに近いことの行はれてゐるのに徵して、やゝ慰めとするに足るのである。つまり、ハンスは自分の繪本の中に猿を見、上の方に向けられてゐる尾を示して云つた。「御覽、父ちやん、オチッコスルトコロ。」

オチッコスルトコロに對して興味を持つてゐるところから、彼は一つの全く特別な遊戲を考へ出した。『臺所の隣に便所と暗い薪小屋とがある。少し以前から、ハンスはこの薪小屋へ這入つて、さうして「僕、便所へ這入るんだ」と云ふ。その暗いところで何をしてゐるんだらうと思つて、私は嘗て覗き込んで見た。彼は露出させて

「僕オチッコするんだ」と云つてゐる。それはつまり便所「ごつこ」をしてゐるのだ。その「ごつこ」（お芝居、遊び）の特質の何たるかは、彼がオチッコの眞似をしてゐるのみで本當には何もしてゐないと云ふ事から分るばかりでなく、また彼が實際の便所には這らずに（這入るにはその方が容易であるのに）薪小屋の方に這入つて、そこを「彼の便所」と呼んでゐるに徴して明かである。

ハンスの性生活のこの自己色情的特徴のみを我々が追窮するならば、それは彼に對して酷である。彼の父は他の子供等に對するハンスの愛情關係に就いて細かい觀察を報告した。その關係に於いては、成人の間に於けると同樣な「對象選擇」が存してゐた。が、勿論、そこに著しい動搖性と亂交的傾向とが存した。

『冬（三歳と九ケ月）には、私はハンスを連れてスキー場へ行つた。そこで私の同僚Nの、十歳位になる二人の娘と彼は知合ひになつた。年長者らしい感情でやゝ見下したやうな調子でチビッ兒を眺めてゐたこの娘たちの傍にハンスは坐して、彼女等を尊敬するものゝ如く見上げてゐたが、併し彼女等にはあまり大きな印象を與へなかつた。ハンスはそれでも彼女たちの事をたゞ「僕の女の子」と云つてゐた。歸つてからも二三週間は「何時またスキー場へ、僕の女の子のゐるところへ連れて行つてくれるのか」と尋ねては、私を困らせた。

ハンスの五歳になる從兄が、今では四歳になつてゐるハンスのところへ訪ねて來た。ハンスは從兄に抱きついて、そのやうな感傷的な抱擁の間に嘗て云つた。――「併し僕は君が好きだ。」

これはハンスに於いて我々の認めるに至る同性愛の最初の特徴であるが、最後の特徴ではない。我々の小さいハンスは、實際、あらゆる惡性の典型であるやうに見える！

『ハンスが四歳の時、我々は新しい住居に移つた。臺所の扉を開くと、破損した露臺があつて、その露臺から眼の前に一軒の住家が見えた。ハンスはこの家に一人の七八歳の娘つ子を發見した。彼女を眺めることの出來るやうに、露臺の上に坐して、幾時間でも動かない。殊に午後四時頃になると、娘つ子は學校から歸つて來るので、彼は自分の部屋にヂッとしてゐない。眺望のいゝ地點へ行つて頑張つてゐる。或る時、女の子がいつもの時間に窓邊に姿を見せないと、彼はいら／＼して「前の女の子は何時歸るのか」とうるさく家人に訊くのであつた。少女の姿が見えると、すつかり機嫌がよくなつて、その家の方から眼を離さない。どうしてこのやうな「遙かな夢」（詩人ブッシュの句）がこのやうに激しく起きて來たかと云

ふに、それはハンスには遊仲間や女の子の友達がなかつたためであると解せられる。子供が正常に發達するためには、盛んに他の多くの子供たちと交らせることが、明かに必要である。』

『この事はやがてその直後、我々がグムンデンへ避暑した折に（當時ハンスは四歳半であつた。）ハンスにとつて煩ひとなつた。我々の家には、彼の遊び友達……卽ち家主の子供たちであるフランツル（約十二歳）、フリツル（八歳）、オルガ（七歳）、ベルタ（五歳）、並びに近所の子供のアンナ（十歳）と九歳及び七歳の兩女兒（私はその名を忘れた）――がゐた。ハンスの大好きなのはフリツルで、彼はフリツルに屢々抱きいつては、その愛情を示してゐた。嘗て彼に訊いて見たことがある、「女の子の內で、お前は一體どの子が一等好きなのか」と。「フリツルだ」と彼は答へた。同時に彼は、その少女に對して非常に攻擊的であり、男性的であり、征服的であり、彼女を抱いては接吻をする。その事はやはりベルタが喜んでさせた。ベルタが或る晩、部屋から出て來た時に、ハンスは彼女の頸に抱きつき、最も感傷的な調子で云つた。「併し君は可愛いな。」と云つておきながら、彼はまた他の少女を接吻し、これに愛を示すことに平氣であつた。十四歳程になるマリちやんはやはり家主の娘の一人でハンスの遊仲間であるが、ハンスはこの少女も好きであつた。或る晩、ハンスは寢る時、「マリちやんをこゝへ連れて來て、一緒に寢る」と云つた。「それは駄目」と云はれて、彼は「ぢやア、母ちやんか父ちやんの傍につれて來て寢かせ……」と云つた。「それも駄目。マリちやんはマリちやんの父ちやん母ちやんの傍に寢なけりやならないの」と母親が云ふと、次のやうな對話になつて行つた。

ハンス「ぢやア僕、下へ行つてマリちやんところで寢るよ。」

母「お前は本當に母さんの傍を離れて、下へ行つて寢ようつて云ふの？」

ハンス「ウム、だけど朝には早く上つて來て、コーヒを飲んだり、傍に居たりするから……」

母「お前が本當に父ちやんや母ちやんのところから行く氣なら、お前は上衣やズボンを持つて、さよならしなさい。」

『ハンスは本當に自分の着物を持つて、マリちやんの傍へ寢るために階段のところへ行つた。が、勿論引き戾された。』

（「マリちやんを僕の傍へ寢かせてくれ」との願望の背後には、今一つの願望があつた。卽ち「自分と仲のいゝ、マリを自分の家族の一員に入れてくれとの……。ハンス

の兩親が彼をあまり屢々ではないが、とにかく自分等の寢床に入れたことは、このやうに同衾したことは、ハンスの内にエロティッシュな感情を呼覺ましたことは疑ひがない。で、マリちやんの傍で寢たいとの願望にもエロティッシュな意味が、やはり含まれてゐる。母又は父の寢床で寢ることは、ハンスにとつては、何處の子にとつてもさうである如く、エロティッシュな亢奮の源泉であつた。』

我々の小さいハンスは。母親から挑戰を受けたのだが(彼には同性愛的傾向が發作してゐたに拘らず)正しい男の如くに振舞つた。

『やはり次の場合にもハンスは母にかう云つた。「ねえ、僕はあの女の子と一度寢たいんだよ。」この場合は我々にとつて探究のための十分な機會である。何となれば、ハンスはこの場合にも對象に惚込んでゐる大人のやうに振舞つてゐるからだ。我々が晝食をとる料理店に二三日前から八歳位になる美しい少女が來てゐた。その少女に彼は勿論、直ぐに惚込んだ。彼は椅子に掛けてゐて始終あちこち見廻しては、彼女の方に秋波を送つてゐた。食事が濟んでからも、彼女の傍へ行つては、何かと馴合はうとしてゐたが、併しそれを人に見られると、眞赤になつた。少女の視線とかち合ふと、彼は直ぐ氣まり惡さうに眼をそらせるのであつた。彼の樣子は勿論、そこへ來る客人たちの間で非常に面白がられてゐた。毎日、料理店へ連れて來られると彼は尋ねるのであつた。――『今日はあの女の子ここにゐると思ふ?』と。少女の姿が見えると、彼は丁度成人がさう云ふ場合にするやうに顏を赧らめる。嘗て彼は浮々として私のところへ來、耳元に囁くのであつた。『ねえ、僕あの女の子の居るところ知つてゐるよ。あそこで、階段を登つて行くのを僕見ちやつた。彼が自分の今ゐる家に於いては女の子たちに對して攻撃的な態度をとるのに、こゝへ來ては純愛的な、氣まり惡げな崇拜者となるのは、多分、家にゐる少女たちは村童であるに對してこゝにゐる少女は教養ある淑女であるためであらう。彼が嘗てこの少女と寢たいと云つたことは、既に言及しておいた。』

『私はハンスをこれまでのやうに、少女への愛のための精神的緊張の内に放置するに忍びなかつたが故に、彼を少女に近付けるやうに手段をとつてやることにした。少女に午後に庭へ來て彼と遊んでやつてくれるやうに云つた。その時、彼は晝寢をしてゐた。ハンスはその少女が來るとの期待のために、非常に亢奮し、彼は始めて晝寢が出來ず、寢床の中で不安げに寢返りばかり打つてゐた。母は彼に尋ねた。『何故、お前は寢ないの? 屹度あ

のお孃ちやんのことを考へてゐるんだらう?』と。すると、それに對して彼は嬉しげに『うん』と答へた。彼はまた、料理店から家へ歸つて來たとき、家中の者等に話した。――『ねえ、今日は僕んとこへあの女の子が來るんだよ。』と。さうして十四歳になるマリちやんの報告したところに依ると、彼は始終かう云つたやうなことを訊いてゐたさうである。――「ねえ、あの女の子は僕を好きになつてくれるだらうか。僕がキスしたら、あの子もやつぱり僕をキスしてくれるだらうか」と。*』

註 驚くべき變態的早熟兒と讀者は思はれるかも知れないが、接吻の觀念が西洋人と東洋人とでは違ふらしいのだ。譯者はかつて或る西洋トキーを見、或る妙齡の處女がその誕生日を祝つて集つた數名の青年に片つ端から接吻を許してゐるのを見て、呆れたことがある。西洋の觀念では、このやうな處女もまたやはり淫蕩無節操とは見做されないのだと云ふことを考へておかねばならない。(譯者)

『ところが、午後になると、雨が降つて來たので、來訪はとりやめになり、やむなくハンスはベルグやオルガで間に合せてゐた。』

その他、避暑期間中に觀察したところに依ると、その他あらゆる新しい經驗をしたらしく察せられる。

『ハンスが四歳と三ケ月の時、今日早くハンスはいつもの通り、その母親に行水を使つて貰つてゐた。さうして浴後、身體を拭つて貰ひ、テンカ粉をふり掛けて貰つてゐた。母が彼の性器に觸れないやうにその周圍に粉をふりかけてゐた時に、ハンスは云つた。――「どうして指を觸れないの?」

母「だつて、きたならしいから。」

ハンス「それが何なの? きたならしい? どうしてきたならしいの?」

母「お行儀が惡いから。」

ハンス「でも、氣持がいゝよ。*」

註 同樣な性的眩惑への試みを少女がなすものであることを自らも神經症者であるところの、(併し幼兒の自慰と云ふことは信じたがらなかつたところの)或る母親が彼女の三歳半になる少女について、私に報告してゐる。その母親は娘のためにヅロースを作らせ、それが出來て來たので、娘に穿かせて見て、歩く時に窮屈ではなからうかと內股に手を入れて上に向けて撫ぜてやつた。すると忽ち少女は、兩股をすくめて母の手を挿み、「母ちやん、手をさうしてゐて頂戴、とてもいゝ氣持。」と云つた。

我々のハンスが丁度其の頃に見た夢に、丁度彼が母に對して示したこの厚顏さと、正に驚くほど符合するのがある。それはこの子の夢として、歪みのために制らなく

なつてゐる最初の夢であつた。併し父親の鋭敏さを以てこの夢を解くことが首尾よく出來た。

『ハンスが四歳三ケ月の時の夢。今日早くハンスは起きて來て云つた。――「ねえ、今晩僕は考へたの。或る人が、誰が僕のところへ來るかと云つたの。するとまた誰だかが、私が行きますと云つたの。そこで、あとの人は前の人にオチッコをさせなくてはならないね。」

『いろ〳〵と問ひつめて見たが、この夢にはあらゆる視覺的なものゝ缺けてゐることが、純粹に聽覺型に屬することが明かになつた。ハンスは數日來、家主の子供等と就中女友達であるオルガ（七歳）やベルタ（五歳）と競技や、賭事遊び（Aが「僕の手にあるもの誰にやろか」と云ふと、Bが「私に」と云ふ。すると、同じ事を今度はBがする番になる。）をやつてゐた。例の夢はその構造をこの賭事遊びのやり方に倣つてゐるのだ。たゞハンスはかう願望したのだ。この賭を抽いたものは、普通の接吻をさせたり横面を毆らせるだけでなく、オチッコをしなくてはならない。精しく云ふならばオチッコをさせなくてはならない。』

『私はその夢をもう一度彼に話させた。彼は同じ言葉を以てそれを語つたが、たゞ「誰だかゞ云つたの」の代りに「女の子が云つたの」と云つた。この「女の子」は勿論、彼の遊び相手であるベルタかオルガである。それ故に、この夢はかう飜譯することが出來る。――僕は女の子たちと賭事遊びをやつてゐる。誰が私のところへ來るかと尋ねると、彼女（ベルタかオルガ）が私が行くわと答へる。そこで彼女が僕にオチコをさせなくてはならない。（小便をする時に助力をしてやることは、ハンスには明かに快いことであつた。）』

『子供が小便をする時にズボンを開けてやつたり、性器をとり出してやつたりすることは、ハンスにとつては非常に氣持のよい事であるのは明かだ。散歩をしてゐる時に子供にこの助力を與へてやるのは大抵父親であつて、それがこの子供の父親への同性愛的傾向の契機となつてゐる。』

『その二日前に、既に云つた通り、性器のあたりを母親が洗つたり粉を掛けたりしてやつてゐた間に、ハンスは「どうして母ちやんはそこへ指をやらないのか」と尋ねたのだ。昨日、私が彼を寢かしつけてゐた時に、彼は私に始めて、「家の背後の誰も見ない處へ連れて行つておくれ」と云つた。さうして「去年、僕がオチッコしてゐるところを、ベルタとオルガとが見たの」と附け加へた。私思ふに、これは、去年は小便するのを少女たちに見られるのは愉快であつたが、今年はもう愉快でないと云ふ

ことであるらしい。露出慾は、今や旣に抑壓を被つてゐる。自分の小便してゐるところをベルタやオルガに見させたい（卽ち、自分の小便に手傳はせたい）との願望が、今や生活に於いて抑壓されてゐると云ふことは、夢（その中に於いてハンスは賭事遊びと云ふ美しい外衣を以て性的願望を被ふてゐる）の中に於いてその願望が表れてゐることの說明になる。——その後、屢々觀察してゐるに、彼は小便の際に人から見られることを肯んじないのである。」

これに就いては私はたゞから云つておきたい。この夢もまた私が『夢の解釋』に於いて與へたところの一般的命題——（夢の中の話は、人から聽いたか、或は自分でその前日にした話に由來してゐるのだ）——に更に一つの證據を加へたに過ぎないものであると。

避暑地からギインに歸來してから、父親はも一つその觀察したところを附記してゐる。——「四歲半のハンスは、その妹が行水させられるところを見て笑ひ出した。人々は彼に「何が可笑しいのか？」と尋ねた。

ハンス「僕はハンナのオチッコするところを見て笑つてゐるのだ。」

「どうして、それが可笑しい？」——「だつて隨分可愛い（schön）から。」

『この答へは、勿論、胡麻化しである。妹の小便するところは彼には變なものに見えたのだ。それに、彼が男女性器の相違をそのやうにして承認（否認しないで）したのは、それが始めてゞあつたのだ。』（この章完）

譯者附記——右はこの論文の「序說」であつて、全部を完譯すれば、恐らくこの十倍になるだらうと思はれる大論文である。從つてこの論文の表題に掲げられてゐる「恐怖症」への言及は未だ少しもなされてゐない。この論文を續けて譯出し本誌に續掲すべきか、他日單行本の形に於いて發表するまで待つべきかは、只今まだお約束出來ない。出來ることなら前者をとりたいと思つてゐるが、何しろ大論文であるから輕率なお約束をいたし兼ねる。

# トルストイ最幼兒期記憶の分析（オッシポー）

"Tolstois Kindheitserinnerungen" (1923)—von Dr. N. Ossipow.

平塚義角譯

**小序**——オッシポーはフロイドのリビドー說に卽してロシアの文豪トルストイの幼兒時代の生活を、その手記に就いて分析してゐる。原書は一七〇頁程の一册の書形をとつてゐる。こゝにはまづトルストイの「最初の記憶」の一部分をドイツ譯（一九二一年版）から譯出引用し、次いでその部分についてのオッシポーの分析を飜譯することにした。以下、號を重ねて、同じ形式でこの譯を進展させたいと思つてゐる。（譯者）

## わが最初の記憶（トルストイ）

私はヤスナヤ・ポルヤナ村に生れ、其處で最初の幼年時代を過した。そこには私の最初の思ひ出がいくつかある。（それを順序立てる事は出來ない、どれが先でどれが後だかも分らないし、その上その多くは、夢で見たのか覺醒時に起つたのかも知らないから。）その內から言ふ思ひ出がある。——私は全身を卷きつけられてゐる。私は兩腕を自由にしようと思ふ。だがそれが出來ない。それで私は泣き叫ぶ。しかも私の叫び聲は自身にさへも不愉快である。併し、私は止める事が出來ない。誰か私の上におつかぶさつて立つてゐる。私はそれが誰か分らない。しかも、それ等凡てが朧である。然し二人であつたことを記憶する。私の叫ぶ聲は彼等の上に働きかけ、私の叫ぶ聲の故に彼等は不安を感ずる。だが、私の望む通りに束縛を解いてはくれない。それで私は益々聲高に泣き叫ぶ。つまり私が縛られてゐる事が彼等には非常に必要と見える。だが私にはそれは不必要だと分つてゐるから、この事を彼等に

示さうとする。私は大聲を立てる事は自分にも不快だが止める事は出來ないで、大聲を立てつゞける。私は不正と殘酷を感じる。が、それ等は人間の不正と殘酷とではなくて（何故なら彼等は私を憫んでくれてゐるから）運命の不正と殘酷とである。そして自分で自分に同情を寄せてゐる。私が乳のみ兒の時、人々は私を襁褓に包んだのに私は腕を自由に振廻したのか、或ひは又私がも少し大きくなつて、卽ち一年も經つた時、吹出物を掻かぬ樣に私を包んだのか、本來それが何であつたのか私は現に知りもしないし、將來も知る事はないだらう。私は夢で起つた樣な澤山の印象を、この一つの思ひ出の中にまとめて持つてゐる。何れにもせよ、一つ眞實の事は、それが私の生活の第一の、そして最も強い印象であつたと言ふ事だ。私の思ひ出に殘つてゐるのは泣き叫んだことでもなく、苦しんだことでもなく、この印象の複雜性と矛盾性とである。私は自由を欲する。自由は何人をも妨げない。さうして力を要する私は弱く、彼等は強いのだ。

　その次に覺えてゐる印象はも少し朗かなものだ。私は盥の中に坐つてゐる。人々が何かの材料で私の小さな身體を摩擦してゐると、その材料から私の身の周りに快い匂がたゞよふ。多分それは糠であつて、この糠は水の中にも盥の中にもあつたのだ。然し糠の印象が新たに私を目醒ました。そして私は初めて私の小さな身體を認め、胸部に肋骨の現れたこの小さな身體を愛し初めた。また滑らかな、黑つぽい盥、私の乳母のむき出しの手、溫かな生溫い怖い水、その噪音、殊に兩手で觸れて感じた盥の濡れた緣の滑らかな觸感などを愛し初めた。（以下次號）

## 二つの最早期記憶

### （個人我と自我リビドー）

この自傳的なスケッチは、何等傾向的意圖無しに書かれてゐるために、心理學者に、ことに精神分析者には、一つの特別な價値がある。それは自由に浮び來る思ひ出の數々を列擧してゐるのである。

　五十歳のトルストイは、その生活を最初から回想しようと努力してゐる。思ひ出は充分有るらしく思へるが、たゞそれを時間的に決定するのは、困難である。それが夢で經驗されたのか、覺醒時に經驗されたのか、彼にははつきりしない。しかし三歳に至るまで、只二つしか思ひ出が無かつた事が判明してゐる。襁褓の思ひ出と、盥

の思ひ出である。
我々は最初の襁褓の思ひ出を觀察しよう。そこに見られるものは、(一)表象。(二)心理狀態。(三)狀態の描寫記述。(四)この心理狀態を法式に還元してゐること、などである。
この思ひ出に眞實性の有りや無しやの問題は、表象や心理狀能の如何に依るが、心理狀態の描寫(記述)は、當時の狀態を五十歲の筆者の言葉に飜譯したものである事は勿論だ。またその心理經驗を「諸々の印象の複雜性と矛盾性」と言ふ法式へ還元してゐるのも、勿論五十歲になつてゐる著者のやつてゐる事なのだ。
この表象は眞實であるとしても、別に疑問の餘地はない。たゞ、一歲の幼兒がかゝる腹雜な心理狀態を經驗し得るか否か、と云ふことだけは明かに問題である。いろ〱と疑つて見た揚句、トルストイはそれでも決定的にかう言つてゐる。「それは私の、最初のそして最も强い生活印象であつた事は眞實だ」と。諸々の印象又は諸々の努力の複雜性と矛盾性は、トルストイの性格の特徴である。襁褓に包まれた際の心理狀態、つまり「私は兩腕を自由にしたい、だが出來ない、それで私は泣き叫ぶ。然も私の叫び聲は自分にさへも不愉快である。……誰か私の上におつかぶさつて立つてゐる。……それは二人であつたと記憶する。私の叫び聲は彼等の上に働きかけ、私の叫び聲の故に彼等は不安を感じる。だが、束縛を解いてはくれない。……彼等にはそれが必要と見えるのだが私はそれを不必要だと知つてゐるのだ……。私は不正と殘酷を感じる――人間が不正で殘酷だと感じたのではないのだ。何故なら彼等は私を可哀さうがつて(愛して)くれてゐるから――人間ではなくて運命が不正で殘酷だと感じたのである。そして自分で自分に同情を寄せてゐる。」――この精神狀態は、トルストイがその生活中に屢々經驗した狀態と全く一致してゐる。
我々は二つの實例を擧げて來よう。
トルストイは(自己批判後の時代に)彼の富を放棄しようと欲した。生活の物質的側面から解放されようと欲した。この努力は主として彼の熟慮から、彼の個人我から(彼の超自我からではない)生じたものだ。彼はそれを正しい行爲だと思つた。――それは「私の」努力であつて、決して「私に與へられた」努力ではなかつた。トルストイの富の放棄は、キリスト教を合理的に領解した歸結である。「人は信仰せねばならぬ。信仰無しには生活は不可能である。だが、他人が我々に向つて言ふところを信仰してはならぬ。それよりは諸君が諸君自身の思考過程によつて、諸君自身の理性によつて、自ら信仰す

るに至るものを信仰しなくてはならぬ。」*だが、これは信仰ではなくて、推理である。それ故に自己の富を分配しようと云ふ彼の願望も亦一つの推理である。――個人我の活動である。併し彼はその近親者等に縛られてゐた。そして「泣き叫」んだ。が、自分の行爲で滿足してはゐなかつた。近親者たちから解放される事は、不可能であつた。さうして彼は力を必要とした彼であつたのに、その力が弱かつたのだ。トルストイの富の分配を彼に差控へさしたものは本來何であつたか？ それは家族の者に對する彼の愛と、彼等が彼のしてゐることを意識してゐたことゝであつた。「私は不正や殘酷を感じた。人間の不正や殘酷を感じたのではない、何故なら彼等は私を愛してゐるから‥‥。」

註*「かくて光は闇に輝く。」

第二の例に這入らう。

一八八六年にトルストイはモスカウ（その他凡ゆる大都市）に於ける怖ろしき窮乏と不幸とに刺戟されて、彼の幾多の觀察、考慮、苦惱を述べてゐる。トルストイは或る貧民屈を見舞に行つた後に、家に歸つてから友と論爭してゐる。その友が、この不幸は都會生活の自然の現象であると言ふ事を彼に證さうとするので、「私は友に反對し初めた。然し非常な熱と憤怒とを以てしたので、私の妻は隣室から走り寄つて來て、どうしたのか？ と言つた程でした。私は自分でも氣附かずに涙聲になつて叫び、兩手で友に突つかゝつて行つた事が分りました。私は叫んだのでした。そんな生活は出來ない、そんな生活は出來ないし、してもいけない。する事はならない！ と。友は私に言ひました。無用なその熱を恥ぢなさい。貴方は何も靜かに話が出來ないのです。憤れば不愉快になるでせうと。そして主として、かゝる不幸な人々の存在は彼の親族の生活を破壞する原因にはならないんだと言ふ事を私に示しました。私はもつともだと思つて默りました。だが、私の魂の奥底では私の言ふ事も正しいのだと感じました。しかも、氣を落着ける事は出來ませんでした。*」

註*「我等何を爲すべきか」

我々はこの三つの經驗――襁褓に卷き包まれた場合、財產を分配しようとした場合、乞食のための論爭の場合を比較してみよう。三つの凡ての場合に於いて、我々は彼の個人我の要求と環境の反對力とを見る。第一の場合に於いては個人我は腕を解放しようと欲する。然し彼はその近親者によつて、肉體的に束縛されてゐる。第二の場合に於いては、個人我はその計畫を實行しようとする。然し彼は近親者への愛によつて、つまり心理的に束

縛されてゐる。第三の場合に於いて個人我は、近親者と全社會との反對力によつて束縛されてゐる。三つの凡ての場合に於いて、個人我は克服せられてゐる。だが「泣き叫」んではゐる。こゝに葛藤が根ざしてゐる。第一の場合に於いては外的な、第二、第三の場合に於いては外的にして然かも内的な（内心的な）葛藤である。

我々は外的葛藤の思ひ出の眞實性を疑ふべき何等の根據を持つてはゐない。「人間がその乳兒期の記憶を保持してゐることがあると言ふは、恐らく不可能ではないが、併し決して確實なものとは云へないとフロイドは書いてゐる。[註一]またハヴロック・エリスは、幼年時の記憶は屢々我々が普通信じてゐるよりも遙かに遠く遡つてゐると主張してゐる。だが、右の最初の記憶の中に書いてある樣な内心的葛藤が眞實であるかどうかと云ふことに就いては、それは甚だ疑はしいものである。

この記憶とトルストイの全性格との一致は——この記憶の内的眞實性は——相反する二つの主張を證據立てるために利用され得る。

（一）この記憶は著者の性格全體と非常に緊密に一致してゐるので、これは五十歳のトルストイに現はれた藝術家像であるとして、卽ち與へられたる瞬間に於ける彼の内省の結果だとして、觀察することが出來る。この藝術家像が乳兒期へ誤つて轉置されたのである。「それは恐らく記憶ではなく、彼が後に想像して少年時へ轉置した所の空想かも知れぬ。[註二]」然しこの場合にも、フロイドの空想に關する言葉を注意しなければならない。「その上、人が後に創り上げた幼年時の空想は、原則として、常には忘却されてゐるこの前時代の些細な事實をよすがとするのである。」と。

註一、フロイド「レオナルド・ダ・ヴィンチの幼兒期記憶」（大槻氏譯「分析藝術論」一六一頁）參照。

註二、同上。

二、この記憶と性格全體との一致は、この記憶が眞實であることとの證據となる。

これ等二つの主張は、相矛盾するものではないと私は思ふ。トルストイが記憶してゐる事は彼が實際に經驗した事であるのだが、たゞ無意識の心理過程に留まり、表象へと移行するに至らなかつたものである。だがこの無意識の心理過程は、トルストイの本質を現はしてゐるので、この心的過程が色々の變化をなして、限りなくトルストイの生活中に繰返され、彼によつて意識化され、そして表象の言葉に飜譯されたと云ふは、自然である。從つてこの表象言語への轉移が、最初の、根本的な、だが本質的には同一なこの經驗にも適用されたのである。

襁褓に包まれてゐた際の外的葛藤は、實際の記憶であり、そしてそれにトルストイ五十歳時の內心的葛藤の描寫が添加せられたものであるといふ事は信じられる。しかし、內心の葛藤は私の自我の見方によれば*、本來外的葛藤の繼續或ひは進展にすぎない。個人我から見れば、高我低我とは或る點に於いて、外界——內心的ではあるが超主觀的な環境——に外ならない。それ故にトルストイの最初の記憶は眞實に一致してゐると主張し得る。たゞその眞實は、當時經驗されたものよりもつと鋭い形で印されてゐるだけだ。そしてこの眞實とは、トルストイが全生涯中、自己並びに外界と葛藤の生活狀態をつゞけたと云ふ事である。

*譯者註、オッシポーは人間の精神に於ける三つの努力を次の如く分つてゐる。「私の」努力、肉體的に「私に與へられたる」努力、道德的に「私に與へられた」努力、この三つである。そしてこの三努力に夫々個人我 Das Individual-Ich 低我(ズブイッヒ)(性的我) Das (Sexual-) Sub-Ich 高我(ズプライッヒ)(道德我) Das (ethische) Supra-Ich の名を與へてゐる。フロイドの自我、エス、超自我の區別に相當するものである。

トルストイが最初の記憶に於いて「自分自身に同情」を(ロシヤ語では「自分自身への愛」とも解される)感じたと認めてゐる事に注意を向けよう。——それは一つの自己戀愛(ナルチスムス)であつて、これは我々には、尚特別に問題になる。

フロイドの云ふ通り、精神分析者にとつては「餘りにつまらぬ」ものなどは一つもない。それ故に、トルストイの最初の記憶に於いて、二人の人間が朧ろげに彼の側に立つてゐたと云ふ事も偶然ではない。我々はそれを、彼が本來二人の母親を持つてゐた事の指示として受取る事が出來る。一人は彼に生命を與へ、彼が一歲半の時に逝つた母であり、他は彼のために死んだ母の代理を務めてくれた叔母のタチャーナ・アレキサンドロフナである。

同時期に屬する第二の記憶は、第一の記憶を本質的に補つてゐる。第一の記憶は形式的な側面、精神生活の形式、精神情調を與へてゐるにすぎない。この第一の記憶に於いて我々は障碍から自由にならうとの願望を見る。自由を得て何をしようと云ふのであるか？ 自由を何に利用しようと云ふのであるか？ この問題を我々は第二の——朗かな——記憶から知る。自由な小さい手で盥の濡れた緣をさぐり、そしてそれによつて感覺的な享樂を感じる事が、氣持良い樣に見える。身體を卷きつけられてゐないので、他の感覺的享樂を何等妨害なく樂しむ事も出來る。何故ならば、享樂の對象に注意を專らにすることが許されるからである。嗅覺に於ける(糠)、音に於

ける（水音）、また視覺に於ける（乳母のむき出しの腕と彼自身の小さな身體）享樂を享受する事が出來るのである。かやうにして第二の記憶は精神生活の內容を我々に示してゐる。

　我々は上述の感覺的享樂と、筋肉活動（第一の記憶の）に於ける感覺的享樂とを一つにして考へ、更にトルストイ自身次のやうに云つてゐるのを參考にして見よう。「私が見たり、聞いたり、理解したり、話したりする事を覺えてゐた時、又眠つたり、母の乳房に吸付いたり、接吻したり、笑つたり、母を喜ばせたりした時、一體私は生活してゐなかつた、とでも言ふのか？　私は生活してゐたのだ、しかも幸福に生活してゐたのだ。」　かうして見ると、我々は乳兒の感覺的生活の大寫しを受取るのである。視覺の、聽覺の、觸覺の、嗅覺の*、味覺の、運動の快樂――凡てそれは純粹に感覺的な享樂、或ひは部分性感的活動である。

　*註　トルストイは彼の作品の中で、非常に屢々嗅覺の印象を描いてゐる。

「人間がその幼年時からの記憶だと信ずる事柄は輕視出來ない。本人自身に理解出來ない記憶殘片の背後には、彼の精神發展の最も意義ある特徵への量るべからざる證據が、大低の場合、隱されてゐる。[註一]」この點に於いて、トルストイの第二の記憶は、強い感覺性を我々に示してゐることに自己戀愛的な窃視的快樂の云々せられてゐることは面白い。「私は初めて私の小さな身體を認め、そして胸に肋骨の見えるこの身體を愛し始めました。」これと同じ自己戀愛的快樂をトルストイは彼の「幼年時代」の中の「或る初戀の仕方に於ける或るもの」の章の中で記してゐる。十歲のニコレンカ（トルストイ自身）はカティンカの裸の肩をキスした。「この快樂は私には全く新らしいものであつた。たゞ一回だけ私は自分の赤裸の腕を見た時、ほゞ同樣のものを感じた。[註二]」

註一、フロイド「レオナルド・ダ・ヴィンチる幼年期記憶」（大槻氏譯一六二頁）

註二、この個所は彼の時代には檢閱によつて刪除された。そして最後の版にだけ現れてゐる。（ドイツ譯、はレクラム版のに見えてゐる。）

　トルストイの官能性に關しては、更に一章を費して話すことゝして、今は我々の注意を彼の自己戀愛（ナルチスムス）の上へ向ける。

　何人も自分自身を愛する。自己愛は合法的な普通の現象である。トルストイはその日記の中で次の樣に記してゐる。「人生への踏出しに於いては、人々はたゞ自分自身だけを愛する。そして自分自身の生活を決定するもの

38

だけを斷乎として愛する事により、己れを他から區別する。然しながら自分自身を意識する樣になるや否や、自分の愛をも意識するやうになる。その人はもはや自分自身への愛だけでは滿足せず、他のものを愛し始める。そしてその人が意識的生活を長く生活すればするほど、益々他のものを愛し始める。そしてこの愛は、その人が己れ自身を愛する樣な斷乎不動の愛ではないけれども、その愛は、彼の愛する凡ゆるものの幸福を心から欲し、その幸福を喜び、そしてその愛するものにふりかゝる苦勞のために悩むと言つた風である。」これ等の言葉から次の事が結論される。自己への愛は無意識の、原始の過程であり、他人への愛は然し、思考の段階を通過するのだと。だが、これはあまりに甚だしく合理的な見方だ！　これ等二様のリビドー纏綿の過程の間に、かゝる區別を立て得べき何等の根據を我々は持つてはをらぬ。しかし、このやうな區別を立てるところにトルストイの個性の特徴があるのだ。

「人間は本來二つの性的對象を持つてゐる。――自分自身と自分を世話してくれる女性とである」(註一)とフロイドは書いてゐる。「個人的差異は、たゞこれ等二つのリビドーの流れのエネルギーの相違に因る。一方に強いリビドーの流れは、他方の流れを減水させる事は明かだ。自我と他我(フレームデイツヒ)のリビドー纏綿の交互狀態は、恰も原形質動物體とその差出した擬足との關係の如きものだ。」(註一)

註一、「ナルチスムス概論」(大槻氏譯「分析戀愛論」の內)

註二、同書。

我々は普通の原始的な、謂はゞ生理的自己戀愛(ナルチスムス)――それは凡ゆる個人に於いて、常態の胎內生活期にはリビドーが自分に專ら注がれ、そしてそれは殘物として一生涯殘在してゐるのだが――と他種の自己戀愛(ナルチスムス)とを區別せねばならない。出生後間もなく、リビドーは自己以外の對象にも纏綿する。そしてこの時以來リビドーは個人我にも、他我或ひは自己以外の對象にも生涯同時に纏綿するのである。若しその後の發展道程中、自我纏綿が異常に強く、對象纏綿がその反對に非常に弱くなつてゐる如き場合には、我々はそれを性格的自己戀愛(ナルチスムス)と呼ぶのである。またリビドーが遂ひに自己以外の對象に全く纏綿しない場合は、それは病的自己戀愛(ナルチスムス)(早發性癡呆症、又は知力喪失症(パラフレニー))だと云ふことになる。

然し性格的自己戀愛の特徴を明かにするにはリビドー纏綿の方向を量的に指示したゞけでは足りない。自己戀愛の常態の場合の特徴は、外物へのリビドーが、たゞ自我を通じてのみ達せられるといふ事だ。更に詳く言へば自己戀愛者(ナルチス)が他人を愛するのは、他人が自分を愛するが

故に外ならない。彼は他人の愛を愛するのである。それはトルストイ自身が記してゐる所の「愛への愛」である。「私は各人に知られ愛されたい要求を感じた。私は他人から自分の名を呼ばれる要求を感じた。そして凡ての人々が自分の高名に依つて偉大な印象を受け、そして私の周圍に群つて來て、私に何かの御禮を述べてくれゝばよいとの要求を感じた。」「愛への愛」に苦勞するものは、常に他人の意見に注意してゐなくてはならない。トルストイは言ふ。「ミテンカ（トルストイの兄弟）はあの價値ある素質を持つてゐるに違ひない。またそれをニコレンカ（トルストイの兄弟）も持つてゐる事を知つてゐる。が、私にはそれはいつも全く缺けてゐた。――私は他人の批判に對する全き無關心を言つてゐるのである。私はほんの直ぐ前までは他人の批判を默視する事は出來なかつた。」[註二] トルストイが或る貧民窟を訪れた時、貧民等が彼を取卷いた。彼等の間に、數日間何も喰べない一婦人がゐた。「私は彼女に一ルーブルを與へた。そしてそれを他の人等に見られた事が、私には非常に嬉しかつた事を思ひ起す。それを見た一老婆が、私にまた金をねだつた。與へるといふ事は私に非常に愉快だつたので、與へる必要が有るか無いかもきはめずに、もうその老婆にも與へた程だつた。……私が金を分ち與へた時、もつと澤山の人達が近寄つて來た。……私は雜貨商や家僕達が私の事を何と思ふだらうかといふ事のために、不安を感じた。」[註三]

一八五六年五月十二日、トルストイはその日記の中に書いてゐる。「生活の幸福を自分により多く保證するための普遍的に有効な方法は、例外なく凡ゆる方向に蜘蛛の樣に愛の大網を紡いで、掴まりさへするものは、老婆でも、子供でも女でも憲兵でも、その中に捕へる事である。」[註四] これはやはりどうも、眞の對象愛では斷じてない。何故ならば、それは己れの生活幸福を追窮してゐるからである。

註一、註二、ビリユコーフ。
註三、「我等何をなすべきか」
註四、ビリユコーフ。

自己を自ら神化するまで愛しながら、トルストイはこの神化と愛を他の人々の上に轉嫁する事を心得てゐた。彼は他人の精神生活への天才的な感情移入（感じ込み）を顯すことを心得てゐた。リビドー全體は、焦點に於けるが如く、自我に集中されて、他我の上に轉嫁され、かくて自我は他我の中に生きるのである。自我は他我と同一化する。然し轉嫁と同一化の機構は、まだ自己愛と眞に利他的對象愛との間の微細な區別的診斷を經てはゐな

い。要點は、自我が同一化に際して、他我に克服されてゐるか否かと言ふ事である。自己戀愛的(ナルチスティッシュ)同一化の場合には、自我は他我を自己の型に倣つて形造らうと努力する。自我は更に「形式」の役割を演じようとする。利他的轉嫁に於いては、自我は他我に屈伏してゐる。自我は「材料(マテリー)」にまで成り下つてゐる。トルストイに自己戀愛的(ナルチスティッシュ)同一化の能力ある事は、彼の文學作品の主人公達によつて證明されてゐる。トルストイは彼の主人公達を、著しくナルチスムスの模範タイプに倣つてこしらへてゐる。即ち彼は、(一)己れ自身を(例へは「アンナ・カレニナ」のレーヴィン)。(二)彼自身が過去にさうであつたもの例へば「幼年時代」のニコレンカ)。(三)彼自身がありたきもの(例へば「戰爭と平和」のマンドレイ・ボルコンスキー)。(四)自己の性格の一部分である所の人々(「戰爭と平和」[註一]に描出されてゐる先輩達)・・・などを描寫してゐる。

註一、「チルチスムス概論」の内「對象選擇型」に關する條(大槻氏譯書二五六頁、及び本誌昨年七月號一一頁)參照。トルストイの詩的創作に關する問題(その問題の探究にはオットー・ランクの諸著作が非常に參考になる)及びトルストイの悩んだ死の病的不安(その不安をメレヂュコウスキーは、トルストイの行爲と性格を理解する上の最も重要な要因として指示してゐる)は後の研究に讓る。こゝではたゞオットー・ランクが二重人格の主題に關する研究(「精神分析的神話研究」)で死の不安と自己戀愛(ナルチスムス)とを近づけた事が正當であつた事を認めればそれで良い。「永遠の自己戀愛者(ナルチス)」レオ・トルストイはその日記の中に書いてゐる。(一八六五年十月)「私は死の重荷の下によろめいてゐる。私はよろめき、立ち止る力がない。私は死を欲しない。私は不死を欲し愛する。」

トルストイは眞に利他的な對象愛を知つてゐたか?それに就いては後に讓る。

自己戀愛的態度は、個人間の關係に於いては必然的に自己の買被りと他人の見縊りとを伴ふ。その結果傲慢と虚榮とが出て來る。ビリュコーフは言ふ。「トルストイは(一八五一年—一八五八年)彼自身の教育段階に立つた人々と交際してゐた。そして彼等に對してさへ、非常に控え目であり、獨立的であり、常に反抗的であつて、他人に影響を與へようとの願望に燃えてゐた。が、彼自身は外界の影響を受けにくい方であつた。」トルストイは自己の虚榮心をその日記(一八五二年)の中に書いてゐる。「虚榮、それこそは、我々が他人に最少の損害を加へ、我々自身に最大の損失を與へる所の情熱である。」[註一] ビリュコーフは述べてゐる。彼等が(レオ・トルストイと兄ニコ

ラス 一八五一年のこと）町へ行つた時、一人の紳士が彼等の前を通り過ぎた。その紳士は手袋をはめないで兩手で一本のステッキを握つてゐた。「この人は屹度何か惡者に違ひないよ」と彼は兄に云つた。「何故？」とニコラウスが尋ねると「さうさ、手袋をはめてゐないから」と答へた。[註二]

註一、ビリユコーフ著「トルストイ傳」第一卷二〇六頁。
註二、同書。

「青年時代」に於いてトルストイは一章の全部を擧げて、彼が「上品になりたい」ために如何に努力したかを細かく描寫してゐる。

自己戀愛者は自己滿足的で近付き難い。[註一] その結果として、さう云ふ人は友を持ちたいとは思はない。「トルストイはその生活に於いては、或る特殊な孤獨者であつたことを我々は氣付く。それは天才に獨特の孤獨ではなくそれとは別の、現世的な、日常的な、人間的なそれである。彼は人が地上で到達し得るものは、殆んど悉く獲得した。たゞ友人だけは持たなかつた。……彼の生活中、彼の周圍を取り卷いたものは、たゞ近親者、崇拜者、巡禮者、被觀察者、そして最後に弟子等だけであつた。――これ等は然し、彼には最も緣遠い者に思へた。」[註二]

註一、「ナルチスムス概論」
註二、「トルストイとドストイェフスキー」（メレジュコウスキー）

トルストイが普通の自己戀愛者でなかつた事は自明である。最高の才能を持つた自己戀愛者もゐれば、また才能の殆んど尠い自己戀愛者もゐる。我々が自己戀愛を確認してもそれだけでは性格の調音について何も判然分つてゐるわけではない。然しトルストイに於けるこの調音が如何に廣大であつたかを、我々は言ふ必要はないのである。

自我愛、ナルチスムスはトルストイにあつては相反並存的であつた。その事は、ネフリウドフの自分自身に對する態度を見れば分る通りである。そこでは彼は、惡漢或ひはそれに類したものとして己れを罵詈し、そして後には己れを神として感じてゐる。それは愛が憎惡へ、憎惡が愛へ、卽ち「反對への逆顚」（フロイド）であつて、これも亦トルストイの特徴の一つである。この相互並存性は最初の記憶の中にも記述されてゐる。「私は泣き叫ぶ、「だが私の叫び聲は、自分自身にも不快である」。「私は自分自身に同情を感じる」（卽ち自分自身に對する愛）D・S・メレジュコウスキーはその才氣縱橫の著作「トルストイとドストィエフスキー」の中でかう書いてゐる。――「此處でも其處でも第一の原因は自我である。そし

て一見か樣に對立するこの兩感情を一致させるのも自我である。それは著しく高揚された自我か、さもなくば著しく否定された自我である。凡ての發端と終焉は我である。愛も憎悪もこの圈圓を切斷する事は出來ない。」トルストイの他人に對する態度も、これに準じて交互的であつた。

相反並存性以外にトルストイのナルチスムスの特徴としては、尙、己れ自身の認知がある。レオ・トルストイはその兄セルゲイに就いて書いてゐる。「が、私はセリョーシャに熱狂的に敬服して、彼を模倣した。私は殊にこれは人にはをかしく思はれるかも知れないが、彼のエゴイスムスの無意識に敬服した。私は非常に自分自身を知つてゐて、常に自分自身に就いての明確な知識を持つてゐた。また他人の私に對する考へや感情が公正であるか不正であるかといふ事をも知つてゐた。そしてこの事は私の生活の喜びを妨げた。それ故に私は恐らく他人に於いて、その正反對――無意識的エゴイズムス程に愛したものは何物もなかつた*。」

註* ビリュコーフ。(以下譯者附記)ナルチスムスを喪つたものが、ナルチスムスを保有してゐるものに鄕愁的崇拜感を持つ心理に就いては、フロイドの「ナルチスムス概論」(大槻氏譯二五四頁)參照。

普通の自己戀愛者は精神葛藤に苦しむやうなことは決してない。彼は自己愛の中を步き廻つてゐる。彼にはたゞ、環境が單純に彼の尊嚴さや自己戀愛的な自我に對する「材料」の役割を演じようとせぬので、そのやうな環境に外的葛藤を持つのみだ。精神力ある自己戀愛者は精神葛藤に苦しむ。外ならぬ自己愛と自己戀愛的對象愛、(愛への愛)との間の葛藤に苦しむのだ。彼は愛される事を欲する。それ故に彼は彼の自己愛に反する事柄を行ふべく强制される氣が屢々する。トルストイのナルチスムスは、相反並存性、自己意識、天才的な轉嫁と同一化を特徴としてゐる。これ等の特徴を有してゐたがために、トルストイが內心の葛藤に苦しんだに相違ない事は明かである。(此項完)

# ゲーテとフロイド（ヴィッテルス）（1）

Fritz Wittels: Goethe und Freud.
(Die Psychoanalytische Bewegung. Sept.-Okt. 1930)

武田忠哉

ゲーテとフロイド。恐らくこれらの二人の巨人の比較はゲーテに對する精神分析と共に、多くの學的に興味深き側面を啓示するであらう。その一例として、この、フリッツヴィッテルスの評論「ゲーテとフロイド」は、フロイドに對してゲーテ賞が與へられる以前に執筆され、一九三〇年のゲーテ賞の機會に際して「精神分析運動」誌上に發表されるに到つた。特に、この研究の立つ文化史的地位について云ふならば、それは國民的なものの嵐の中に置かれたゲーテの平靜な生活態度と教養への愛と國際的・人類的なパースペクティヴを掲揚し、ユダヤ人フロイドの學的功績と藝術性と世界市民性をゲーテとの對照によつて決定し、種族的ドイツから精神的ドイツへ、ビスマルクのドイツからゲーテのドイツに到る一つの文化的な道を示唆しつつ、やがてこの評論それ自身が近く迫るナチスの嵐に對して一つのバック・ミラーを形成し得たのであつた。

つぎに、可及的に原文に即しながらその內容の展開を試みたいと思ふ。

ジークムット・フロイドは一人の醫師として、過去四十年以上にわたつて彼の許に群集する神經病者の治療に從事し、いまや彼の醫師としての名聲は全地球に一般化するにいたつた。彼以前には何らの組織的治療が企及され得なかつた多くの患者と疾病に對して彼の指定の新しき方法の治療が試みられ、かうして、數百の公認の、そして數千の非公認のフロイド學徒が現在の活動を續けてゐるのである。したがつて、彼は世界的に一人の偉大な醫師として判定され、彼の治療者としての地位のために

ヴィーンあるひはその他の土地に一つの石造の紀念碑が設定されることは眞に妥當であるにもかかはらず、フロイド自身は彼の醫師としての活動を必しも高く評價してゐないのである。

「私は本來けつして眞の醫師ではなかつた、これが四十一年の醫師としての活動の後に私の自己認識が私自身に告げる結果である。私は自分の最初の意圖から轉向することを迫られ、それによつて醫師を選んだのであつた。」――最初の意圖は自然科學的認識であり、しかしながら生活費を得る必要によつて彼の轉向が導かれるにいたつた――。「私の生活の勝利は、私が大いなる迂路の後に最初の方向を再發見したことに存してゐるのである。……私の青年時代には、この世界の謎の一部を理解し、恐らくは自らその解決のために何らかの寄與を贈る欲求が私を壓倒したのであつた。かうして、醫科に席を置くことがそれに對する最上の道であるやうに思はれたにもかかはらず、當時私は動物學と化學によつてそれを試みて失敗に終り、遂に、かつて私に作用した最大の權威フォン・ブリュッケの影響の下に生理學を固守するに到つた。――勿論、その時代にこの學はあまりに甚しく組織學の部門に制限されてゐた。――私は何ら醫療的なものに對して興味を感じることなしにあらゆる醫科の試驗を通過した。しかしながら、やがて尊敬する師の一つの忠告によつて、私は私自身の極めて貧しい物質的境遇のために一つの理論的經路を避けねばならないことを告げられ、かやうにして、私は神經系統の組織學から神經病理學へ移り、新しい提議に基づいて神經病のために努力するにいたつた。しかしながら、私は私自身が眞の醫師的素質を缺乏することによつて多くの害を私の患者たちに與へたやうには思つてゐない。何故なら、醫師における治療的關心があまりに激情的に强調されてゐる際には、病人はそれによつて多くの益を受けることが出來ないからである。すなはち、醫師が冷靜に、能ふかぎり正確に動くことが最善の場合なのである」(フロイド)(一九二七)。

この、醫學に對する氷のやうに冷やかな拒否――それは最後の部分において多少緩和されてゐるにすぎない――は、生活の後期にいたつてフロイドを訪れたのではなしに、それは常に存在し、それを叙述する種々の言葉にもかかはらず。常に同じものとして持續されたのであつた。實に彼は彼が醫學の研究を決心する以前の時代をつぎのやうに回想してゐるのである。

「われわれは非常に乏しい境遇に生活してゐたにもかかはらず、私の父は、私が職業の選擇に際してただ私自身の傾向に從ふやうに希望したのであつた。この青年時代

に私は醫師の地位と活動とに對して一つの特殊な偏愛を感じなかつた。結局、それはその後の時期においても同樣であつた。むしろ、私は一種の知識慾によつて動かされてゐた。しかしながら、それは自然的對象よりもより多く人間的狀態に關係し、さらに、この知識慾は、一つの主要方法としての觀察の價値をそれ自身が滿足する程度には、充分に認識してゐなかつた。それにもかかはらず、當時切實に論じられてゐたダーウィン說は烈しく私の興味を誘つた。何故なら、それは世界の理解をいちじるしく促進するやうに期待されたからであつた。そして實際、ある通俗講義において行はれたゲーテの美しき評論『自然』に關する講演の結果、ギムナージウムの卒業試驗の直前にいたつて私自身が醫科に席を置くことが決定されたのであつた。」

もしわれわれがこの敍述、あるひは、多くの類似の論文――（フロイドが醫學と彼の同僚の醫學者たちに對する彼自身の態度を發表したもの）――を讀むと同時に、フロイドの優れた醫學的業績に關して知識を持たないならば、その執筆者が十九・二十世紀において最も多くの成果を與へた醫學者の一人であるといふ觀念に殆んど到達することが出來ないであらう。フロイドは彼の心理學における業績に對してあまりに甚しく主要な力點を置くために、彼の醫師としての業績から發する光線が煩しく感じられるのである。果して精神分析が二重の意味において――治療方法と心理學としての――、醫療に携はる實際家、あるひは、理論的心理學者のいづれにより多く所屬するかは恐らく將來において決定されるであらう。フロイドの態度は眞に多數の偉大な精神における犧牲を回想させるものを持つてゐる。彼等は、彼等に對して拍手が悅んで豐富に施される側面においてそれを拒否し、一方、彼等の時代が彼等と步調をミートさせ得ない側面においてかやうな拍手を追求して烈しい努力を持續するのである。レオナルド・ダヴィンチは飛行家として不滅であることを欲し、ゲーテは彼の厖大な、むしろ失敗の色彩論を彼の最上の勞作のやうに判定したのであつた。

フロイドは醫學に對してかやうに切實な拒否を示したにかかはらず、何故彼はこの學を研究したのであらうか、そこにわれわれは一つの驚くべき答を聞くのである。すなはち、ゲーテの評論がこの奇蹟を達成したのであつた。しかしながら、われわれの確信によれば、恐らく魔術的な力はただこの評論の內容だけでなしに、すでにフロイドが少年時代から特殊の關係を持つたゲーテの個人においても見いだされ得るのである。今日われわれはすでに國民一般の偉大な人々に對して、かつて十九世紀の

中葉に見いだされた關心と尊敬を抱くことを忘れてゐるのである。勿論、當時においても、むしろ、シラーが緊密な集團としてのドイツ國民のための神人であり、一方ゲーテはドイツの各都市に同樣に多くの紀念碑を持つてゐたが、しかしながら、彼は通俗的ではなかつた。彼の戲曲の一部は普及し、上演され、彼の詩の多數は愛誦され、作曲されたにもかかはらず、それに比して彼の後期の小說は一般に迎へられる機會に乏しく、ゲーテの、巨大に聳える稀有の人格は大衆にとつて全く未知のものに屬し、現在にいたるまでその狀態において保持されてゐるのである。この大伽籃は小さき人間と俗人に對して何らの入口を示さず、むしろ、教育ある俗人にとつて不可解の、多くの反撥的な側面を展開したのであつた。かうして、ゲーテはドイツ語の最大の文學者であるといふことを教へられた小さき人間が、ただその理由によつてゲーテの生涯と作品における極めて多くの奇異なものを默過する努力を續けたのであつた。

ゲーテの名聲は早くから世界的に流布され、すなはち「若きヴェールテルの悲哀」が出版された際に彼は二十三歳の青年にすぎなかつた（一七七二）*。この戀愛物語はルソーの感傷的・空想的樣式によつて描出され、今日もなほ生々として人々を動かし得るのである。ゲーテはけつして彼のかやうな成功に再び到達しなかつた。彼は「ファウスト」（一八〇八）によつても「ヴェールテル」の名聲を凌駕することが出來なかつた。實に、一つの輝ける高き作品「ファウスト」はそれ自身の測り難き美しさのためにただ教養ある人々にのみ理解され得るに反して、「ヴェールテル」はあらゆる若き魂に對して直接的に作用するのである。ゲーテはヴェールテルとロッテを描いたグラス畫を支那から贈られ、ナポレオンはエルフルトにおいて、彼が「ヴェールテル」を七回讀み、さらに、それをエジプト遠征の途上に携へたことをゲーテに對して告げたのであつた。（一八〇八）すでにエルフルト諸侯會議の頃には、ゲーテは「ファウスト」において彼の生涯の最も深き問題、永遠に前方へ努力する精神の、自我による救濟を一時的終結にまで持ち來したのであつた。しかしながら、彼は再び二十年後に「ファウスト」第二部においてこの終結を教會的神祕說の頂點にまで高めねばならなかつた。その他に、彼は自然科學の研究に沒頭しそれは物理學から地質學を越えて博物學と比較言語學に及んだのであつた。彼が詩作しはじめたとき、ドイツ語は一つの冷やかな樂器にすぎなかつた。彼がこの言語を見いだした限りにおいて、それは柔軟かつ纖細な感情の

表現に適してはゐなかつた。近代ドイツ語の最初の創造者マルティーン・ルッターが彼の聖書飜譯の目的のためにヴルトブルクにおいてそれを創造したのであつた。今日、敎養あるドイツ人はゲーテの言葉を讀み、それを話してゐるのである。彼はドイツ語を根本的に改造したのであつた。もしわれわれが最初、イマーヌエル・カントのスコラ學的螺旋、この最大のドイツ哲學者の銳い奇異な完全文を讀むことを試み、さらに、ゲーテ以後のドイツ哲學者（例、ショーペンハウワー、ニーチェ）を取上げるならば、ドイツ語の領域におけるゲーテの業績の價値が容易に判定され得るのである。

*しかしながら、事實、この年はゲーテのヴェッツラーにおけるヴェールテル體驗の年であり、それは翌々年（一七七四）にいたつて、小說の形式にアレーンジされて發表されたのであつた。（譯者）

ナポレオンは——そして、勿論、支那人は——これらすべてに關して何らの知識を持たなかつた。眞に、ここには一人の偉大な人間が彼の生涯の第七十年代において多くの錯雜な感情によつて、評價と尊敬を與へられるにいたつた。しかも、彼はすでに久しい以前から、それらの根柢を形づくる一つの靑年期の勞作から遊離されてゐたのであつた。彼自身は彼の意慾する限りのものを達成することが出來、最も强力なヘラクレス的行爲をも遂行し得たにかかはらず、ゲーテは常にヴェールテルの文學者として終始し、恐らく彼自身それが世界の軌道であることを認識し得たのであつた。人々は先づ彼等の偶像に一つのマークを記し、つぎに、これらの偶像がそのマークを變へることを許さないのである。一般に後世が現實の發展を槪觀し、眞の偉大性を認識するまでには約一世紀の時間が要求され、かやうにして、巨人は彼の生存の間に驚嘆者の群——彼の、雲の中に聳えたつ頭を全く認め得ないところの——を彼の足許に見るにすぎないのである。

ゲーテあるひは、大部分の天才的人間と反對に、フロイドは人生の後期においてやうやく彼の偉大な勞作によつて彼自身の道を歩み始めたのであつた。彼は殆んど四十歲のとき、J・ブロイヤーと共に、彼の「ヒステリー研究」を出版し、それによつて神經的徵候をすでに忘られた多くの體驗へ還元し、さらに、殆んど五十歲に及んで始めて彼の性慾理論を系統的に發表するにいたつた。しかしながら、彼もやはりこれらの最初の勞作へ固定され、かうして最初人々が彼を全く注意しなかつた後に、——この點においても彼はゲーテと反對であるが——、今日もなほ大多數の支那人は彼をつぎのやうなものとし

て賞讃し批難してゐるのである。すなはち、汎性慾主義者、ソクラテスのやうに青年を無道徳にまで誘惑する一人の人間、そして最もよき場合には、神經質の性格を性慾的小兒體驗へ還元する學者。しかしながら、フロイドが三十年以上にわたる直觀と耐久的な學者的勞作において何を展開させたか、さらに、彼の性慾と衝動生活がいかに甚しく深化されたか、それに關して「不明なる多數」は知ることを欲しないのである。

　しかしながら、その狀勢が果して改められ得るであらうか。およそ偉大な人間の生涯には、彼等の勞作がその時代と新聞の讀者層にミートする時期が見いだされ、かやうな時期には一般の世評が鞏固に保たれ得るのである。これらの偉大な人間たちは彼等のポピュラリティを一つの偶然的な反跳と一つの一時的な花火によつて獲得し、彼等の各自に對してつぎの言葉が妥當するのである。「一つの眞理が市場において勝利を占めたならば、いかなる誤謬によつてそれが勝利を得たかを問ふがよい」（ニーチェ）。例へば、フロイドの夢の註釋は何らかの程度において群衆の關心を惹いたやうに思はれるにかかはらず、それは一つの誤謬の結果にすぎなかつた。何故なら、この發見の内奥は今日なほ專門の領域においても認識されてゐないからである。その後にいたつて精神生活の内奥から得られた曝露の長き縦列はつひに大衆の理解の範圍以外に屬するものであらねばならない。かうして、フロイドはゲーテと同じく、正當につぎのやうに云ひ得るのである。

「私の問題は通俗的になることが出來ない。もしそれらが通俗的になり得るやうに考へ、それに對して努力する人があれば、彼は誤謬に陷つてゐるのである。それらは群衆のためではなしに、單に個人――（それと類似のものを意慾し、探求し、類似の方向において生活するところの）――に對して書かれたものにすぎないのである。」

　十九世紀は眞に國民的意識の時代であつた。そこではそのスケールの大小を問ふことなしに諸國民が彼等自身の國民性を認識し、彼等自身を解放し統一したのであつた。この騷しい國民主義の一つの本質的要素は、常に他の諸國民に對する憎惡と他の諸國民に對する侮蔑において見いだされ、人々は他を輕視することによつて彼等自身を認識することに忙殺され、例へば、それはブルガリア人とギリシャ人のトルコ人に對する憎惡の歌において具象化され得たのであつた。

　しかしながら、この國民的感激はドイツ國民――その本性において理論的に規定され、哲學的に影響され得る

ところの——の場合には證明を經由して促進されるにいたつた。すなはち、その證明によれば、ドイツ語は最も深い言語であり、ドイツの國家形態は最上の國家形態であり、ドイツの道德は最も確實な道德に外ならない、したがつて、われわれはドイツ人としてドイツ國境標の彼方におけるフランス人と、その內部におけるユダヤ人を侮蔑する權能を與へられてゐるといふ推論が成立し得たのであつた。

當時、プロシャ政府がナポレオンに對する戰鬪準備を開始したとき、從來國家に有害視されてゐた哲學者フィヒテは新設のベルリーン大學に招聘され、そこで彼の有名な演說「ドイツ國民に告ぐ」（一八〇八）を發表するにいたつた。彼の云ふところによれば、「ドイツ語はフランス語、英語、あるひはイタリー語よりも優秀の、より深い、精神の一層豐富な國語であるだけでなしに、それは全く比較されることが出來ないのである。ドイツ語が、それ自身の根をもつ原始語として生きてゐるにかかはらず、上述の國語とその他の言語は生命なき借物を適用してゐるにすぎない。われわれが死滅したものを生けるものと比較し得ないやうに、ドイツ語もフランス語と比較され得ないのである。」かやうな言葉によつて、フィヒテは當時下降してゐた國民的自負の上昇に對して努力し、さらに敎會における說敎がそれに追加されることによつて、人々は懺悔席と講堂から戰場へ彼等の方向を見いだすに到つた。そこでは、ドイツ的本質に關する一つの理論的敍述から感激が抽出され、言語の根の相異からそれぞれに他を打倒する必然性が誘導されたやうに思はれるのである。

眞に、かやうな敍述は、觀念論がいかに早急にすべての觀察の事實を飛躍するかを示す一つの危險な例證に他ならないのである。例へば、ホメールとソフォクレス——彼等は、言語學的に高く評價されるギリシャ語の歌を歌つた——は最高の名譽を與へられ、しかしながら、他方において、シェークスピアとイザヤは言語學者の間に不評の言語を使用したにかかはらず、彼等の業績はホメールとフォクレスの場合と同樣に優秀に判定されなければならない。恐らく眞の言語學者は正しき照明の下にシェークスピアとイザヤの偉大さを容易に評價し得るのである。しかしながら、一方、もし彼等が驚くべき屈折を持つドイツ語、あるひはギリシャ語を操作し得たならば彼等の歌はいかに偉大に高められたであらうか。

（以下六二頁下段へ）

# 水に誘はれる人の精神分析

## ——三島海雲氏著「日本の水」を讀みて——

高橋　鐵

### （A）　水底凝視の辯

日日河邊ニ見ニル水流ーヲ　傷レミテ春ヲ未レルニ已マ復悲レム秋ヲ

正は反を生み反は合を生む。そして再び新しき正（テーゼ）に行き着く。……此の絕對至上なる辯證法の世の流れに佇んで水に耽る人がある。

彼は沼に海に川に立ちあぐみ、又此の $H^2O$ を臟腑へ不斷に攝取して日本から外國まで辿り辿つた。

彼は三島海雲大人（うし）。——筆者が敬愛する異風な企業家である。身を專務の椅子に委ねながら彼の感懷は常に水流の如く、或る時は雄渾に或る時は寂寞に、そして又或る時は溫雅に變轉する。氏、水を觀ずる事永く、諸誌に斷片を洩らしてゐたが遂に先般、誠文堂から「日本の水」なる一著を上梓され筆者も惠贈を受けた。其の書は「山水明媚」のはしがきから起稿して「日本は水の國である」と云ふ觀點の下に、水質、水量、水の味覺、水による近代工業、水が作つた國民性までを湧泉の如くに語つてゐる。それを繙く筆者の眼は心理學究の徒の常として、水の姿よりも水明の美よりも、寧ろ只管、三島氏心魂の水底を凝視してしまつた。

三島氏は心理學にも興趣深く曾てベルリナー女史と筆者とをブレイン・トラストに加へた人であるから此の分析試論の意圖をも賢察されて、之に依つて自らさへ氣附かれぬ無意識面の泡沫願望を意識化されたら幸甚の極である。尚ほ、同氏は佛門出の實業家だけに典型的な東洋兒の風格をそなへて居られ、從つて此の水への憧憬が汎東洋人（のみならず世界人まで）にも共通な何物かをもつ事言ふ迄もないであらう。

### （B）　美味求眞道（ガストロノミイ）としての水

氏の、水を讃える所以は意識的にはガストロノミーの達人として到達する極致に於て水が最も重要視されるからであらう。星ケ岡茶寮の北大路魯卿氏と交遊しげく、氏自身も滿蒙の風雲に躍られた時の紀念碑としてカルピスを創製し、銀座新宿に凝つた茶寮を設け、又近來「味の素」の販路擴大に携はる等、半生を美味道に投じて居られる。

筆者、先般、雜誌「日の出」に、江戸期の最高美食はお茶漬で、その爲に態々多摩川まで早飛脚で水を汲みに行つた話を「寛天見聞記」によつて書いておいたが、三島氏も同樣の事項をその著述中に擧げられてゐる。それのみでなく、文化年間の風流人の誇りとして、煎茶によつて水の出所を、多摩川であるとか隅田川であるとかどこの井水であるとか言當てた話や「東北の水は性重く氣剛、西南の水は性輕く氣柔。中央の水は性氣俱に剛ならず柔ならず重からず輕からず、色は淸く味美なり」(本朝食鑑)等と云ふ典據を引用されてゐる。

確かに、あらゆる技術上の價値判斷が最高段階に於ては、微妙な量的差違及び質的轉換の認定操作で決定される樣に、淡々たること水の如しと稱される水の性質をも鑑定する事は食通の極致であらう。そして此の「微妙」といふところに東洋美學の手前味噌もあるらしい。

尤も水を飮む事については近來西歐でも飮泉(鑛泉愛飮)の運動が彌々隆まつてゐる樣だが、これとても淵源は寧ろ化學に有るのではないか。

扨て、叙上の如く、水の性質は微妙であるが故に食通の重大視するところとなつたが、水を飮む快感について分析すれば、もつと普遍化して、單に微細美の價値や、生理的欲望充足だけにとゞまらない。

元來食べる事や飮む事は、無意識心理の分析によると最高の取り込み作用であつて、或る場合には(原始形態に於て)食人すら、愛憎二道の相反した感情の相反並存的方法である。愛するものは喰つてしまはねばならぬ。——此處に人間の生物學的「自我」がある。

從つて、水・水・水と水を求める心も實は、後述する水の諸性質を自我の中に攝取せんとする不斷の願望ではなからうか。

## （C）　水の流轉性

水といふ場合に先づ、人々の頭に流れつくのは、‥‥

　瀧となり瀨とかはれども飛鳥川
　　昔の浪はかへらざりけり　(千廣)

と云ふ樣な流轉性であらう。物理化學は液體氣體固體と變貌する水を敎へ、原始哲學は常に水を萬物の最大構成

素として語り、世俗は「方圓の器に從ふ」水の倫理を說き、詩情は「逝者夫如斯哉」と見做す水をうたふ。

海雲氏は「日本之水」の中に、實業家らしく國家哲學的概念としての水しか述べて居られず、もツと心に迫る水の性質は無意識面に抑壓して居られる樣だが、杉浦非水氏の裝幀が僅かに流水とのぼる鮎とを描かれてゐる。そして尙、口繪には溪流に向つて腰を下した同氏の寫眞等水のある風景が廿數葉揭げてある。

或る時は「春の海ひねもすのたり〳〵哉」であり「金時も熊も來てのむ淸水哉」(子規)であり、人々の感情投入をして「大川の水の面匂ふ朝づく日おのづからひらく素直の心を」(古泉千樫)とうたはせる優しい水。

又或時は「五月雨や滄海を衝く濁り水」(蕪村)となり「ここにして秩父はざまの溪の水いはに迫りて白くたぎつも」(齋藤茂吉)と、激する勇猛な水。しかも、時によつては――

「凩や覗いて逃げる淵の色」(蕪村)

といふ程、怖い神祕をもつ水。

ここに、水に向つて佇む人をして「流水豈情ナカランヤ」と同一化させる水の人間味があるのであらう。

又、寄せては返す波は宇宙のリズムだと云はれて、佐渡節や舟唄など哀調を持つ民謠を生んだと說かれる謂れがある。

三島氏は自身でも言はれる樣に、その時その時に一時に熱狂し突貫しそして直ぐ又放擲する性分で、企業生活にも私生活にも新奇を愛好する事はげしい。まるで靑年の熱情に近い熱中を、趣味や交友や企業に注ぐ事すらある。彼のその樣子を科學的に傍觀すると、筆者はおのづから溪流を見つめ淸水に立ちあぐむ同氏の詩情をくむ事が出來る。

澁谷川うづまき流るたもほとり
うづまく水を見れど飽かぬも(茂吉)

實際、流轉性に富む水は氏の心を投射した性情を持ち又それを體内に取込む事によつて氏の生活は無意識裡に同一化して絕えざる新鮮化(リフレッシュメント)を遂げるに違ひない。

## (D) 透明體凝視に於る水

透明玉(水晶)や鏡や淸流を凝視しながら豫言等をする「靈術」がある。これは變態心理學の解釋によれば、かういふ一種の視覺痲痺によつて自己催眠に陷り幻覺を起したりインスピレーションを受けたりするに過ぎぬ。けれども、少くとも水は此の樣な催眠的效果を持つてゐる事は事實である。

往昔、水垢離と稱しみそぎと稱し又洗禮と稱して所謂

不淨をきよめたのも、明鏡止水といふ熟語が政治家のカモフラージに利用されるのも、自己戀慕症（ナルサシズム）の元祖ナルシサスが花と化すまで水鏡に耽つたのも、立春水（わかみづ）とか聖水とかを崇物したり、盗泉傳説の様にタブーにしたりするのも、皆殆んど此の透明性が起す自己戀慕的（ナルサシスチック）な法悅（エクスタシー）に依るのであらう。

それと共に、透明體につき物の冷徹感が、水に於ては客觀的屬性として現はれてゐる。その爲に、生理的必要以外にも心理的灼熱感を醫すべく水が求められる事がある。宗教で彩つた「御神水」ばかりでなく、寒中などに水を浴び或ひは五臓六腑にしみ渡れば、其處に觀念聯合の作用として心頭まで冷却し緊張感を呼起す。

三島氏は非常に超自我（理想我）の強い人で毎年必らず富士山上から知合全部に暑中見舞を出されたりして修養につとめてゐるが、ナルシシストの常として美食家であり智識に對しても青年に劣らず貪り盡される。談話中にも必らず手帖御持參で始終書き止め、それを自家藥籠中のものへ攝取する。そして超自我の鎧を完成する事にのみ專念されてゐるらしい。しかも餘りに超自我に眷戀（自己戀慕）する事甚しい爲、周圍への眼は神經症的で全貌を握らんとはしない。それ故に、周圍には凡庸な、唯生活費を投與へられんとする寄生蟲的烏合之衆が群をなし、まるで巨獸の背に縋つて旅する蝿の觀さへある。これこそ、同氏が現代稀な大才でありながら覇業を遂げられない一理由ではあるまいか。

水の如く變轉する相貌を備へ新しき風土を追ひ、水の如くナルシサスの面影をとどめる。國民は又、冷徹な水と同一化して奔放する企業熱の渇を醫やさんとし補償せんとして居るらしい。同氏の一面のみしかうかゞひ知らぬ寄生群は、同氏に對して極度の父コムプレクスを抱いて冷徹水の如き風格を畏れ憎惡してゐる。

これが表面的に見た水の悲劇である。

併し幸ひにして三島氏は既に五六年程前（一時の熱狂かも知れないが）精神分析學の諸書を讀破し、若年なりし筆者にも盛んに勸められた事がある程だから、本文により今後閑日月を得て分析學に再び接近されたならば心の水底より起る悲劇も水面（意識面）に浮上り、善處の道をも把握される事と思ふ。

### （E）「胎內空想」の漂ふ水

本研究所の大槻憲二氏は曾て、日本の勝景が殆んど總て（松島・天の橋立・宮島・江の島・須磨明石等）、水に臨んでゐる事を指摘し、水景が誘ふ胎內空想を分析された。（「精神分析概論」三十五頁以下）

まことに、三島氏も同書冒頭に擧げられてゐる如く、古代神話は「國の始め宇宙混沌として水陸も定かならぬ頃、國祖神が天上より霧と雲とに掩はれた下界の海を矛で攪き廻された節、その矛より滴つた水粒が日本群島最初の小島となつた」由を傳へてゐる。

これは實に美しい生誕の象徴詩でなくて何であらう。フロイド氏も出産生誕は總て水で象徴される事を喝破したが、胎内の羊水に漂ひつゝ唯我獨尊的自我の卵が形成されて行く人類生誕の過程は此處に喋々する迄もない。以前スタール博士は忍ヶ岡から不忍池を俯瞰して、池があり離れ島が中央に位し其處に辨財天ある風景は實に美事な女陰象徴だと感嘆されたさうである。實際不忍池のみでなく近江八景でも三崎油壺でも江の島でも日本三景でも、多くの勝景に佇んで「松島やあゝ松島や松島や」と恍惚境――忘我の境にうたれるのは、決して古典的美學の捏造した美意識に依るのではない。それは科學的分析の敎へる母性の（從つて母胎の）雰圍氣に包まれた回想的感激である。

おろぎなき息をもらせり内の海
八十島かげに水のひかれば

といふ中村憲吉氏の歌は此のゆえしれぬ感激を語つてゐる。

ユイスマンや江戸川亂歩氏は水底に住む話を作り、萬葉集は浦島傳説を今尚傳へてゐる。それからオフィリヤや眞間手古奈は水中に眠り、島崎藤村氏は「海はたゞ彼の墓場である（「春」より）と書き生田春月氏は海に抱かれて死んだ。水底の都の傳説は世界各國到る所に漂ひ「美しき水の誘惑」は年々人生の敗北者と闘つてゐる。

巷間、子供の口々から「靑い月夜の濱邊には親をたづねてなく鳥が波の國から生れくる」と唄はれ、藤村氏も若菜集に「波に生れて波に死ぬ情の海のかもめ鳥…」といふ稚拙な詩を（併し自然な感傷愛を）つゞつた事がある。然り、水に寄せるエクスタシーは胎内空想――「海よりも深き」親への感傷愛で、人間の死の本能はこの憧憬にメフィストの微笑を浮べて胎内への復歸を囁く。であるから、水へ…胎内へ復歸せんとした人々が救助された時、愕然と覺め或ひは必死に抵抗するのも無理からぬ事であらう。藤村操は明治卅六年、失戀の外傷に、「大なる樂觀と大なる悲觀」（生の本能と死の本能との相反並存）を一致させて華嚴復歸のトップを切り、李白は水中の月を追ふて影を沒したと傳へられた。

寶物が湖沼澤地に埋まつたといふ沈鐘傳説はあらゆる所にあるらしいが、三島氏は水の美を海にも求めて、日本の國民性にある人生享樂や闘爭性が何時も水に浮いて

ゐる「船乗の心理」として認められると述べて居られる確かに島國といふ點で、日本人には巨大空想や胎內空想が多く、從つて果敢な鬪爭本能と同時に生命を鴻毛の如く輕んずる生死本能が多い樣である。（尤もこれは三島氏も言はれる如く船乘心理と共通で、ピエル・ロチの「氷島の漁夫」等はひそかなる願望の如く遂に「海と結婚」をしてしまつてゐる。）

詩人の樣な冥想に耽る三島氏は無意識心理に於ていかに母の面影を慕はれるか——御自身の自己分析に委せるが、糟糠の令閨や愛孃や其の他種々證明するエピソードは筆者も今は略しておく。唯、曾て愛孃が病床にあられた時、おそらく何人にも弱味を見せた事がない同氏が筆者に深淵の樣な哀愁を以て「娘が弱い事が今の自分に一番寂しい事だ」とかこたれた事があつた。そして其の愛孃今は亡く、その上のきよ子孃も今病床に寂しい日を送つて居られる。氏のマザー・イマゴーから湧く父娘コムプレクスの堪えがたい憂慮心から慰藉したい。それには氏が、もつと一層精神分析を深め、孤高なる超自我戀慕の峰から下り、愚かしき周圍をハッキリ眺めて筆者が敬愛する唯一の賢息と共に企業の堅壘をかためられる事を、死の願望が煩ひをなす宗教的雰圍氣を一掃して愛孃に心理療法を施される事である。

## （F）むすぶ言葉

以上で「日本の水」——三島大人の心境と、日本國民性の一面と、筆者が激しい興趣をもつ風景心理との分析を畢つた。最後に要約して此の稿を閉ぢるであらう。

1　水は斷えず、新たに突進せんとするあらゆる變化を持つので、水に佇む人はそれに同一化せんとする。

2　水の透明性と冷徹性は往々人の昇華慾を刺戟し、精神の緊張感を覺醒させる。

3　水への耽溺は、偉大な母への感傷愛である。

4　從つて、水を眺め水を飲むのは以上の諸性質を貪り獲んとする同一化作用及び補償作用である。（萬葉集の頃にもあつた樣に「天橋も長くもがな、高山も高くもがな、月神の持たる復若水いとり來て君に獻りて復若得しむもの」などといふ月界の水の信仰を始め、屢々宗教に利用せらた水の儀式も結局ここから生れ、水の美學——傳說・文字・美術・習俗もここに源泉を持つ。

5　一切のものを分析（生物分析、精神分析、社會分析）し意識化することが現在——史的スラムプに際しての急務である。（完）

# 科學としての精神分析學の特殊性

大槻憲二

## 一、種々な解釋の可能について

精神分析學は科學であると云はれてゐるに拘らず、その研究對象（無意識心理現象）に對して、（よしんばそれが一つであつても）さま〴〵な（卽ち二つもしくはそれ以上の）解釋が可能であると云ふことのために、斯學の科學性を疑ふと云ふ人がある。藝術的科學と云ふべきであると云ふ人がある。併し、藝術的科學などゝ云ふ概念は、それ自身矛盾の概念である。例へば「美しき醜」とか「善良なる惡」と云ふが如き觀念は、詩的もしくは常識的觀念としては存在し得るであらうが、學的概念としてはあり得ない。

藝術はあくまでも、主として空想（理性の參與はあるにもせよ）に依る主觀的創造であり、科學はあくまでも、主として理性（空想の援助はあるにもせよ）に依る客觀的斷定である。兩者は屢々同じ方向に進むことがあるにも拘らず、丁度汽車のレールの如く、永遠に相會することのない平行線である。これ等二者は常識的觀念に於いてのみ結びつけられるのであつて、學的概念としては完全に無緣である。（本誌第二卷第四號所載拙稿「科學的（精神分析的）文學批評論序說」參照。）であるから、さう云ふ常識的觀念を以て精神分析學を理解することは、その人一個の個人的趣味、又は常識的解釋ならば、それもよいであらうが、學的命題としては意味をなさないのである。卽ち、精神分析學は科學であるか、或はもし科學でないならば、哲學か、宗教か、藝術か、何れかに明白に所屬しなければならないのである。私の信ずるところでは、精神分析學は科學である。

## 二、解釋と認識

併し精神分析學は科學であるに拘らず、一つの對象（無意識心理現象）に對して、二つ以上の解釋の可能を容認してゐることは事實である。これは併し他の科學に於いては、斷じて見られない事である。これも事實である。それ故に、精神分析學が特殊の科學であると云ふ事は容認せられるが、科學でないとか、或は藝術的科學であるなどゝ云ふのは、早計であるか、或は誤つてゐる。が、一體解釋とは何であるか。解釋とは、一定の現象が、その原因と認識され得る諸々の現象の內の何れかゝら生じた結果であると認識することである。そこに解釋者（科學者）の能力（確に主觀性）が這入つて來ると共に、斯學それ自身の現在の發達限度に於いてと云ふ條件もまた當然豫想されてゐる。けれども普通の科學に於いては解釋と云ふことはない。認識があるのみである。普通の科學に於いて科學的認識とは、一つの現象と一つの現象との間に於ける因果關係の認識と云ふ事に外ならない。その因果關係が單純である。つまり精神分析學に於いては解釋を下すが、他の科學に於いては、認識を下す。解釋と認識との間の相違は、それ〴〵の對象內に於ける現象と現象との間の關係が單純であるのと、複雜であるのとの相違と、今一つは精神分析學が創成日なほ淺く、今や漸次に發育しつゝある若い科學であるがためとに因るのである。現に旣に十分に發育しきつてゐる方面――例へば、夢の研究に於ける典型的な夢の解釋――の如きは、旣にもう解釋の限度を超えて、直ちに客觀的認識を下し得る程度に達してゐる。

　併し他の科學に於ける認識とても、考へように依つてはまだ認識と云ふには隨分覺付かないやうなものとてないことはない。例へば、物理學に於いて物體の地上に落下するは地球の引力に因ると認識されてゐるが、これが果して認識と云ひ得るかどうか。一つの解釋に過ぎないのではないだらうかと疑はゞ疑へないこともない。引力說が自明であると云ふよりは、却つて他により適切な解釋がないから、姑くこれが物體落下の原因であると認識（實は解釋）されてゐるに過ぎないのであつて、もつと適切な原因が發見されるかも知れないと云ふ蓋然性は必ずしも否定しきれない。ところでこのやうに只今のところ恐らくは他に考へようのない地球引力說と雖も、萬人がそのためと解釋しなければならない現象を幾萬年の間日々見て來てをりながら、やうやくニウトンに至つてそれと解釋し得るに至つたに過ぎないところを以て見てもこの方面の科學に於いてさへも、如何に個人の能力（主觀性）と云ふものが有力な要素であるかは思ひ半ばに過ぐるものがあるのである。故に物理學と云へども常識的

には、藝術的科學であると云つて決して差支へはないのである。もし精神分析を以てどうしても藝術的科學であると主張したいならば…。もし兩者の別を立てるならば、物理學の方がより單純な科學であると云ひ得るに過ぎないのである。

## 三、科學性の複雜

精神分析學はその對象に對して種々な解釋を下すことが可能であると云ふことは、前に述べたやうに、(一)その對象を支配してゐる因果關係が複雜であること、(二)精神分析學が生育中の新科學であつて、普遍的原則が未だ多く確立せられてゐないこと、(三)他の科學より以上に科學者(分析者)の個人的能力が大きな働きを及ぼし得べきこと…これ等三つの理由に依るのであるが、その第一の項(因果關係の複雜性)に就いて、なほ少しく説明を附加しておきたい。

例へば、夢の中に於いて、我々は屢々そこに現れたのが父であつたか、先生であつたか、山であつたか、城であつたか…何れであつたか判然しないが、併し何れかであつたと云ふ如き場合に遭遇する。そのやうな場合には、斯學に於いては、その何れもが妥當すると斷定せられる。それは父でもあり、先生でもあり、山でもあり城でもあると云ふ風に解釋すべきであるとフロイドは教へてゐる。卽ち、entweder oder は und と解すべきだと敎へてゐる。換言すれば、我々の現實(意識)生活に於いては、山は山であつて城にあらず、父は父であつて先生にあらずと云へるのであるが、空想(無意識)に於いてはこれ等兩者はそれ〴〵にコムプレクスされてゐる。山であつて同時に城であることは、そこでは決して矛盾しない。父であつてまた先生でもあることは少しも差支へがない。無意識世界に於いては意識界の法則(現實原則)は全然通用しない。日本の紙幣はそのまゝの形でアメリカへ持つて行つたのでは通用しない。アメリカの貨幣に換算しなくては駄目だ。意識界は現實原則が支配してゐるが、無意識界は快樂原則が支配してゐる。entweder oder その他一聯の意識國の通貨は無意識國には通用せぬ。意識形式論理學に於いてはA=Bと云ふ命題は、AはBのみにしてそれ以外の何れにも非ずと云ふことを、同時に意味してゐるが、無意識界に於いてはA=Bと云ふことは、A=C、A=D…等々と少しも矛盾しない。

こゝに只今の問題を闡明するに誠に適切な一つの興味ある寓話がある。或るところに一人の花嫁があつた。彼女に對して二人の若い求婚者があつた。一人の青年はお金持ちであるが、あまり身持ちがよろしくなく、且つ才

能に乏しかつた。今一人は貧しかつたが、人格才能共に優れた立派な青年であつた。その花嫁は何れに嫁すべきか、去就に迷つてゐた。母親は娘の決心を訊いたが、笑つて答へない。恥づかしいためであらうと思つて、母親は一策を案じ、第一の青年と定めるならば右肩を、第二の青年に定めるならばその左肩を脱いでゐよ、さうすれば、それに從つて先方に返事をするからと云つて、少時その座をはづし、程經て娘の室をのぞいて見ると、驚いた事に娘は双肌を脱いでかしこまつてゐたと云ふ。

彼女の無意識には(誰の無意識でもさうだが)entweder oder は通用しないのだ。金があつて、才能人格があつて健康で、美貌で‥‥と云ふのが、あらゆる結婚者の當然な願望でなければならない。快樂原則の支配する無意識空想も、愍れ現實界に出ようとしては、たちまち現實原則の冷たい鐵則(entweber oder はその一)に依つて粉砕されて了ふのだ。

## 四　過度決定

であるから、無意識現象に於いては、因果關係とてもXなる結果は必ずしもAなる單一原因からばかり生じてゐるとは斷言出來ない。そこに同時にB、C、D、などどれほど他の多くの原因が働いてゐるかは分らないのである。この現象を精神分析學では「過度決定」Ueberdeterminierung, Over-determinaton と云ふ術語を以て呼んでゐる。卽ち一つの現象(結果としての)は一つもしくはそれ以上の原因に依つて決定せられてゐるとの豫想を意味してゐるのである。

これほど複雜な對象で無意識心理現象はあるのであるから、これを一個人の分析者が完全に解釋(認識)すると云ふことは、實はなか〳〵容易でない。その分析者の個人的才能(又は現實生活に支障なき程度に殘つてゐるコムプレクスと云つてもいゝかも知れない)が如何に偉大で優秀であらうとも、人類の精神生活の過去現在の全般を包括してゐるエスを(よしんばそれが、一個人に現れてゐる場合にもせよ)完全に解釋(認識)し盡くすことは殆ど不可能に近いほどであらう。そこに於いてかさま〴〵な解釋が可能となつて來るのである。A分析學者の氣付かぬ關係を、B分析者は氣付くと云ふことも固よりあり得ることだ。併しそれ〴〵の解釋は、それの交渉する範圍內に於いて、何れもみな正しく妥當すると云へないことはないのである。波長のそれ〴〵に違ふさま〴〵な電波を普通のラヂオセットで受付けることは一寸困難であらう。只今のところ大低はまづ第二放送位までが關の山となつてゐる。

實例を擧げて說明して見よう。「竹取物語」の分析解釋が課題として與へられてゐるとしよう。

一、或る人はこれを「養子空想」の傳說であると解釋する。竹取翁夫妻が實父母でありながら（その證據はある）赫耶姬は彼等を假りの親であると思ひ、自分は天上月界の生れのものであると思つてゐる。ナルチスムスのそのやうな顯現として、この解釋は固より當つてゐる。この點に於いて、桃太郞傳說と共通點がある。（桃と竹との相違）

二、次にナルチスムスの別種の顯現として男嫌ひの傳說であると解釋する。これも當つてゐないことはない。現に類例として「手古奈傳說」がある。西洋にも結婚を忌避して氷河中にわが處女性を葬つて了ふ傳說がある。

三、更に、リビドー拒否（解脫思想）の傳說と解することも出來る。手古奈傳說や羽衣傳說や袈裟御前の傳說もこの一面を有してゐる。

四、最後に、當然、第三と聯關して、死の本能の傳說であると云ふ解釋も下される。羽衣傳說や雪姬傳說も多少の聯關があるやうに思はれる。

以上はたゞこの傳說に於ける赫耶姬に卽してのみの分析考察の諸方面であるが、更に翁夫妻や求婚者たちに卽しての解釋も、當然試みなければならないことになつて來る。さうしてそれ等には、現存人間の種々な心理現象に就いての實驗結果が比較參酌されなければならない。その如何に複雜な仕事であるかは察するに餘りがあるであらう。

## 五　個人的偏見を恥ぢよ

であるから、精神分析法は非常に骨の折れるものであることが分る。相當優秀な分析者と雖も神ならぬ身の、時に間違つた解釋を下すことがないとは保し難い。況んや、驅け出しの未熟者が屢々甚だ滑稽な、單純な、こぢつけ的分析解釋を下して、人々を馬鹿々々しく思はせる場合も固より多いであらう。（但し一寸斷つておくが、分析は當つてゐても、その被分析者に於いて抵抗の強い場合には馬鹿々々しく思へる場合もあるのである。故に、分析解釋は被分析者には容易に打明けないのが、分析處置法の要件の一つとなつてゐる。）併し何れにもせよ、分析學に志すものは、相戒めてゆめ輕卒なる判斷を下さないやうにしたいものである。

併しそのやうに、時に間違ひがなされる故にとて斯學の科學的價値を疑つたり、否定したりすることは早計である。そんなことを云へば、他の如何なる科學とてもそれを應用する者に於いて多少の過誤を犯すことの絕對に

ないと云ふ如き科學は考へられないではないか。現に、醫學に於いても、醫師の誤診は毎日のやうに行はれてゐる。醫者とは官許殺人業であると云ふやうな自嘲的な事を云つてゐる者さへ醫者仲間には澤山ゐる。氣象學とて同樣である。中央氣象臺の報告が正確に適中することもあるにはあるが、中らぬ場合とても甚だ多い。生水を飮む時に「氣象臺々々々」と三度口で云つて呑めば中毒せぬと云ふやうな皮肉な迷信さへ行はれてゐる。或は今に精神分析々々々と三度唱へてカルモーチンを飮めば死ぬことはないなどゝ云ふいやがらせを云ふ者も出ないとは限らない。併し我々はそれくらゐの惡口ではへコ垂れない。丁度、多數の籔醫者が如何に屢々誤診をなし、官許殺人を敢てしようとも、醫學が科學であるとの嚴然たる事實を覆すには足りないのと同じであるからだ。天氣豫報が半分も當らなくとも、氣象學の科學としての價値に動搖を來すことは決してあり得ないのと同じであるからだ。時々の誤てる分析の故にとて分析學自體を否認せんとすることは、これ「抵抗」の一種であつて、その根抵に個人的感情の存することを自覺したならば、さう云ふことを云ふ彼等は自ら恥づかしいと思ふであらう。もし彼等に恥づる能力があるならば。（完）

（五〇頁下段より續く）

か、、、ゲーテが自由戰爭の際に國民的理念に對して贈り得た貢獻、この問題は國民主義の宣傳者にとつて上述の言語學的考察よりもさらに多くの困難を提供するのである。當時、ゲーテは全く受動的な態度に立ち、ナポレオンに對して、天才を認識する人間の抱く尊敬を示し、彼はフランス人に對する憎惡の歌を歌ふことが出來なかつた。「いかにして私は憎惡を持つことなしに憎惡の歌を記し得たであらうか。勿論、われわれがフランス人から脫却したとき私は神に向つて感謝した。しかしながら、これは祕密を要する事であるが、私はフランス人に對して憎惡を感じてゐなかつたのだ。私が單に文化と野蠻を重要視する人間である限りにおいて、それ自身地球上の最も文化された國民に屬し、私が自分の教養のかやうな大部分を負つた一つの國民をいかにして私は憎惡し得たであらうか。」（ゲーテ）

# 理想の家族

An Ideal Family（Katherine Mansfield—1922）

（K・マンスフィールド作）

岩倉具榮譯

旋開戸を押しやり、廣い願段を三つ下りて鋪道に立つたその夕方、老ニーヴ氏は生れて以來始めて、自分が春を迎へるには年を取り過ぎてゐることを感じた。春——溫い、熱烈な、落着きのない春——が來てゐた。人前も憚らず驅け寄り彼の白いひげを吹き上げ、彼の腕にしなだれ掛らうとして、金色の光の中に手ぐすねひいて彼を待受けてゐた而し彼は春のお相手にはなれなかつた。否、今の彼にはもう青年の頃の樣に快活に、肩を張つて大股に歩くことは出來なかつた。彼は疲れてゐた。そして、夕方の太陽は未だ輝いてはゐたが、すつかり凍えた感じがして、奇妙に寒かつた。全く突然彼は力が失くなつた。そしてこの樂しさと明るい動きにこの上堪える心持がなくなつた。彼は少し慌て氣味になつた、彼は靜乎と立ちどまり、それを彼のステッキで追ひやり、行つちまへと云ひ度かつた。いつもの樣に——彼の中折帽をステッキで輕くたゝき乍ら——彼の知つてゐるあらゆる人々、友達、知合、店員、郵便配達夫馭者等に挨拶するのは急に恐ろしい骨折りになつた。けれども身振りと共に示したあの快活な目付き、「私はどなたとも御仲間です。」それ以上ですと云ふ樣に見えたあの親しげなまたゝき——それを老ニーヴ氏はどうしても工夫することが出來なかつた。彼は宛かも何だか。水の樣に重くて固まつた空氣をつき拔けて歩いてゐるかの如く、彼の膝を高く上げてよろめいて行つた。そして家の方へ歸る群衆は急いで通り、電車は音を立て、輕い荷馬車はがら〳〵鳴り、大きなゆれ動く辻馬車は人が夢の中だけで知つてゐるあの無頓着な、傲然たる、冷淡さを持つて靜かに走つて行つた・・・。

事務所では平常の様な一日が過ぎて行つた。何も變つたことは起らなかつた。ハロルドは四時近く迄、晝食から歸つて來なかつた。彼は何處へ行つたのだらう。何を彼はしに行つたのだらう。彼はお父さんに知らせようともしなかつた。老ニーヴ氏が丁度訪問者にさよならを云ふために玄關に出てゐた時、ハロルドは何時もの樣に全く落着きいゝ氣持になつて、女達から大變氣に入られるあの獨特の可愛いゝ微笑を湛へながら、ブラ〳〵と入つて來た。

あゝ、ハロルドは餘りに美しかつた、餘りに美し過ぎた程だ。それがこれまでずつと惱みの種であつたのだ。どんな男でもこの樣な眼、この樣なまつげ、この樣な唇を持つのは正當でなかつた 。それは無氣味であつた。彼のお母さん、彼の姉妹達、召使達と云へば、彼を若い神樣の樣に見てゐたと云つても云ひ過ぎではなかつた。彼等はハロルドを崇拜し、どんなことで彼には許した。そして彼はその十三の時に、お母さんの財布を盜み、お金を取り、料理番の寢室にその財布を隱した事があつてそれ以來、多少の許しを必要としたのであつた。老ニーヴ氏はステッキで鋭く鋪道の端を打つた。併しハロルドを惡くして了つたのは彼の家族許りではなかつた、それは世間の人々であつた、と彼は考へた。彼は只眺め頰笑むだけであつたのだ。さうすると世間の人たちは彼の前に跪くのであつた。で彼が事務所に於いてもやはり世間なみにやつてくれるものと期待したはあながち無理ではなかつた。それは尤だ! 併しさうは行かなかつた。どんな仕事も――ちやんと出來上つた、大いに儲けのある仕事でさへも――遊び半分と云ふわけには行かなかつた。男は仕事に全心全靈を打込むのでなければ、仕事の方が彼の目前で粉々になつてしまふ……。

そこで、妻のシャーロットと娘達とは、ニーヴが退隱して、何もかもすつかりハロルドにまかして了ふ樣に、さうして晩年をゆつくり樂しむやうにいつも勸めてゐた。晩年を樂しむ! 晩年を樂しむ! 老ニーヴ氏は諸官廳の建物の外側にある一群の古い檳榔子の下でハタと足を停めた。晩年を樂む! 夕方の風はうす黑い葉をふるはせて空中にかすかに戛々の音を立てゝゐた。自家で腰を下し、親指をいぢり乍ら、自分の生涯の仕事がハロルドの華奢な指先から滑り落ち、消え失せ、見えなくなるのを意識してゐる……而もハロルド方は頰笑んでゐる……。

「どうしてそんなにお分りにならないんですか、お父さん。事務所へいらつしやる必要なんか絕對にありませんよ

お父さんが如何にも疲れて見えると云つてゐるのを聽くのは、吾々には大變氣まりが悪いですよ。こゝにはこんな大きな家と庭とがあるぢやありませんか。氣を――氣を變へるためにですね、この家と庭とを鑑賞してゐらつしやれば確かにお父さんは幸福になれると思ふんです。でなければ、お父さんは何か道樂をお持ちになるといゝと思ふんです。」

すると季の娘のローラが高慢ちきに云つた、「凡ての人は道樂を持つべきだわ。道樂がなけりや、生きて行けないわよ。」

よし、よし！　彼はハーコート通りに行く丘を營々と登り始めながら、苦笑せざるを得なかつた。若しも彼が道樂を求めたとしたら、ローラやその姉達やシャーロットはどうなるだらうか、彼は知り度かつた。道樂仕事くらひでは町の家や海岸のバンガローや、馬やゴルフや、音樂室にある舞踊用の六十ギュアの蓄音機等と引替へ出來ない。彼は之等のものを彼等に咨んだと云ふわけではなかつた。否、彼等は利巧な、美しい少女達であつた。そしてシャーロットも相當な女であつた。彼女等がもてるのは當り前であつた。實際町では彼等の家程人氣のある家は他にどこにもなかつた。他のどんな家族でも、彼等程には他人を歡待しなかつた。で老ニーブ氏はどんなに屡々、喫煙室のテーブルの上で煙草入を相手に押しやりつゝ、彼の妻や娘達や彼自身さへの賞讃を耳にしたことだらう。

「お宅は理想的の家族でいらつしやいます。本當に理想的の家族でいらつしやいます。丁度何か本で讀むか、舞臺の上でゞも見る樣です。」

「それはまアさうだらうね。」老ニーブ氏はいつも答へた。あれ等の内誰かを試して見給へ。わしはお前さんがあれ等を好かれるだらうと思ふよ。で、若しお前さんが庭で煙草を吸はうと云ふ氣になると娘たちも芝生の上へ出て來るのだよ。ほんとにさうなんだよ。」

娘達が結婚しようとしなかつた理由はそれだと、人々はさう云つてゐた。彼等は誰とでも結婚出來たのだけれども彼等は家庭で餘りに仕合せであり過ぎた。彼等は御互にあまり幸福であり過ぎた。娘達もシャーロットも。フム、フ

ム成程！　多分さうだらう…。
　この間に彼は、當世風な町並のハーコート通りをずうつと歩いて來たのであつた。彼はその端の家、彼等の家に着いた。車の通る門が押し開かれた。馬車道には車輪の新しい跡があつた。と、彼の前は大きな白壁の家があつた。その家の窓は廣く開かれ、絹網のカーテンが窓外にひらめき、廣い窓臺にはヒヤシンスの青い壺があつた。車寄せの兩側には紫陽花――この町で有名な――が花盛りであつた。桃色で青色の花の束が擴がる葉の間に光りの様に咲いてゐた。そしてその家と花と馬車道の新しい跡さへ、何だかかう云つてゐる様に老ニーブ氏には思はれた。「こゝには若い生命があります。娘達がゐます――」と。
　玄關の廣間はいつもの様に、樫の箱の上に積重ねられた肩掛や、日傘や、手袋でうす暗かつた。音樂室からは、キビ／＼と、騒しく、性急に、ピアノがひびいて來た。半開の應接室の扉からは聲が流れて來た。
「それでそこにはいろんな氷があつたの？」とシャーロットが云つてゐた。と共に、彼女の搖り椅子の音がキーキーなつた。
「いろんな氷ですつて！」とエセルが聲高に云つた。「まア、お母様は、そんなにいろんな氷なんか御覧になつたことないでせう。たつた二種類だけよ。そして一つはヅク／＼にぬれたヒダのある飾り紙に入つてゐる普通の小さないちご屋の氷よ。」
「そこの食物はみんな隨分ひどかつたわ。」とマリオンが口を出した。
「それにしても、氷には未だ早いんですよ。」とシャーロットは安らかに云つた。
「だつて、みんな喰べてゐるんですもの…」とエセルが始めた。
「ホヽ、それもさうね」とシャーロットが低い聲で云つた。
　急に音樂室の戸が開いて、ローラがかけ出した。彼女は老ニーブ氏を見て跳び上がり、危くキヤツ！　と云はむばかりであつた。

「まあ、お父様！ 喫驚したぢやありませんか！ たつた今、こゝへおいでになつたの。あら、チャールズは何處へ行つたのかしら。外套をおぬがせもしないで・・・。」

彼女の頰は遊戲をしてゐたために紅くなり、眼は輝き、髮は額にふりかゝつてゐた。そして彼女はまるで闇をつき拔けて走つて來たところを驚かされたかのやうに息せき切つてゐた。老ニーヴ氏は自分の季娘をまじ〱と見つめてゐた。彼は以前にこの娘を見たことがなかつた樣な感じがした。それはローラであつた。ローラであつたかな？けれども彼女は父を忘れて了つた樣に見えた。彼女がそこへ出て來たのは父を迎へるためではなかつたので、彼女は皺になつたハンカチーフの端を齒の間に嚙んで、腹立たしげにそれを引張つた。電話が鳴つた。あゝあ！ とローラはすゝり泣きの樣に叫びつゝ、父の前を橫切つてかけ出した。電話室の戶がピシヤリと閉つた。と、その瞬間にシャーロットが呼んだ、「お父樣ですか。」と。

「あなたはまた疲れてゐらつしやるのですね」とシャーロットは難ずる樣に云ひつゝ、彼女は搖り椅子を止めて彼女の溫い桃の樣な頰を彼の頰にあてがつた。金髮のエスルは父のひげを指でつゝいてゐた。マリオンは唇を父の耳にあてた。

「步いてお歸りになつたんですの？お父樣。」とシャーロットが訊いた。

「うん、わしは步いて歸つたんだよ」と老ニーヴ氏は云つて、大きな應接室用椅子の一つに深く腰を下した。

「あら、何だつて辻馬車にお乘りにならなかつたの」とエセルが云つた。「その時間頃には澤山辻馬車があるのに。」

「ねえ、エセルちやん」とマリオンが聲を張上げた。「お父樣が御自分で疲れるのがお好きなら、わたしたちは何のために餘計なおせつかいをするのだか、薩張り分らないわ。」

「これ〱、お前さんたちは・・・」とシャーロットがなだめた。

けれどもマリオンは止めようとしなかつた。「いゝえ、お母樣、そんなに甘くしちや却つてお父樣のためにならないわよ。それはよくなくつてよ。お母樣はもつとお父樣にきびしくなさらなきや駄目よ。お父樣は本當にちつとも云ふ

ことをおきゝにならないんですもの。」彼女は朗らかに大笑して、鏡に向つて髪を撫でた。不思議なことだ！ 彼女がまだ少女だつた頃には、彼女の聲は大變やさしい、內氣な聲であつた。吃りでさへあつたのだが、今では彼女の云ふことは何でも――「ジャムとつて下さらない？ お父樣」と云ふ位の事でさへ――臺詞めいてひゞいたのである。

「ハロルドはあなたより前に事務所を出ましたの？」と、シャーロットはまた椅子を搖り始めつゝ訊いた。

「どうだかね」と老ニーヴ氏が云つた。「四時以後にはあれに會はなかつたのだ。」

「あの子が云つてゐるんですがね――」とシャーロットが始めた。

けれどもその瞬間、帳面か何かをひねくつてゐたエセルが、お母さんの所へかけて行つて椅子の側に腰を下した。

「これ、御覽なさい。」と彼女は聲高に云つた。「私のつもりではねえ、母アさん、銀色がかつた黃色にしようと思ふいゝとお思ひにならない？」

「どれ拜見、」と、シャーロットは云つた。彼女はべつ甲の眼鏡を手さぐりしてとり、それをかけ、むつちり肥つた小さな指でその頁を輕く抑へて、口をギユツとすぼめた、「大變いゝこと！」彼女は低聲でかすかに云つた。そしての。眼鏡越しにエセルを見た。「でも、裳裾は私、御免だよ。」

「裳裾はつけないわ！」とエセルは悲しさうに泣聲で云つた。「でも本當は裳裾が肝心なんだけど……。」

「さあ、お母さん、私に決めさせて頂戴」とマリオンがその紙をシャーロットから芝居がかりにひつたくつた。「私お母さんと同じ考へよ。」と彼女は勝ち誇つて叫んだ。「裳裾は重苦しいわよ。」

忘れられた老ニーブ氏は椅子の廣い凹みに腰を下して、まどろみつゝ夢みるものゝ樣に、彼等の聲を聞いてゐた。彼は全く疲れきつてゐた。それに疑ひはなかつた。彼は支持を失つてゐた。シャーロットや娘達でさへ、今晚の彼には重苦しかつた。彼等は餘りに……餘りに……。けれども彼のぼつとした頭で考へ得た凡てのことは――彼には餘りに多過ぎた。そして凡ゆることの背後の何處かに、小さい、しなびた老人が、限りなく續いてゐる階段をよぢ上つてゐるのが彼には見えてゐた。

その老人は誰だつたらうか。
「私は今晩着代へないよ、」と彼はつぶやいた。
「何を云つてゐらつしやるの、お父様。」
「えゝ、何をつて何を？」老ニーヴ氏は喫驚して目をさまし、彼等の方を見つめた。「わしは今晩は着代へないよ」と、彼は繰返して云つた。
「でも、お父様、ルシルが來るのよ、それからヘンリ・ダヴンポートも、テディー・ウォーカー夫人も。」
「それぢやまるで繪からぬけ出した様ぢやらう。」
「御氣分がお惡いのぢやなくつて、」
「別に努めてゐらつしやらなくてもいゝのよ。チャールズに何處へ行つてゐるのでせう？。」
「でも、あなたが本當にお氣が向かないなら、」とシャーロットはためらひながら云つた。
「よし！　よし！」老ニーヴ氏はやをら起き上つて、丁度彼の寢室のところまであの小さな老人と同じやうに攀ぢ登つて行つた……。
そこでは若いチャールズが彼を世話してゐた。注意深く、まるで凡ゆることがその一事によるかの様に、彼は湯たんぽの罐をタオルで卷いてゐた。若いチャールズはまだ紅顏の少年の頃に、火の世話をするためにこの家に來て以來、ニーヴ氏のお氣に入りであつた。老人は窓の側の籐椅子に身を横たへ、足を延して、一寸夕方の冗談を云つた。「さア身仕度をしてやつておくれ。チャールズ！」するとチャールズは深く息を吸ひ、眉を寄せながら、彼の前にかゞんでネクタイからピンを取外した。
フム！　よし、よし！　開かれてゐる窓の側は愉快な、大變愉快な——美しいおだやかな夕べであつた。下のテニスコートでは草を刈つてゐる。草刈り鎌のチヤキ／＼と云ふやわらかい音が聞こえて來た。間もなく娘達はまた例によつてテニス會を始めるのであらう。そしてそのことを考へると、彼にはマリオンの聲がかうひゞき渡る様な感じが

した。「それ、あなたの方へ行つたわよ…それ、やつた…まア、隨分うまく行つたわ。」するとその時、シャーロットがヴェランダから聲をかけて「ハロドルは何處にゐるの」と訊く。するとエセルが、「兄さんはこゝにゐないやうよ、お母樣。」と、またシャーロットがかすかに、「あの子が云つてゐるんですがね――」と云ふのが聞こえる。

老ニーヴ氏は溜息をして立上り、一方の手をひげの下にやつてチャールズから櫛を受取り、そして白いひげを注意深く櫛けづつた。チャールズは彼にたゝんだハンカチーフ、時計と印形、それから眼鏡の容器を渡した。

「あゝさうか、よし、よし。」戸を閉めて彼は腰を下し、獨りになつた…。

するると今や、例の小さな老人が華やかで、樂しさうな食堂へと導いて行く無限の階段をよぼ〳〵と降りてゐた。何といふなさけない足だ! まるで蜘蛛の――細くてちゞんだ足だ。

「お宅は理想の家族、本當に理想の家族でゐらつしやる。」

けれども本當に理想の家族だとしたら、何故シャーロットや娘達は彼を止めなかつたのだらう。何故彼は一人ぼつちで階段をよぢ上つたり下りたりしなければならないのだらう。ハルロドは、何處に居るのだらう。あゝ、ハロルドなんか、何もあてにはならない。下へ、下へとその小さな、年老つた蜘蛛は降りて行つた。やがて蜘蛛は食堂をすり拔けて玄關へ出、暗い馬車道から車の入る門を通り、事務所へと行くのであつた。老ニーヴ氏はそれを見て非常に心配になつた。それを止めて、それを止めて、誰か!

老ニーヴ氏は跳ね起きた。彼の寢室は暗かつた。窓は蒼白く仄明るかつた。どれくらゐ彼は眠つたのだらう? 彼は耳を傾けた。するとこの大きな、高い、暗い家中に遠くの人聲、遠くの物音が流れてゐた。多分長い間眠つてゐたのだらうと彼はかすかに考へた。彼は忘られてゐたのだつた。彼等凡ては――この家もシャーロットも、娘達やハロルドも――彼に何の關係があるのだらう。彼等について彼は何を知つてゐるだらうか。彼等は彼にとつて緣もゆりかもない人達であつた。人生は彼を通り過ぎて了つた。シャーロットは彼の妻――彼の妻――ではなかつた。

…宛もそれを了解してゐるかの如く悲しげに、なげかはしげに葡萄蔓は頸垂れかゝり、そのために玄關は半ばか

くされて仄暗かつた。小さな、温い腕が彼の頸のまはりにまつはつて來た。小さい、蒼白い顏が彼の顏をのぞき込んで來た。一つの聲が聞えた、「さよなら、わたしのお寶。」

私のお寶！「さよなら、私のお寶！」

女どもの內の誰が話したのだらうか。何故彼女等はさよならと云つたのだらうか。何かひどい誤ちがあつたのだ。彼女は、あの小さい蒼白い娘は彼の妻であつた。そして彼の餘生の凡ては夢であつた。

その時戶が開かれて、若いチャールズが逆光の中に立ち、兩手を腰にあてゝ若い兵士の樣な聲で云つた、「お食事が出來て居ります、旦那樣！」

「行くよ、行くよ、」と老ニーヴ氏は云つた。（完）

如何にもマンスフィールドらしい――チエホフの感化が大きいと云はれるマンスフィールドらしい――絕望的な、暗い作品である。家族のために非常に有用な生活を送つて來、相當の財産と事業とを殘しては來たが今はもう財産と事業とを繼承せんとする彼の家族から本人自身が却つて無用の長物視される、よしんば道德的にはいかに優しい態度を示されてもと云ふ、皮肉な併し極めて有得べき現實の一樣相を描いてゐる。他人から見れば理想的の家庭でも、內へ這入つて見ればかくも魂の孤獨を嘆かねばならない場合があると云ふ悲痛な人生の嚴然たる一面――實に珠玉の短篇と云ふべきだらう。ニーヴ（Neave）とは英國にはない姓である。作者は多分ニープ（Neap 干潮のため舟行膠着する意）と云ふ語を聯想しつゝ與へた名でなからうか。主人公は老齡のため血行漸く干上り、心身の運行從つて膠着せんとする老廢船であるからだ。

時評

# 時言數題

大槻憲二

## 一　非常時への言葉

愈々一九三五年は來た。本格的非常時に一歩を踏入れたわけである。この秋に當り分析學徒もまた、國民の一人として國民全般に對し、自己の專攻部門の敎ふるところを傳へておくはその義務の一端であらう。

個人と同じく社會や國家も、その超自我の苛責を被らぬやうな行動の仕方を常に心掛けることが必要である。超自我の苛責を被るやうな行動をとることは、罪障感を持つやうな結果に自分を陷れることで、卽ち、それだけ自己懲罰慾を自己の心内に生ぜしめるやうになる。これは戰はずして自滅せんとする願望を自己の心に植付けることを意味し、個人としても國民としてもこれほど恐ろしいことはないと思ふ。外部の敵は防ぎ得べし、內部の敵は禦ぐに由なし。わが國民が某民族に對して罪障感を確に持つてゐるらしいことは、震災時に於けるあの不安症的な攻擊的態度に就いて見て疑ふことは出來ない。自分に罪障感あるものは、相手に對して逆に反動的攻擊態度をとるやうになるが、それが一轉すると、今度は自己懲罰的態度となる。或る意味で確に國民的超自我の代表であるところの左翼小兒病患者たちの自國否定的言說がその顯現であると、私は解釋してゐる。個人の躁鬱病が期間別的に現れるやうに、民族の躁鬱病は階級別的に現れると云ふこともあり得るだらう。日本が大震災に依つて海中に埋沒したと云ふ空想を自嘲的に某誌に書いてゐた某マルクシストを讀者諸氏は記憶してゐられるであらうか。自己の所屬國の消滅を空想するなど、何としても健康な精神ではない。併しこの不健康の原因は必ずしも當事者にのみあるのではない。

筆者は日本の某民族に對する態度や處置がよかつたか惡かつたか、當然であつたか不當であつたか、そんなことは知らない。私は政治學者ではなく社會學者でもないから、さう云ふ批判を下す能力は私にはない。併し震災時に於いて症候的に發作した國民的態度を見ると、そこに罪障感を覺えてゐることだけは何としても事實らしく思はれる。

個人生活に於けるとは違つて國民生活に於いては、時には思ひ切つた事を已むなくやらねばならない場合もあ

るだらうと思ふ。併し原則的には、出來るだけさう云ふ事は避くべきが當然だらう。古來、無名の師を起すことなかれと云ふ言葉がある。戰を起す場合には、日本人はまづ錦旗を陣頭に掲げるやうにした。みな超自我の是認と裁可とを經なければ結局、自分のために、不得策であることをよく心得てゐたからだ。

日清役直後に於ける獨佛露三國の干渉事件は、心理學的に云つて誠に拙い政策であつた。あれに依つて永く日本の怨みを買つたばかりでなく、三國がそれぞれ自國民の超自我をやましめ、後年に於ける日露、日獨交戰に際しての敗北の心理的遠因をなし、佛國の如き今日なほ日本を恐怖してゐると云ふではないか。當然である。日本よ、汝もまた彼等の覆轍を追ふことなかれ。

## 二　クリュッペルハイムの運動

分娩時の不注意やその他種々の原因から不具者となる人は非常に多く、またその不具を直らぬものと思ふて放置してゐる人は非常に多いが、現在の整形外科では大低は治療出來るのだと云ふことを一般に知らしめるために社會教育協會が主催となり、去る十一月十六日夜、朝日講堂で講演會が催された。不具者の治療は單に外貌の整美のみならず、その人の本來の能力を社會的に十分に活かすべき機會を復活させると云ふ意味で、人物經濟及び道德上の意義ある運動で、これはある。精しいことを知りたい方は市內大森區田園調布二丁目七二四、クリュッペルハイム、東星學園長、守屋東女史に就いて問合せられたし。

クリュッペルハイムの運動に我々が特別の關心を持つのは、それに依つてその人の精神上のクリュッペル（不具）――劣等感その他それに類する諸々のコムプレクス――も幾分除去出來るであらうと思ふことに存する。併し我々の云つておきたいことは、身體上の不具以前に心理上の不具は存在し得べきこと、身體上の不具はあつても精神上の不具は分析に依つて必ずしも治療不可能でないこと、身體上の不具の除去のみでは、心理上の不具は全部的に、或は部分的に存續すべきこと……以上三者である。我等はクリュッペルハイムの運動に滿腔の贊意を表はすと同時に、心理的クリュッペルハイムの運動たる我々の分析運動にも多少の關心を拂ひ給はむことを希望してやまぬ。

## 三　保護兒童早期發見法

保護兒童研究會が都新聞（十一月三日、家庭欄）に掲げた保護兒童早期發見法十五ケ條は、その數條を轉載し

て見ると、次の如くである。

一、智的方面のことは相當に(時には拔群)よく出來るが、友と交はることを餘り好まず、兎角獨りぼつちになり易いやうな傾向はないか

一、年の割に温和しすぎたりはにかみすぎたり、するやうなことはないか

一、大變陽氣に遊んだり勉强したりしてゐるかと思へば、何時とはなしに沈み勝ちになるといふやうな傾向はないか

一、一體何のため左樣な言動をなすか、その原因が一向判らないといつたやうな事をする傾向はないか

一、何もそんなに向きになつて怒つたり悲んだりするには當らないやうな小さな事迄、强く氣にするといふ樣な傾向はないか

一、感情が兎角激越性で、一度怒ればことの前後、人の見境ひなしに、度外した言動を敢てする傾向はないか

一、常に精神的に壓迫を感じおづ〳〵して居り、親の愛に疑惑を感じ、厭世的氣分に閉ざされるといふやうなことはないか

一、他の子供を苛めたり苦しめたり、又人の嫌がることを好んでやるといふ傾向はないか

一、常に人の缺點や非を探索發見することにつとめ、これに成功するや手痛く辯難攻擊し、時には著るしく憤激するにも拘らず自分の事には一向内省しないといふ傾向はないか

一、無暗に物を誇張したり、見榮を張つたり、得々とした り人を罵り、讒言して好訴性に富む傾向はないか

一、人の話にまで常に注意してをり、一寸した機會さへあれば直にその話の中に割込んで、自分が中心になる事を平氣でやるやうな傾向はないか

併しこれ等に相當する兒童が特別の注意を要するとなれば、凡そこのやうな傾向を示さないものゝ方が少いのではなからうか。否、成人だとて大低はみなそれ等の條々に相當してゐる。一體、「保護兒童」なる概念が我等には分らない。保護の必要のない兒童を考へることの方が人々には困難であらう。多分「不良」の語を避けたのであらうが……。なほ最後に、面白い一條がある。

一、平氣で大言壯語し快活に人と語る、好んで虚言をいひ作り話をして話に興を添へ、人の興ずるのを見て喜び、又新しい言葉や文句を盛んにくり出して、得意がつてゐるやうなことはないか

これを讀んで私は直ちに、ゲーテ自傳中の作り話の條を想起した。少年ゲーテが自作の童話をその友達に語り聞かせる話である。その童話の主人公は作者自身であつて、而も毎日會つてゐるその友(ゲーテ)がとても本當には行くべくもない遠いところへ行つた話や、とても行ふことの出來得べくもない奇拔な話を彼等は喜ぶのである。『だから彼等は私にいいやうに操られたと云ふよりは、彼等自らに(分析者を云はしむれば彼等自身の無意識願

望に）より多く操られたのである。さうしてもし私が、これ等の幻像や妄想を、自分の天分に従つて藝術的表現に仕上げることを、段々學ばないでゐたならば、あんな虚構のやり始めは、私の上に、どんな惡い結果を來したか、分つたものではない』とゲーテは告白してゐる。子供は、云はゞみんな不良兒なのだ。ゲーテの如き最も偉大なる不良兒である。本能（エス）はその本性としてどうせ現實には合はないにきまつてゐる。そのエスがありのまゝに發露せられる兒童生活は、みな不良傾向のある方が頼母しいとさへ云はば云へる。ゲーテの如き最も本能力が强かつたから不良傾向も甚しかつたらう。保護兒童協會の警告は、結構は結構だが、兒童心理を十分に理解せずしてあの條々を鵜呑みにし、兒童に苛酷な制裁を加へるやうなことがあつては、却つて大變な結果になると思ふ。

## 四　五十嵐博士の源氏評

國文學と文章學の權威五十嵐力博士が『藝術殿』十一月號誌上で、『源氏物語』の文章批評を試みてゐられる。その批評に就いて二三首肯し難い點があるから、ここに愚見を述べて博士の示教を煩はしたい。

（一）源氏が須磨にさすらふ四五日前、朝早く左大臣邸から歸るところを寫して『明けぬれば夜深う出で給ふに、有明の月いとをかしう……』（圏點は五十嵐博士所附、以下同）云々とあるところを博士は『明けて了へば夜が深くないわけで、また夜が深くては有明の月が存在し得ない筈だから……』と難じて居られるが、私は『夜（の思ひなほ）深う……』の簡約法であらうと思ふ。その前夜を如何に送つたか私は忘れたがなほよく考へて見たい。換言すれば、ここは象徴的表現であると思ふ。否、博士の難じてゐられる源氏文章の晦澁不自然は、みな源氏の象徴的表現を十分に同情鑑賞せられてゐないためでなからうかと愚考する。

（二）更に程へて愈々源氏の立出づるところで『出で給ふほどを、人々のぞきて見奉る。入方の月いと明きに、いとどなまめかしう淸らにて……』云々とあるを、『とくに朝日がきら／＼と輝き出でてゐるわけであるのに、西の山の端に入りかけた月がいと明るいとあつてはまるで、季節時刻の觀念といふものがないやうに思はれる』と博士は云つてゐられるが、これは叙景の如く見せかけて、實は源氏の美しい姿を形容してゐるのに相違ない。『入方の月（の如く）いと明き』美しさと云ふ意味で美男美女の形容に光り（殊に月光）を象徴的に利用することは古今東西その例は甚だ多い。第一『光源氏』と

云ふ名からして『美男源氏』の意味に外ならないであらう。

（三）　同じ年の冬の一夜、須磨なる源氏が、物凄い荒れ模樣の折に、琴、笛、唱歌に滅入る心を慰めつゝ都を偲ばれる所で、冬になりて雪降り荒れたる頃、空の氣色もことに凄く眺め給ひて、琴をひきすさび給ひて、良清に歌うたはせ、大輔横笛吹きて遊び給ふ。……霜の後の夢を誦じ給ふ。月いと明うさし入りて、はかなき旅のおましどころは、奥までくまなし。』と云ふところを、『雪までが降つて殊に凄いといふ夜が、一寸の間に何のことわりもなく「月いとあかうさし入りて」は、あんまりの急變であらうと思ふ。』と博士は云つてゐられるが、こゝもやはり叙景と見せかけて實は源氏の心持の動きを象徴的に表現したものでなければならないと思ふ。叙景に依る心境の表現は文藝技巧の常道でその心理的契機はやがてまた詳論の機會があるであらう。その實例は古今東西の文學に殆ど充滿してゐる。小說から戲曲になるとこの技法は一層露骨になつて來る。博士は問題にしてゐられないが『霜の後の夢を誦じ給ふ』などゝ云ふ文句もをかしいと云へばをかしい。雪の話をしてゐたところへ急に霜が出て來て、その後の夢とは何の事やら常識では一寸分らぬ。併し霜に氷つた心持が段々と解けて、夢の如く浮き立つて來たと云ふ意であらう。かくて『月いと明うさし入りて、』と云ふのは、部屋の中へではなく源氏の心の中へ光明が樂しさがさし入つたので、かくて心の『奥までくまな』くなつたのであらう。

（四）　同じ文中で『（源氏は）良清に歌うたはせ、大輔横笛吹きて遊び給ふ』とあるは、文法修辭上、主格の統一偶整を缺いた一種の非法破格」だと云つてゐられるが併しもし、良清は源氏に命ぜられて歌をうたひ、大輔は自發的に横笛を吹いたのであつたらば、かう書いても差支へないのでなからうか。少くとも博士のやうに正すわけには行かなくなる。

（五）　明石入道が詞の中に、桐壺の帝が更衣を殊寵された事を寫して『國王すぐれて、時めかし給ふこと並びなかりける——』とあるは、『形容詞の拙い無用な重用で「すぐれて」といへば「並びなかりける」が無用』だと評してゐられるが、『國王（の御心持、御機嫌）すぐれて、（更衣を）時めかし給ふこと（他と）並びなかりける』と解した方がよいのでなからうか。かく解すれば重用ではなくなる。

『諸名家の古典批評』のやうに何等『具體的根據の明示』なしにたゞ『手放しに褒めてゐる』だけでは仕方がない。

その意味で私は博士が『合理的批評を加へ』られたことは、國文學研究史上の一大進歩であると思ふ。唯その合理主義が意識心理的合理主義であつては文藝に對してはいさゝか見當違ひの批評になるのではなからうか。無意識心理的合理主義でなければならないのではなからうかと思ふのである。博士の合理的批評のメスのすき間から、私はお蔭で匿れてゐた眞珠の光を瞥見することが出來た。その意味で我々は博士に感謝しなければならない。いさゝか管見を述べて博士の叱正を待つ。

## 五　再び英語教育者に望む

本誌昨年二月號誌上に私は『英語教育者に望む』の題下に、俗語をたゞ俗語と云ふだけで投げ出さずに、その心理的説明を加へて敎へなければ、學生に對して惨酷であると云ふ意見を述べておいた。その後になつて氣付いた類例を、なほ一二こゝに擧げて、英學界への參考に資したい。

『英語青年』の昨年十月頃の或る號の何處かに問題になつてゐる、次のやうな文章がある。 "...the surface current of opinion may be, and often is, dead against him"『輿論の表面的流れは、彼に斷然(全然)反對しさうだし、また屢々反對してもゐるのだ。』この場合に、"dead"は英語の辭書には"compeltely"の意と敎へてあると、從來、英語教育者は學生たちに傳達したゞけで能事終れりとしてゐたのだが、これでは不親切だと云ふのが、私の意見である。何故、「死」が「完全に」であるのか、日本語として譯して見るとこの二語の表はす兩觀念には何の關係もない。學生は妙な使ひ方をするものだなアと思つて、語學などそれだけでもいやになる。不勉强になるのは當然だと思ふ。英語としては、これ等二語の觀念内容に如何に必然的關係があるかと云ふことを敎へ込めば、成る程、英語は、いや語學は面白いものだなア……と非常に興味が湧いて來るわけだ。それに dead と云ふ音の强さも考慮に入れなければいけない。この文を譯して『彼に完全に反對』と譯しては音の强さが出ないから、同じくd音をとつて「斷然」と私は譯して見たのだ。

倂しいつも〲『斷然』では斷然困る。岩倉氏が本誌本號に譯してゐられる『理想の家族』の中に次のやうな一節がある。 "Old Mr. Neave stopped dead under a group of ancient cabbage palms outside the government buildings!"...岩倉氏はこゝを『...ハタと立停つた』と譯してゐられたと思ふ。適譯である。こゝでは『斷然

と云ふわけには行かない。併しそこにはやはり『死んだ人のやうに』と云ふ觀念が這入つてゐることを忘れてはならない。敎へる場合にもさう敎へて貰ひたいものである。同じことは、ドイツ語その他の國語に就いても云へる。他日また擧例しよう。

## 六　永井博士の婦人論

醫學博士永井潜氏は大阪府衞生會發行雜誌『通俗衞生』昨年十一月一日號誌上で『婦人よ自らを知れ』の題下に次のやうに論じてゐられる。

『私は嘗つて人口食糧問題の小委員會の席上に於て『婦人とは、子供を拵らへるべく造られた所の最も微妙なる自然の機械である』と申しまして、某博士から反對を受けました。婦人特に新智識の豐かなる所有者たる所謂新しい婦人達からは斯る言辭を弄することは、婦人に對する大なる冒瀆であるとして、抗議を受けるかも知れません。併し如何に反對を受けても、小言を頂戴しても、斯の結論を改める譯には參りません。何んとなれば、夫れは私一個の獨斷ではなくして「自然」が與へた所の動すべからざる判定であるからであります。』

併しこの斷定と主張とには大きな缺陷がある。第一に『子供を拵えるべく造られた所の最も微妙なる自然の機械』と云へば、敢へて婦人ばかりでなく、男子もまた然りである。男女人間の總てがさうなのだ。男女人間ばかりでなく、一切の複細胞生物がさうではないか。さうだ一切の生物はそれが單に生物としてのみ見られる限りに於いて、博士の定義する如き『機械』である。併し人間の機能は單に子供を生むべき機械としてのそれのみにあるのではない。他のさま〴〵なより心理的な機能を有してゐる。これ等諸々の能力を無視して、單純に生殖機械視したことは、婦人並びに人間に對する『冒瀆』であると考へた『某博士』や『新しい婦人達』の方が正しいのであつて、博士の方が確に誤つてゐる。この命題はかう、書改めらるべきである『人間もまた(就中その内の婦人)は生物として見られ得る限りに於いて、子供を拵へるべく造られたる最も微妙なる自然の機械である』と。

かう改めれば、誰とて『反對』も『抗議』もしないのだ。それ位の事は、博士に分つてゐない筈はないのだ。然るにそれほど自明の事を博士が何故に氣付かなかつたかと云ふところに、問題がある。さうしてその問題(心理的契機)を究明することが、本文執筆の私の動機であるのだ。さう考へてゐたところへ、奥本島田君が本誌本號所載の論文『知的ナルチスムスの自己分析』を編輯部へ送つて來た。就いて見るに、永井博士の唯心論に言及し、そこにサディズムと神經症とがあると斷じてゐる。私は

唯心論者が總て果してサディスティックであるか、神經症的であるかに就いては、只今一般的結論を下す勇氣はないが、少くとも永井博士の場合に於いては、そのサディズムと神經症的傾向とを、右に紹介した論斷の不完全さに就いてだけでも、否定し得べくもないと考へざるを得ないのである。

恐らくは、博士は人間殊に婦人に對して母コムプレクスの消極轉嫁を寄せてゐるところのサディストであらうと思ふ。婦人に對して『冒瀆』的言辭を弄することが、博士に神經症的快樂であるのだ。さうして、さう云ふコムプレクスからして右の如き認識（と云ふよりは命題）の不完全が生じてゐるのであらうと思ふ。凡そ人間はそのコムプレクスが基礎となつて、それに最も適當した世界觀なり人生觀なりを構成するものであるからだ。その意味に於いて一切の學者はまづ自己分析から始めなければ、客觀的妥當性ある學說を樹立すべく全然不可能であると云ふことを悟らねばならない。哲學者はまづ認識論から始めよと云ふのが、カント時代の最高の學者的良心であつた。併し今日に於いては、まづ自己分析から始めることが、その代りとなるべき時代になつてゐるのだ。博士には昨春モリス展會場で面識を得て敬意を寄せてゐる。拙文の眞意を誤解し給はざらむことを。（完）

# 映畫「母の手」を見て

岩倉具榮

最近評判の映畫「母の手」は讀者諸氏の中にも御覽になつた方が多いことゝ思ふ。原作はレオン、フラピエ氏で一九〇四年にゴンクール賞を獲得した小說である。

兩親を失つたローズといふ娘が保育園の小使となつてゐる中、多くの少年少女に慕はれ、彼等の母親の代りになつて色々の面倒を見てやり、細かい行きとゞいた世話をしてやるのである。

ローズは確かにグレート・マザーの役をしてゐる。勿論彼女は未だ處女であるが、女性の誰もが懷く母となり度い心は既に彼女の中に明かに芽生えて母の役目を演じてゐる。それは凡ゆる子供を愛さないではおかないといふ偉母大母である。慈愛にあふれた觀音神の樣なものである。作者が彼女にローズ（Rose薔薇）の名を與へたとも偶然でない。薔薇は花（女、母）の王（巨母）だから。

又子供の側から見れば、母の手を求めて止まない心が如何にローズといふ娘に向けて注がれてゐるかゞ如實に寫されてゐるのである。不幸な園兒達は、殊に母の愛に

飢えてゐるローズは多くの子供にとつて母の代りとなつてゐるのだ。畫面に寫し出された色々の映寫には兒童心理の上からも敎へられる所が多かつたと思ふ。母の愛を獨占せんとする子供の嫉妬心等もよく分るのであつた。

子供等の中にマリーといふ少女があつた。その實母は所謂賣笑婦で、男と連立つてマリーを置いて逃げて了つた。マリーは滿されない母を求める心をローズに向けて熱烈に轉嫁する。ローズはマリーを引取つてやる。マリーのローズに對する愛は獨占的である。他の子供にも自分と同じ様にローズが接吻してやることは大いに不平なのである。

その中にある日、兒童心理學の大家が保育園を視察に來て、兎のお話をしてゐるローズを見て彼女が優秀な保姆であることを見拔きそして學位を持つてゐることが分つた。敎師の免狀を持ち乍ら之を祕してゐたことが當局の忌諱にふれたので、ローズは生活の不安に襲はれる。丁度この時、以前からローズに好意を持つて愛情を寄せてゐた視學のリボア氏は、救助願望をおこしてローズに求婚するに至る。

ローズもリボア氏を愛してゐたので之を受入れるが、今迄の仕事をつゞけて行きマリーを引取り度いと懇願するが、リボア氏は之に反對する。恐らく彼もローズを獨占し度かつたのであらう。

一方マリーは、ひそかにリボア氏とローズとの結婚のことを知り、ローズに棄てられて了ふのではないかと絕望のあまり、フラ〳〵と足を港に運んだ。そこでマリーが見たのは抱き合つてゐる男女の姿であつた。水に映る男女の影は何時しか母親の顏となり、ローズの顏になつて行つた！（兩者コムプレクスの巧みな表現！）母親の愛を奪ふ憎らしい男達！　マリーの無意識のエディポスコムプレクスは自らの死の願望ととけ合つて現れて、水に映る影に向つて石は投げられる。投石に續いて彼女自身の身體も水中に投げ入れられる、幸か不幸か、マリーは救はれて蘇生した。

リボア氏も、ローズと子供達とが切離し難い存在であることを理解し、ローズをして保育園の仕事をつゞけしめ、又マリーを引取ることを許すのであつた。かくしてローズは女性としての天賦を全うして生きて行くことが出來た。全篇を通じて色濃く出てゐるのは人類の母を求むる心、卽ち母コムプレクスである。（完）

資料

# 少年犯罪の實話三つ

窪田甲子郎

私の兒童研究と不良少年の研究ノートから話三つを拾つて見よう。みな甲府署管内に起つた話である。第一は貧家の兒、第二は市内有力者の兒で、第三は說敎强盜の幼少時代である。何れも幼時定着が犯罪動機となつてゐると思はる。

× ×

保信は母の背でよく泣いた。一日中泣いてゐた、良くまアあんなに泣けたものだと近所の人々から不思議な眼(まなこ)で見られるほど泣き虫だつた。三歲の終り頃から四歲頃まで泣き虫で通つた保信が、どうした事か、五歲ごろから急に反抗心の强い狂暴性を帶びた子になつて終つた。餘りの急激な變化に親達は驚いた。喧嘩の相手と云へば泣き虫であつた保信が必ず仲間に入つてゐたからだ。

體もあまり大きくない保信は底光りのある上眼使ひの三白眼でいつも友達を睨(にら)み反してゐた。佛の安さんと云はれるほど善良な親爺に、どうしてこんな子供が生れたのだらうと、小リスの素走りのような機敏な動作で立廻る保信を人々は不思議さうに眺めてゐたが、あの甲州三惠加賀美に生れた說敎强盜の幼い時代もさこそと思はれた。

いつか仲間外れにされて唯ひとり、友達の無い一人ぼつちの保信は、求められぬ友達を野に、山に、田圃に求めて、姿を現はした。或る時は農家の鷄小舍にそつと忍び寄つた。その仕草は大人の想像も及ばぬ機敏さであつた。コケッココと啼き叫ぶ聲を聞流して、さも愉快さうに頸を捻り毛を捲つた。稻穗が黃ばんで行く頃にはバッタを追ひ、イナゴを捕つた。これが漸く八歲になつたばかりの保信の生活であつた。『えゝ、そうじやんけえ驚いたもんじやん　あのがきちようは——。』これが保信に與へられた、他人からの最上の言葉であつた。

夜が明けた。田圃の秋の實りは收獲の喜びで滿された。父は子の、子は母の手を握つて秋の感觸を樂んだ。だが、保信は一人ぼつちだつた、滿されない心には幼乍ら深く友達へ、その親達への反抗と激憤が湧いてゐた。山峽の山肌(やまはだ)は白衣で覆はれ、里にも雪が降り出した。山

の子供達は炬燵を圍んで『昔々のカチ〳〵山を』何處の家々でもお爺さんを兄さんを妹をとり捲いて樂しい冬の夜を暮したが、保信にはこんな世界は許されなかつた。

滿されない心、許されない生活……。いつか保信の姿は警察の門をくゞつた。一度警察の味を知つて以來、保信は廿八回の留置場生活を送つた。二十三歳の年には强姦强盜未遂竊盜の前科三犯を重ね、最後の刑務所生活中の今秋、腦膜炎で死亡した。

父なる『佛の安さん』は今年六十一歳だが、母のおみねさんは保信が八歳の時に情夫と駈落した。安さんは佛のようだが保信は鬼畜だと……今更に保信の死は人々を心から喜ばせた。保信が死の直前に告白した話にこんな事がある。

『母に背負はれ無心に菓子を食べてゐた頃、何故か母は突然私の食べてゐる菓子を横取りして喰べて了つた。憤りの餘り母の頭髮を攫り取り、襟元に噛み付いた。だが母は叱らず毎日數回かうした行爲に快感を貪つた。泣けば泣く程、憤慨すればするほどに、食物を横取りする癖は續けられた。それから後の私は、友達が嬉しそうに菓子を食べてゐる樣子を見ると嫉妬ましくなり、自分も人の物を横取りしたくなつた。幾度か續けるうちにほんとうの盜みに興味が湧いて來た。その頃、母はゐなくなつた。後でそれが情夫と駈落した事が分り女に對し（母親は勿論他の母親に）て憎惡の念が深くなつて來た。』……云々。

× ×

秋の夜長の寢ごゝち良いこゝ數日間に、甲府市内の神社佛閣の賽錢箱が十數ヶ所荒らされた。その手口は實に巧妙を極め、何れも合鍵で見事にはづされ、有金全部が持ち去られてゐた。そして附近には決して證據が殘されてゐなかつた。たゞ一ヶ所から優して指紋が擧がつた。然しそれは餘りに優しいので犯人のものとは信じられなかつた。ところが、一ヶ月を經過した或る日、僅か十四歳の可愛い美少年が犯人として檢擧されたのだ。然も町の有力者の長男であつた。子を持つ親の誰れもがあの子に限つてと、何れも驚愕した。この少年が涙で語つた言葉は……。

『私の家の雇人が奥座敷の簞笥を合鍵で開け金を盜んだ。それを見付けた私に口留めの爲めに欲しがつてゐた飛行機を買つて吳れた。飛行機を持つてゐたばかりに、私は泥棒の嫌疑を受け、嚴格な父にひどく叱責された。辯解は通らず數回毆られた。かうした出來事があつてから、何かある度に必ず私は父の前に呼び出されて、問題にされた。父が怨めしかつた。其夜は近くの秋祭りでかなり人出であつた。涙をふきふき裏から祭り見物に女中

に連れられて行つた。賽錢箱に人々が放り込むガチャンと云ふお金の響き、大きな赤錆びた箱の鍵が、家に歸つて寢に就いてまでも夢の中に見えた。……ガチャンと耳に殘つた響、そうして赤錆びの鍵……夢は數囘少年を襲つた。盗みはそれから後の出來事であつた。

× ×

南アルプス山麓を北から南へ貫流する富士川改修工事に多くの土工が入込んで、飯場と飯場との間に毎日のやうに喧嘩沙汰が釀されたその渦中に、漸く八九歳と思はれる一人の子供がいつも流血の慘事を平然と眺めてゐた。動作の敏捷さは隼の如く、大膽さは土工連を驚かした。工事も半を過ぎた頃には組（上級生を手下にして）を造つて親分氣取りで活躍してゐた。弱い者いじめをする年上の者には猛然と挑戰しかけて痛快にやつつけた。これが子供の業とは思はれなかつた。

この子供こそ、明治、大正、昭和に至る捕物帳の記錄に世人の心膽を寒からしめた、兇惡說教强盗妻木松吉の幼時であつた。昭和の今になほ甲州のみに殘る農村機構中に殘る階級的、職業的の存在（野守）の多く住む、三惠加賀美の部落に、彼は育つたのだ。『野守』と云ふ階級、傳統的に理由なくして差別待遇を受けた一族が先祖代々この職を踏襲して、村人の賤視のなかに貧窮と無智と粗暴とに喘ぎつゝ生きて來た群れであつて、松吉は實にさう云ふ階級者の一私生兒として監獄（甲府刑務所）の藁の上に産ぶ聲をあげ、冷い褥の上に三年間を母の乳房のみに賴つて暮したのであつた。

出獄後も、野守は野守の因襲により同じ野守米造を繼父として、部落の堀つ立小屋で育てられた。彼れの隣人は野守の子なるが故に松吉を軒下から迎へなかつた。いつも一人ぼつちで田圃の畦道や山野を歩き廻つてゐた。空腹となれば芋や人參を堀つて食べ、兎や鷄を盗んでは食べてゐた。野守の生活には路傍の一草一石すら自由に手にする事は許されなかつた。天惠に乏しい甲斐の盆地の差別待遇は一層深く彼の胸に打擊を與へた。すべての幸福をたゞ〇〇のみに求めたが、その願望は許されなかつた。貧乏と迫害は遂に松吉を帝都に追ひ拂つて了つた。その後數年間、何處に生活したか……。松吉の犯せる犯行は强盗だけで五十餘件、〇〇の手口を併せると百餘件に達し、而も四年間聳視聽を惱したものと云はれてゐる。彼と大體同じ境遇になつても同じやうな犯罪者とならなかつたものもあることであらうから、そこに素質と云ふ事も考へねばならないが、併し環境などゝ云ふ大雜束な條件で片付けられないデリケートな特殊な心的影

響が同じ環境にあつても、それ〴〵の子供に與へられることを考へねばならない。何でも素質や環境だけで大雜束に片付けることを科學的だと思つてゐる人々の反省を乞ひたい。尤も私はこゝではせめて環境だけを擧げておいたのだが、その眞意はもつと深いところ(個人的定着)にある。併しそこまで突込むで調べることは、只今の我々には出來ないことゝなつて了つた。(完)

# 一つの幼兒期記憶

土屋喜一

多分私が四歳頃だつたと記憶してゐるが、或る日大人に連れられて街路樹の植えてある靜かな道を步いてゐた時、道路の側にあつた大きな木造の建物の中から鐘の音が「カーン！　カーン！」と響いてきた。それを聞いて私は何にか不安な氣持がして來たが、其時連れの大人は脅えた樣な表情をしながら聲をひそめて私に「あの鐘の音がすると、蛇が出て來るのだ。」と說明したのを覺えてゐる。後で母に質ねて知つたのであるが、その建物は女子師範學校だつたので、その鐘の音は始業時刻を知らせるものだつたのである。

私は幼少時母からよく、彼女がその學校の附屬小學校の生徒だつた頃の事を話して貰つた事と、その學校が師範學校だつた事、それから小學校に入學した時理化教室に蛇のアルコール漬けがあるのを見た事などが、この幼兒期記憶に結びついて、小學校でも理化教室や理化の時間が恐ろしいものに思はれたり、理化の時間を知らせる鐘の音に恐怖心を起したりする樣になつたのだと思ふ。然しそれにもかゝわらず、特に理化學に對して興味があつたといふ事は、それが一般に子供の探究心を滿足させる樣な材料に富んでゐるといふ事にも依るが、又その反面には幼兒的コムプレクスに關係したアムビヴレンツがその無意識心理を支配してゐた爲めであるとも思はれる。その後中學生時代にも理化教室、理化の教師、理化學等に對して同樣にアムビヴレンツを持つてゐたし、現在でも多少そうであるから、何如に幼兒期體驗がその人の一生を支配するものであるか、そして何如に幼兒教育が重大であるかを痛感させられた次第である。

# 子供の生活を觀て

倉橋久雄

子供はよく「純眞神の如き」と、形容せられる。だが、子供はそんな天上的なものではなく、もつと地上的な現實的なものである。單なる形容としても、それは大人の買被りである。美化的態度は、映畫にしろ、小說にしろ、その他多くのものに見出される。これは大人にとつて、子供は最もよき愛情の避難所であり、波止場であり、亦未來の希望のおしつけ所であるからだ。然し、子供を「神の如」く見る裏には、時に子供を憎惡の捨て所としてゐる場合のある事を考へねばならぬ。大人が何か不快な感情を受けて外から歸つた時、或は家庭內でそれがあつた時、最も手ひどい、とばつちりを受けるのは大底は子供である。そこで大人はその賠償として、「神の如き」なる尊稱を子供に捧げることにより、その過失を償つた積りでゐる事がある。またそれには、將來同じ憎惡發散を反復する無意識的用意も含まれて居るかも知れぬ。子供にとつて此れ程迷惑はない。

子供の世界は「神の如き」ものの寄り合ひではない。そこは活々とした張り切つた精力が相爭つて、然かも地上にしかと足をつけた生活なのである。まごまごしてゐると、頭の一つもたゝかれて、泣かなくてはならない世界なのである。大人にとつてある場合は、頭の一つや二つに替へられない時もある。だが、遊びが生活であり、戶外が魅力である子供にとつては、これが敵の存在を端的に知らしめるものであり、頭一つがもつとも大きな脅威なのである。常に轉囘する鬪爭に對して、寸時の用心をも怠つてはならないのである。かくて問題を天上より地上へ移して、さてそれから、子供の種々相を見る。

赤ん坊には自己あるのみで他あるを知らず、それは絕へざる要求を主張することに依つて、自己の生命を維持し、合せて自己の快樂原則を確立しようとする。客觀的事情など問題にはならない。

二三才になると、人の事を聞くまいとしても暴力その他の手段によつて無理にも聞かされる。そろ〳〵社會との接觸も繁く、犧牲と云ふ代償で常に子供に强られる。そこで子供の方にも、いろ〳〵駈け引が生ずる。例へば、母親が買ひ物に出かける時、よくかう云ひ聞かせる、「何か買つてくれ云ふなら連れて行きませんよ」と。これは途中でよく菓子をねだられる爲である。多くの場合子供は、それに答へない。かうした時、返事をしては損なことを經驗によつて敎へられてゐるからだ。だが、母親もその儘では連れて行かない、「泣いても買ひませんよ」と駄目をおして連れ出す。成る程、菓子屋の前は無事に通過したが、それはその先の八百屋に些か望みがあるからだ。そこで子供はリンゴ柿をねだる。お利口だからと云

ふ理由で、大概の場合どちらかは一つ位子供の手に渡る。母親にとつては菓子より果物の方が經濟的負擔も少ないし、第一體のためになると考へられる。さあ歸り途だ、この時子供の方では、若しこの上菓子をも買つて貰へたら、どんなによからうと、一應定石通りあの手この手を用ゆる。私達が菓子屋の附近でよく見かける圖だ。結局子供が泣くが、さて泣いて勝つか、泣き損か、兎に角いづれかにけりがつく。大人は約束したと責めるが、子供にとつて約束など始めつからなく、たゞそれはいつも大人の云ふ世迷言位にしか、聞いてゐないのである。かうした時、若し子供の要求が通らないと、よく尿を洩らす子供がある。所謂「泣き小便」と云ふ奴だ。その後怒る度に洩らすので、都合よく出るのを不思議がりながらも衣類を汚されまいと、怒るのを差し控へる樣になる。暫らくかうした狀態が續く。これは子供にとつて、非常に便利な大人にとつては若干困る狀態である。

ある子供が他の子供の家へと遊びに行つたとする。對手が小さく、仲間と遊ぶには妥協しなければならぬことを知らない場合、また知つてゐてもしない場合、子供は得意の一手を用ゆる「いゝよ、それを貸して吳れなければ歸るよ」と、云つてヱホンなり、オモチヤなり、相手が固守してゐて、自分が欲しくとも貸して貰へないものを指す。そして直ちに歸りかける、勿論ほんとに歸る譯ではない。單に氣を引いて見るだけだ。すると決つた樣に相手の子供は、要求に應じて原因となつたものを相手の子に渡す。だが、そんなにまでして借りた品物は、僅かに手を觸れた位で放つておく。關心を對手の子の持つてる別の品物に向ける。またそれが第二の問題となつて同一葛藤が繰り返される。

或る夜、寢言に「今日はとてもいゝ天氣よ」と言つた事がある。その時に降り續く永雨で、子供は外へ出たがるし、出たら衣類を汚されるので、御天氣になつたら動物園に行くからと、足止めした時であつた。で、多分天氣が恢復して待ちに待つたその日の朝が訪れたのを夢見てゐたのであらう。

可愛い、三毛猫がはぐれて來たことがある。それに對して子供があまりアンビヴレンツを發揮するので、流石の猫も四五日で逃げ出して了つた。

階段に上つてはいけないと禁ずると、一段目の所をたゝいて「こゝならいゝ?」と聞く、その位なら危くないからと諾くと、直ぐそこへ上り、次の二段目の所をたゝいて「こゝならいゝ?」と聞く。かくて二段は三段に、三段は四段に、いつの間には禁斷の登攀を斷行して了ふ。階段と滑り臺、あの飽つぽい子供等のもつとも、飽きざ

るものである。

　糞便は家の便所など、せま苦しくて仲々したがらない廣々とした靑空を背に、大氣を吸ひつゝ悠々として戸外で行爲したがる。それも一箇所であるならまだしも、此の間三才位の幼女が二人で、あちこちに點々として小山を造りつゝ、行爲してゐるのを見た。かゞんだ儘移動しつゝ、脫糞するのは、それだけでも子供にとつては、大きな歡喜であらう。嬉々として、互に笑ひかけながら、行爲してゐるのを見ても、それは察しられる。

　車馬往來する道のまん中で、やはり糞をしてゐる事がある。ゆつくりとし終つて、さつさと現場を離れるかと思ふと、さうではなく、少し避けて道のはぢに立つて、わが分身であるその盛り上りの成り行き如何にと、見守つてゐることがある。或る時は溝の中、他家の塀ぎわ、所構はずやり出す。そして人さへ見て居なければ、いぢりたがる。だが手ではない、その邊に落ちてる紙などでつまみ上げるのだが、子供なので仲々うまく行かない。見てゐると、少し位よごれても意に介せず、一心にやつてゐる。これが田舍ならとにかく、都會では、多くの場合近所で遊んでゐる他の子供等によつて、その子の家へ注進される、おつとり刀ではない紙で、母親が現場に馳け付けて、かねて豫期して居たか「これッ」とまづきめつけておいて、さてその場の始末をつける。子供等に見付からない場合には、附近の母さん連によつて發見され制止される。世間的な見榮なるものも手傳つて、子供は叱られつゝ社會的軌道に兎も角据へられる。さて子供が家の便所に這入ると、これが御婦人と同じく永つ尻なものだ。何をしてゐるかと、見に行くと、別に危惧してゐる行爲もしてゐない様だ。

　その他、往來でごろ／＼寢たり、木登りをしたり、相手が小さいとすぐ襲つてこれを泣かしたり、机の上から飛んで見たり、階段の上から飛んで見たり、子供の生活は變幻極まりない。

　或る子供は、「お母ちやんのお腹を庖丁で切つて、赤ちやん出しちやへ」と云つたことがある。可哀想に、この子供は五つの今迄甘へて育つて來たのに、次のが出きて母の膝にも、ろく／＼上れないと見える。

　或る時遊んでゐたら「おしつこ取つちやへ」と、相手の局部をもぎとる眞似をしたことがある。半月ほどの短い間に數回、發作的に、敏活に、かつ眞劍な態度を見せて、かうした行爲を斷續した。男の子が女の子に對してである。

　浴場で父親のペニスを見て、「これ何あに？・」と何遍も聞いて、大人が辟易して逃げ廻るのを追ひ、避けるのを

のぞきつして居るのを見た。女の子で常に母親と共に行つて居たと見え、珍らしくもあつたのであらうが、大人を困らせるのも面白かつたのであらう。

或る朝、起きて見たら雪が降つてゐた。定めし驚いたのであらう。「あんなものが出て來た」と云つた。子供にとつて雪は降つて來たのではなく、湧いて來たのかも知れない。

子供の話はつきないし、誰も喜ふ。だがそれは座談として普遍性をもつてゐるからで、眞面目に追究して發展される時は、それが大人の問題にまで食ひ込んで、大人に累を及ぼした場合である。子供の立場を理解して物を云ふのではなく、あくまで大人本位の採り上げ方をしての存在で、次の時代を背負ふヤンガー・ゼネレーションとしてではない。だから七五三など徒らに子供にとつては、叱責される機會を多からしめるだけのものでも、母たちにとつてそれは、子供の成長した喜びより、當日の着物の吟味の方がより關心事なのだ。そこにかうした物の存在理由がある。

私たちは子供の絶對の信頼に對して、眞面目に、正しく答へ得べき用意を常に怠つてはならない。（終）

# 知的ナルチスムスの自己分析

奥本島田

私はかつて幼兒期の記憶を發表してから次に、人間が發生すると同時に宇宙が出來たのだ、といふことを思考した。それは人間の感覺のない處には人間の世界はないといふことから考へたのだつた。その後知識慾の分析をして今は阿彌陀經の分析をしようとかかつて、アニミズム・魔術・念慮の全能を學んでゐる時『彼は、世界が人間自身に感じられてゐる通りに構成されてゐると考へてゐた。それ故原始人は自身の精神構造を外界へ移してゐるといふ風に見てよい。』といふ句に心を止どめることが出來た。この文はこれまで讀んでゐたが、私には自己反省の力がなかつた。それは抵抗のためであつたのだ。今、私はこれによつて私がかつて記錄しておいたところの宇宙の成生の思想は、自己の智的ナルチスムスであつたことを悟らざるを得ないことになつて來た。私は宇宙の起原も何も知ることが出來ないのである。それで自己の出生から今までに構成された知識の全體による感情を外界

へ投出して、宇宙の起原及び宇宙の範圍を知つてゐるのだといふことに滿足してゐたのであつた。それで各人によつて宇宙は異なるし、又人類と他のものとの宇宙も異なるので、同空間には宇宙は無數に在る。然かもその宇宙は一の宇宙にあるものは他の宇宙を絶對に知ることが出來ないから、他の宇宙は存在すると考へてもそれは無いのと同じであるといふ考へをなしたのであつた。このためについやした理論的考察は科學的の基礎からではなかつた。又その必要もなかつたのだ。それはナルチスムの爲であつたから。

世界は物と心との二元で出來てゐると考へてゐる人がある。又物ばかりで成立してゐると考へる人もあり、心のうちに成立してゐるといふ人もある。私はこれ等の諸説のうちで唯心論に加擔するに至りたるは、私の心の奥深く共れに共鳴するものがあつて、それが知識慾となつて昇華してゐたからであつた。それがためにまた唯物論を毛嫌ひしたのである。

私は今、次の樣なことを思ひ浮かべてゐる。サディストは唯心論的世界觀に、マゾヒストは唯物論的世界觀に共鳴する人ではなからうかと。が、それは後で研究するとしよう。

さて私は永井潜博士著の「人及び人の力」の唯心的な論に共鳴してゐたものであるが、今となつては唯心論とか唯物論とか一方に偏した樣な形をもつてゐる論にはあまりカンカンになつて共鳴し、或は毛嫌ひしたくはなくなつた。その代りに次のことを言ふことが出來る。

唯心論者は神經症的だと。

卽ち、唯心論の代りに次のことをうめあわせておかう。宇宙の現象が唯心的に考へられやうと、又唯物的に成立してゐると考へられやうと、どちらでもよい。唯、現實の出來事に冷靜なる科學的判斷を下すことによつて、必要に應じて善處しやう、と。（昭和九・一二・九・稿）

# 母親の分析手帳から

大槻岐美

## 一　カナリヤと卵

長男が六歳の時他處からカナリヤを一番貰つた事がある。すると二十日程經つた或る日ふと子供が、『お母さん、如何してカナリヤにうで卵の黄身をやらないの?』と訊き初めた。甚い時には一日に六七回も、否カナリヤに注意が向く度毎にかう云つて訊くのである。

子供がかう訊くのは譯が無いでもなかつた。カナリヤを貰ひに行つた時その家の小母さんは「坊ちやん、これは私が卵からかへさせたので小さい時うで卵の黄身を毎日食べさせてやつてこんなに大きくしたんですから大切にしてやつて下さい。」と子供に話して聞かせてゐた。その時子供は「今でもさうするの？」と尋ねたら「今はこんなに大きくなつたのですから卵はやらなくともいゝんですよ」と答へてゐた。私はそれをはつきりと覺えてゐたので、子供の質問も其處にあると察して、初めのうちは、カナリヤも大きくなつたからもうやらなくとも好いのである事を叮嚀に說明して聞かせてゐたが終にはあまりのしつこさに耐え兼ねて來た。凡そ一週間餘り一日に何回となくこの問答を繰り返したのであつた。私が答へてやるとその時は一應それで了解するのであるが、又思出したやうに一種異樣な熱情をさへ以つてこの問ひを繰返すのである。「此の子は馬鹿かしらん？」と疑つた程私の方もイラ〳〵して來初めた時、一つの局面打開の方法としてログセが出た時、何氣ない風に『カナリヤなんかより君に食べさせた方がいゝよ』と言つて見た。すると忽ち子供は『だつて此の頃母さんは僕にちつともうで卵を食べさせて吳れないんだもの』との言葉に移つて來たのだ。私は子供の無意識に觸れかけたやうに感じたので、「それではおやつにうでゝ上げる」と約束したが、とてもそれまで持てず、直ぐに拵へてやらねばならなかつた。子供はうまさうに食べ終つた。以後このうるさい熱心な質問からは免れる事が出來たのである。

其の時私はこれに非常に興味を持つてはゐたが、分析學の勉強を初めて間のない頃であつた故「何故子供がうで卵を貰ひ度いのを抑壓したか」の疑問に引掛り、そのまゝになつてゐた。然し、近頃それを再び分析的に解釋する事に努力した結果、次の樣ではあるまいかと云ふ氣がする。

此の子供は次男が早く生れた爲めに、生後八ケ月の離乳で、子供も私も相當に苦勞をして來たのであつた。その時分、近所の農家からまだ溫い生み立ての卵を朝夕買ひ求めては、小さいスプーンに一つづゝ黄身を食べさせた事を成長後話して聞かせた事があつた。恐らく其の時、子供の心に湧いたのは母親に對する感傷的な愛情であつたらうと思はれる。カナリヤへ示された舊主人の愛情――自分が小さい時に受けた母親からの愛情――それ等が卵でコムプレクスされて、今度はカナリヤへの感傷愛と、小さなもの同志としての同一化、世話されるものゝ同一化となつてあの質問が繰り返されたのではあるまいかと思ふ。然し、もう一つ奥に突込んだならば、うで卵をね

だる事を抑壓させた無意識の處には確かに母親に對して愛情をねだる事の抑壓が加つてゐたやうに思ふ。「カナリヤには卵をやらなくともいゝのかもしれないが、とてもほしいと思つてゐるだらう。僕も母さんから卵(愛情)がとてもほしいのだ」それなのに與れないのではあまりひどい。カナリヤのために(自分のためにも)どうして與れないのか聞いて見やうとの衝動に耐え兼ねての質問と云ふよりは一種の抗議であつた。此の子は常に弟より自分は愛されて居ないと思ひ込み、何か非常に損をしてゐるやうな氣があるらしく、例も弟にそのやうな建て前から喧嘩を吹きかけてゐた。

わけを承知してゐるにも係らず、同じ質問を繰り返したり、惡い事と知りながら同型の過失を行つたりする事は確かにコムプレクスのさせるわざであると解釋して好いやうだ。

## 二　室を怖れる

次男が輕い臨場恐怖症である事に氣が付いたのは、尋常二年、八歳の初夏であつた。それまでも時々内氣過ぎると云ふよりは臆病過ぎて潑溂とした處に缺けてゐるのを氣にはしてゐたが、それ程でもあるまいと手輕に見てゐたのだ。或る時何かの拍子に「僕は先生に教室で指されやしないかと思ふとハツとして胸がドキ〳〵して來て知つてゐても云へなくなる」と私に訴へた事があるし、唱歌も自家で歌ふ時には割合正確にキレイに歌ふのに成績が惡いので尋ねた時、胸がドキ〳〵して聲が出なくなると云つてゐた事があつた。が、これも亦内氣な子供に有り勝ちなと、見過してゐた。元來此の子は圖畫とか手工が好きで、よく展覽會に出品する爲め、その製作を時間外に、つまり放課後晝食を自家ですまして改めて學校へ行くことが度々であつた。ところがそれを非常に嫌ふのである。如何してかと云ふと、たゞ厭なんだと答へてひどく憂鬱な顏をする。或る時厭がるのを無理に出してやつたところが暫くすると呆然戻つて來て、女中に是非一緒に行つて手工室の扉を開けて與れとメソ〳〵泣き出した。どうして泣く程厭なのかと訊ねると、「手工室の扉を開ける時に怖くて胸がドキ〳〵する」との答へである。其の時は私は默つて女中を付き添はせてやつたが、これはどうにかしてやらねと困ると思ひ初めた。翌日學校に行つて受持ちの先生に會ひ「胸がドキ〳〵して顏のあかくなる」話をして、當分指名して下さらぬやう依頼して置いた、私にすると子供の苦痛も哀れではあるが、何とかしてそれを取り除くまでは子供の精神を不安にさせるのは惡いと考へたからである。それから私は目立たぬ程

度で子供に對して注意を怠らなかつた。そして成る可く子供の間近くに居て、氣を配つてゐたが、特に寢る前、少しの時間を子供の床の中に入つて話をして見ることにした。以下、その時に子供と交した會話である。
『君どうして學校へ一人で行けないの？　朝はちやんと行くぢやありませんか。』
「だつてみんな歸つてしまつた後の學校つてしいんとしてゝ氣味が悪いよ。それで僕行くのが厭なんだ』
『でも手工室には先生もお友達も居るんでせう。』
『居るけれどもね、とても教室の中が靜かで戸を開けるのが怖いんだよ。何だか戸を開けるとオバケみたいなものが出て來さうな氣がするの』
『變ね。晝間のオバケなんて…、何て君は臆病なんだらう』
（此の邊わざと强調して突込んで見た。すると子供の言葉は段々變つて來た。）
『だつて體操の先生が直ぐに、何しに來たつて、吐鳴るんだよ、とても怖い大きい聲をして』
（その時私の頭にチラツと閃いたのは、子供が小さい時に父親の書齋に足を入れると、よく何にしに來た、とか、あつちへ行つてとか云はれてゐた事であつて、父の書齋には近付く可からざるものと考へるやうに躾けて來た事であつた。で、私は子供に直ぐに云つた。）
『そんなに怖い先生なの？』
『怖いつて怖いつて、誰でもみんな怖がつてゐるよ。』
『家の父さんとどつちが强いだらう』
『そりやうちの父さんの方がずつと强くて怖いに決まつてゐるよ。』
『それなら今度は父さんに連れてつて貰つて、體操の先生が、何しに來た！　どなつたら、手工しに來たんだ！つて父さんにどなり返して貰ふといゝね』
（すると子供は私も意外に思ふ程愉快さうに大笑ひした）
それから以後は少しも厭がらずに放課後の學校へ行く様になつた。そして胸のドキ／＼するのも直つたと云ふので、又先生に適宜に指名して下さるやう申し出た次第であつた。
これは如何して癒つたのか私にも見當が付かない。然し、コムプレクスを解消させた事は確かであるらしい。同時に、此の子供に就いては窃視慾の抑壓を考へてやる必要があると思つてゐる。

## 三　父　と　子

多少なり共分析眼を以つて兒童の生活を觀たならば、私達大人はもつと兒童に對して深く理解を持つ事が出來

るやうに思はれる。自我の強い、殆どわけのわからぬ子供と云ふものがあるものだが、これなども分析的に理解し得て後、初めて對策を講ずることが出來る。どんな子供でも或る時期に依つて種々に變化して親を面喰はせるものである。非常に素直な好い子になつたり、又手も付けられぬ程强情になつたりする。然し、素直になつたからとて安心したり、强情になつたからとて取越苦勞をする必要は無い、たゞ、重大視せねばならないのは、其の背後にかくされた子供の無意識心理である。

長男が七八歳の頃、私が父親の世話をするのを非常に嫌つて、父親の用事をしてゐる時などは、わざと私を呼び立てゝ、「お父さんの用ばかりしてゐて僕の世話をして呉れぬ」と怒り出して始末が悪かつた。或る時も夕食後子供等は食事が濟まなかつたのだが父親が外出するので、着換への手傳ひの爲めに子供の傍に付いてゐてやることが出來ないでゐると例の通りやり出した。『母ちやん。御飯よそつて頂戴』と私が行くまでどなつてゐる。つまらない用事で何べんでも父親の傍から私を引離さうとする。あまり忙しいので、私が、「もう君も大きいんだから一寸靜かにして待つてゝ頂戴」と頼んだ處、大眞面目で「父さんは大きいのに一人で着換へない、僕達の事は毎朝一人で洋服を着なさいつて毎もあんなに云つてゐるのに」と抗議して來た。余り子供の言葉がハツキリし過ぎてゐるので、おかしくなつて笑ひ出して了つた。すると私が笑つたのがいけないとて又憤慨するのである。仕方が無いので、「父さんは忘れものをするので、そばから氣を付けてゝ上げるのだ」と一通りの説明をしてやつた。すると「ぢやア僕も父さん位大きくなつたら母ちやんが着物を着せて呉れる？」と云ひ出した。で、私は、はつきりと云つて聞かせたのである。「君がお父さん位になつたらお嫁さんが君の世話をして呉れる」と。そこで子供はひどく納得がいつたやうであつた。

勉强する時でも、すむまで僕の處へ付いてゐて呉れと泣いて騷いだ事もあつた。これは私がよく父親の書齋で仕事をする場合のある事を聯想すればわかる。普通なれば、變な子だとアツサリ片着けて問題にしないか、又は獨立心の無い子だなどゝ抑壓教育をして神經症的にし兼ねない。が私はこれも亦親との同一化と見たのである。同一化の底にはエデイポス的なものがあるのは無論である。子供の本音は「母さんは僕をお父さんのやうに厚遇しない。そんな筈はない。よし、それならば、父さんから母さんを奪還してやらう。」と云ふ邊りだ。もと〱此

の子は四五歳の頃から早くも父との同一化が現れてゐた。室の隅に机を据えて繪本を一杯積み重ね、古原稿用紙をひかへて鹿爪らしく後をふり向いては、うるさい！うるさい！と弟を叱つてゐた事があつた。

私は、此の子供等のエディポス的反抗の惱みを哀れに思ふ時、又成長の過程に於いて、このために子供等がどう歪められつまづくか、又はどのやうな經路を辿つて此の惱みを無事に卒業する事が出來るかを思ふ時、母親の責任の重大さを痛感せずにはゐられない。何故ならば、子供の問題は、結局親の問題であるからだ。親自身が、コムプレクスの塊である時、子供を理解せよとて到底出來ない相談であるからだ。自己分析は甚だ苦しい。然し自他共に幸福にし得る道は、此の苦しみに耐えて初めて發見する事が出來る。（完）

## 「第一・兒童心理研究號」の內容

一昨年九月號でありますが、大變好評で殆ど賣れ盡し、殘部文字通り數部に過ぎません。御希望の方は早くお申出で下さい。お持合せ品不用の方は、當方へ御賣渡し下さるやう願ひます。

內容は、フロイドと兒童心理を語る（高島平三郎）、兒童の供述と聯想診斷（塚原政次）、變態心理の兒童（長谷川誠也）、幼兒性感論の生物學的吟味（高水力太郎）、A・フロイド孃の兒童分析理論（伊東豐夫譯）、戀愛に於ける救助願望の研究（大槻憲二）、クライン女史の兒童分析論（下山善高）、或る天才少女（田內長太郎）、病む兒の心（大槻岐美）ニイルの敎育法（長崎文治）、中村星湖作「少年行」分析（大槻）、その他「時評」「講座」等。

講　座

# 幼兒性感とその取扱ひ

生物は大體、その生活年數（壽命）の廿分の一の年齡に達すると、その生殖能力は完成するものであるが、獨り人間のみは高等の精神生活を送るために、その成熟が遲れてゐるのである。それは併し、その完成が大體に於いて遲れてゐるだけであつて、性的傾向がないわけではない。然るに今なほ、幼兒には性感がないなどゝ云つてゐる固陋な學者があるから、その證據を擧げて御覽に入れよう。フロイドの云つてゐる通り、幼兒性感の現象は誰の目にも明かに映じてはゐるのだが、人々がそれを承認することを好まないが故に、強いて事實に（無意識的に）眼を被つてゐるのである。何故、目を被ふやうになるか。これ神經症的抑壓作用のためである。

實例を擧げると云つたが、そんなこと一々開き直つて擧例するまでもなく、みなさんの眼前に幾らでもころがつてゐるし、新聞記事中にも毎日のやうに散見してゐることである。が、それを讀んでも忘れて了つてゐる人々が多い。さうして幼兒は神聖だ、性的現象を示す兒童は變態だ、『末恐ろしい子供』だと云つて、特種人間扱ひにしてゐる。そのくせ、自分の過去を振返つて見ると、自分でも大低はそれに類する事をして來てゐるのである。たまに正直に自分の過去を反省し得る人があつても、それは自分一人が病的なので、他の人々はみな神聖な幼兒であつたのだ、自分は唾棄すべき劣等人種だと思つて、一人で自分を苦めてゐる。さう云ふ一人として俳優IY氏がある。氏がかつて（昭和八年二月廿三日）都新聞紙上で告白してゐたところを、左に引用して見よう。

『先達ての、東京の少女が誘拐されて、大阪で辻占賣をやつてゐたと云ふ事件は、いろんな意味で世間に話題を提供したが、僕は僕であの事件に就いては、別な意味で胸を打たれるものがあつた。と云ふのは、あの事件が僕の過去の或る厭な思ひ出を引き出させたからと云ふ譯なんだが、そいつは一體どんなことかと聞かれると、それを話する前に、あの事件の眞相と云ふよりも、あの誘拐犯人小澤某なる男の犯罪動機といふものを聞いて見ると、あれは單なる誘拐事件ではなくて實はあの犯人は誘拐して行つた定子なる少女に愛情を感じてゐたんだとある。しかも、この男が少女に愛情を感ずるに至つた事情と云ふのが、又深刻だ。

あの小澤と云ふ男は前に浪花節の三味線引きを女房にしてゐたが、この女には桃中軒何右衛門といふ先夫があつて、この先夫が二人の所へ遣つて來ては因縁をつける。或る時、この因縁づけから始まつて先夫とこの男とは、大格闘を始めたところが、女もこの格闘の中に飛込んで來た。その時、男は當然現在の亭主である自分に加膽して來るものと思つたら、案に相違して先夫に加擔して自分に獅嚙みついて來た。これには男は當面の敵の何右衛門より女の方が憎くなつて來て、遂に女房を刺殺して了つたといふ話です。このため男は十年の刑を言渡されたが、恩赦があつたりして、半分の五年勤めたゞけで出て來た。だがこれ以來、この男にとつて女といふものは全く信ぜられず、信ぜられるものはたゞ無心の少女だけだと思ふやうになつてゐた。そして偶々同居してゐた定子ちやんの家で、この男が定子ちやんを可愛がる、その可愛がり方が常軌を逸してゐた事があつたので、父親が怒つて男を追出した所が、男は定子ちやんを思ひ切れず、到頭誘拐して逃げたといふんださうな。

さて、それでは、この話で僕は何を思ひ出させられたかといふと、この男が六つ七つの少女に愛情といつたものを感じてゐたと云ふ所から、僕の少年の頃の戀の思ひ出が蘇つて來たと云ふわけなんです。而もそれも甚だ少年らしからぬ戀の話なんです。どんな戀だつたかといふと僕は淺草山谷といふ近くには吉原ありといふやうな所に育つたものだから、子供の時分の遊びも、旦那様ごつことか、お醫者ごつことかいふ女の子供たちとの子供らしくない遊びが多かつた。こんな風な遊びをやつてゐる七八つの頃だつたが、話すのも恥入るやうな性的な悪戯を遊び相手の女の子とするやうになつた。どうしてあんな子供の頃にそんな事を知つてゐたかと思はれる位だが、ともかく環境の與へるものは恐ろしいものだと思ふ。ところで、この思ひ出が長ずるに從つて僕を惱まし始めた。殊に中學時代の所謂發情期には二様の意味で僕を苦めた。つまり、悔恨の情に惱むと共に、一方にはまたその思ひ出を欒み追ふといふ風に――。

そのうち小說を讀むやうになつたら、有島武郎の何とかいふ小說のうちにこんなのがあつた。七八つの少年が近所の綺麗な奥さんに可愛がられて愛撫を繰返されてゐる内に、少年らしからぬ惱ましい戀を感ずるに至つたといふのである。これを讀むと僕は「何アンだ。俺ばかりぢやないぢやないか」と、仲間が出來たやうな氣强さを感じたりしたものだ。

ところが話は最近に飛んで、先達て或るところで僕等の仲間が酒を飲んだ際に、この辻占賣少女事件の話が出て、僕は敢て懺悔すると云ふ譯でもなかつたが、酒の上もあつて思ひ出すまゝにこの少年の日の戀の話をした。すると聞き手の一人に、僕の話を聞いて手を打つて喜ぶ奴が現れた。どうしたのだと訊くと、實はこの男にも少年の頃に同じやうな戀の思ひ出があるんだつて、そしてこの思ひ出が段々年齢をとるに

従つて矢張りこの男を悩まし、而もその悩まし方が、あんな子供の時にあんな事をしたのは世間に恐らく自分の他にはあるまいとまで　へさせられるやうになつて、その都度何とも云へぬ不快と憂欝に襲はれてゐたものださうだ。が、その夜僕の打明話を聞いて「仲間が現れたと思ふと何だか氣強さを感じて、今までの憂欝から解放されさうだ」と云ふのだつた。これには僕も僕の懺悔の效驗が覿面に現れて、先づ人間一人の氣持ちを救つたか」と苦笑するより外はなかつたと云ふわけでした。滅多に話すべからざることを話してしまつた譯ですが――。さて、僕にも子供はゐるんですが、少年少女の戀心、こいつは親として等閑には出來ないことですなァ。』

この話は多くの人々にも興味があるであらうが、我々精神分析學徒にも多大の參考になる。――第一に、誘拐犯人小澤某の事であるが、彼は女房に裏切られて大人の女一般に幻滅を感じたから「無心の少女」に興味を寄せるやうになつたと云つてゐるし、また本人も本氣からさう信じてゐるやうであるが、併し彼は恐らく成人の女に幻滅を感じなくても、本來少女偏好の傾向があつたのであらうと思ふ。變態性慾者に童姦症と云ふのがあつて、未成熟の少年少女を姦することに異常に亢奮を覺える者が居る。文學作品ではドストイフェスキーの『スタヴロギンの告白』と云ふのが、さう云ふ話を深刻に書いたものである。總て人間の行爲の意識的動機と云ふものは上面のもので、口實に利用されるだけで、その底に無意識の本當の動機が匿れてゐるものだ。併し他人はそれを覩破する力はないし、本人はそれを意識化することを好まず、從つて無意識でゐるものだ。

告白者Y氏は、有島武郎の小說を讀んで、自分一人でないことを知つて歡び、Y氏の告白を聞いたその友人某君もやはり、自分一人でなかつたことを知つて「憂欝から解放されさう」に感じてゐる。これはやはり一種の分析法（分析學の術語では「緩和法」と云ふ。詳しくは本誌昨年一月號參照）であつて、自分と同じ罪を犯してゐるものが他にもあることを知ることに依つて、抑壓の解除せられることを意味してゐる。併し私がこの話を紹介したのは、緩和法を讀者諸君に施さうためではないのである。況んや、幼兒性感を奬勵し是認するためなどでは決してない。私と雖も、幼兒の性感をなるべく早期に勃發せしめないやうにしたいと考へてゐるものである。併し發達の準備期にある性感を不自然に抑壓しないやうにしたいと考へてゐるものである。で、私の窮極の目的は、如何に幼兒に性感が存在してゐるものであるか、またそれが如何なる形で勃發するものであるか、またこれを如何に處置すべきものであるかに就いて、皆さんと共に考

へたいと思ふにあるのだ。そのためにはまづ、幼兒性感をありのまゝに、胡麻化することなく、誇張することなく、認識したいと思ふのである。

なほ、さきに言及した童姦慾に就いては、かう云ふ實例もあるから、參考のために擧げておかう。

或る商家の娘で、兩親が四十近くになつて生れた一人子。この娘が小學校を出たばかりの頃、店へ來る客でAといふ相當の年配の妻子ある人がその娘を可愛がつた、娘の兩親は信用して親戚のやうに交際してゐたので、自然娘も心おきなく時々その家へ遊びに行くやうになつてゐた。ところが、或る晩、娘は其のAから辱められた。當時は本人はまだ少女であつたので、それほどの大問題とも考へなかつたが、女學校を出る頃から女の貞操と云ふ事を考へるやうになり、Aを怨むよりも、自分がどうしてあのやうに迂濶であつたかを悔いるやうになつた。Aはその後、大阪の方へ移轉し、暫時音信を絕つてゐたが、娘が女學校を出た年、Aは突然歸京して娘の家を訪ねて來「あの時の事はお母さんに云はなかつたらうね」と云つた。娘はくやしさのあまりに何も云へず泣いてゐたと云ふことである。何に依らず、あまり不自然に可愛がられたりするのは用心をしなければならない。老人には時々童姦症者が居ることを知つてゐなければならぬ。

×

早期性感の第二例を擧げよう。これは某新聞の相談欄に出てゐたものである。

『私は廿二歲、弟は十七歲になり、兩親なき只二人の姉弟であります。婚期の迫つた私は、幼い時、友達から敎はるまゝに、弟としたいたづらが今更のやうに恥づかしく思ひ出され、胸をさゝれるやうで御座います。弟は幼い時の事故、すつかり忘れてゐるやうですが、私には生々しい記憶となつて殘つてゐます。この後暗い心を抱いて結婚してもよろしいでせうか。それとも夫となる人に總てを打明けて許しを願ふべきでせうか。幼いときのいたづらでも私は最早處女ではないでせうか。賴る人とてない私に救ひの道をお示し下さい。』（宇都宮、一女）

實に切々たる嘆きの聲で、讀む者誰しも哀れを覺えずにはゐられない。併し世の人々が迂濶で、幼少年に性感がないなどゝ呑氣なことを考へてゐるから、かう云ふ間違ひを惹起するのである。併しこの姉弟の場合は、兩親が早く亡くなつたので、監督するものゝなかつたことが、かゝる不幸を惹起させた一つの大きな契機にもなつたのであらう。この姉は「弟はすつかり忘れてゐるやうですが」と云つてゐるが、弟だとてどうして忘れてゐるものか、たゞ忘れてゐるやうな顏をしてゐるだけに相違ない。

現在の姉と不倫な行ひをした良心の苛責は、この少年をも苦しめてゐるに相違ないと思ふと、さうしてそれに觸れることを避けて、強いて朗らかさうな顏をしてゐるその弟の事を思ふと、誠に憐れになるのである。支那では男女七歳にして席を同じうせずと云ふ教へがあるが、これは誠に適切な教へで、只今の人々はこれを輕蔑してゐるやうだが、私は切にこの教への復活を唱道したいと思ふ。この場合の「席」と云ふのは、寢床の意味であらうと思ふ。

このやうに性的なことには及ばなかつたにしても、異性同胞の間には幼少年の頃に出來上つた精神的なつながりが後々までも殘つてゐて、それが相互の結婚生活に累を及ぼす場合は、意外に多いのである。英國の文豪マコーリ卿もその二人の妹を非常に愛してゐて、遂に一生を獨身で過ごし、二人の妹の婚する時には非常に悲痛な離別の惱みを殘してゐる。(本誌第二卷第四號參照) 世の小姑が嫁に對して多く意地の惡いのは、自分の幼時の相手をとられた反感が土臺になつてゐることが、屢々であるのだ。

×

男女の同胞ばかりでなく、同性同胞の間にでも、屢々種々の性的交渉が成立つものである。或る男子患者の告白に依ると、八九歳位の頃に二歳下の弟と奇妙な行爲をなした經驗があつたとの事である。それは弟に自分の××を吸はせることであつた。晝間それを公然と行つてゐたが、併し人の足音が窓邊にに近く聞えて來たのであわてゝ中止したと云つてゐるところを見ますと、やはり恥づべき事であるとは意識してはゐたやうである。さきに擧げた實例中の少女が、Aなる客に自分の辱められたことを兩親に默つてゐたところを見ると、これもやはり恥づかしいことであると感じてはゐたのである。恥づかしいことゝ思はなければこれほどの大經驗は兩親に喋つた筈である。たゞ成人後に感じたほど甚だしいことは思はなかつたゞけであらう。して見れば、子供もやはりさう無邪氣なものではないので、それが無知であるだけになほさら困るわけで、父兄たるものには一層の注意が必要になつて來るのである。

右の男子兄弟間の性的行爲は、同性愛的の行爲であることは申すまでもない。この場合注意すべきことは、やはり一方が男としての役割を果し、他が女としての役割を勸めてゐることである。女子同性愛者の場合とても同様で、性愛行爲はそれが同性間に行はれる場合でも常に何れか一方が男としての立場をとり、他方が女としての立場をとつてゐるものである。

また、この場合の性的行爲が變態的であることを誰しも氣付くであらうが、卽ち成人男女間にも時々見られる吸莖慾と云ふのに相當するが、幼年時代にこのやうな吸莖慾的傾向を示した者が、成人後にはなほさら甚だしい變態性慾者となるであらうと、人々は想像するが、實はそんなでもなく、右の患者の場合でも別にさう云ふことはなく、その患者が筆者の許に相談に來たのは、夜尿症に就いての處置のためであつた。一體この吸莖症的傾向の原因は何處にあるかと云ふと、これは接吻と同じ原因に基くものであつて、旣にお話ししましたやうに口唇性感の範圍に屬するのである。換言すれば、乳兒時代に母の乳房に吸付いたことが遠因をなしてゐるのであつて、口唇と膣とが上下位置を轉倒して交錯せられる如く、乳房と陰莖とが上下倒錯せられるのである。これを性慾學上で『倒錯』と名付けてをるのは、誠に至當である。母の乳房を吸つてゐる乳兒にとつては母は男性であつて、自分は母なる男性に對して女性としての位置をとつてゐるわけである。であるから人類史上幼兒であるところの古代人や野蠻人は、母神像を常に男性として造形してゐるのである。卽ち『男性器を持てる女』として、捧え上げてゐるのである。その後母神像の男性器は合理化せられて抱かれてゐる赤ん坊となつたり（それが後に更に變化してキリストを抱けるマリヤや、いろんな器を持つてゐる觀音などになつたのである）、辨天樣の蛇や琵琶となつたりしたのである。

で、凡そ世の人々の云ふ變態性慾と云ふものは、それほど甚だしい病的な事ではなく、多くの人々が程度の差こそあれ、みな行つてゐること、或は行つて來たことなんである。たゞ分析學の所謂『性器の統裁』が十分に行はれず、各種の部分性感が單獨に活動する場合に、特に目立ち、誇張せられて見えるのを、變態性慾と名付けたに過ぎないのである。

×

乳兒にとつて最初の感覺的、性的の相手が兩親である如く、幼兒にとつて最も手近い相手が同胞であり近親者である。從兄弟や叔父姪などの間で屢々間違ひを起し易いものである。いつまでも子供だから、子供だからと云つて安心してゐると、とんでもないことになる。さき頃の朝日新聞にも『女探偵の見た家庭の表裏』との題下にさう云ふ話が出てゐました。

『それは田舍の方ですが、夫婦仲は極めて圓滿ですが、然し姑に對して不審を抱き、あの嫁はどうも落着き過ぎてゐる。風呂に入つたところを見ると娘らしくない。又お乳の頭がどうも可怪しい。…と云つて女探偵に調べ

させると、その女が曾て子供を生んだことがあると分りました。その相手は父親の末弟で、つまり叔父、姪の間柄だつたのです。實にお可愛さうでしたが、その事實を報告しなければなりませんでした。きつと離緣になつたらうと思ひます。』

筆者の知人某はその幼時に從妹と性的遊びをなした經驗を物語つて聞かせた。幸にして何等「成功」(?)を見なかつたさうだから、あとに悩みはなくてよかつたが、さきの實例の場合のやうに「成功」(?)して了つては一生そのために悩まねばならない。一體に成人が幼兒の性感について無知であるために、かうした不幸を見ることが多いので、世の父兄たちは十分にこの方面の事實に注意を拂つて頂きたいと思ふ。(「人生創造」八月號から轉載——記者。)

## 精神分析語彙(十五)

一、倒錯 Perversion,——まづ「變態」と同義語と解して大過なかるべし。神經症と倒錯との關係は、消極と積極の關係の如し。性感發達途上に於いて、性器帶域の主權下に統治されそこなひ、性器帶域の活動から無緣に取殘されたる部分本能を云ふのである。例へば、性交の代りに接吻又は吸莖を以て滿足する如きである。

一、投出作用 Projektion——元來內的なものを外化し、主觀的なものを客觀的なものと思ふこと。己の思想、願望、禁制缺陷などを他人又は對象にあるものと考へること。

一、投身——無意識的象徵行爲と見られ得る限りに於いて、投身は墮落、入水は出產と解釋せられる。

一、トーテム Totem——この名稱は一七九一年英人J・ロング氏が初めて北米印度人から知つたもので通常は或る動物でそれは食用にされる、無害なる、或は危險なる、怖ろしい動物であるが、稀には或る植物乃至自然力(雨、水)であつて、全部落と特別關係に立つてゐるものである。トーテムは第一に部落の祖先であるが、現に又彼等に宣託を下す守護神であつて、若しこのトーテムが危險な動物である時にもその所屬の子供を見分けて害を加へない。從つてトーテムを殺(滅ぼ)さず。且つその肉を喰はず、(その他それを使役せず)といふ神聖なる義務を自ら負つて、若し之れを犯す時はおのづから所罰されるといふ事になつてゐる。このトーテムの特質は一動物或は一個人に附着してゐるのではなく、その種屬の全體に附着してゐる。時折、祭りが催されるが、その祭りにはトーテム所屬者は、彼等のトーテムの動作や特徵を儀式的の舞踏でもつて表現したり模倣したりする。

一、トーテミスムス Totemismus——トーテミスムスはトーテ

ムを中心とする原始人間の宗教的組織たると同時に社會的組織である。前者に依れば、トーテミスムスは人間とトーテムとの間の相互的尊敬と擁護との關係を作り、その社會的方面に從へば部落仲間相互間の、及び他の種族に對抗する責任觀念を持つてゐる。なほ精しくはフロイドの「トーテムとタブー」を參照の事。

一、トーテム餐 Totemmahlzeit ——平素は非常に神聖視されてゐるトーテム獸が、一年に一度だけ同族一同の寄合の下に、祭祀の間に殺され、喰盡され、悲まれる。この悲嘆の後に盛んな祭祀が催される。フロイドはエディポス・コムプレクスの種族的根柢をこゝに認める。

一、トービアス結婚 Tobiasehe——結婚最初の三夜を禁慾裡に過す風習を云ふ。これは初夜權俗の名殘と A. J. Storfer に依り認められる。

一、時のないこと Zeitlosigkeit ——意識生活は時間に制約されてゐるが、無意識生活は時間を超越してゐる。夢や狂人の變態には時間の順序の支離滅裂であるのはそのためである。「山中無暦日」と云ふ語にも無意識心理的根柢あるべし。

一、同一化 Identifizierung ——或る個人が無意識的に或る他の人間と自分自身とをコムプレクス（錯綜）することを云ふ。「第一、同一化は對象との感情的結合の起源的形態である。第二、退行的方法として見る時は、同一化は謂はゞ自我中に對象を攝取することに依つて、リビドーに依る對象との結合の代償となるものである。第三、同一化は性本能の對象ではない或る他人との共通性を頷前してゐることを新たに知覺する度に起るものである。この共通性が重要であればあるほどこの部分的の同一化はうまく行くのだ。』（フロイド「集團心理と自我の分析」）

一、同情——性本能の方向を制する力としては、羞恥、嫌惡、同情、並びに社會の道德と權威とが擧げられる。（フロイド「性慾論」）

一、同性愛 Homosexualität——その性的對象として同性者を選ぶ態度を云ふ。生物學的には變質と云ひ得べきも、心理學的には必ずしも病的とは云ふを得ず。その種別に、完全同性愛、精神的兩性具有、偶然的同性愛、などあり。

一、動的見地 Dynamische Auffassung ——心的裝置が必ずしも外的刺戟を待たず、それ自身力學的の働きをなすを云ふ。例へば、抑壓、檢閲の如きである。その他、超自我の自我に對する作用の如きはその著しきものである。「超心理學」の條參照。

一、動物恐怖 Tierangst, Tierphobie ——種々な動物に對する人間の神經症的恐怖を云ふ。精神分析はこれをトーテミスムス又はエディポス・コムプレクスを以て、説明せんとする。——（未完）

アブフウブ

# 初夢分析考

森巣山人

## 初夢を重大視する世人

初夢とは、一月元日（今日では一般に二日）の夜に見る夢であることはいふまでもない。關西では二月三日（節分）の夜の夢を初夢と呼び、元旦の夢と同じに重大視してゐるが、節分は多分陰暦の元旦としての意味があるためであらう。これが特別に重大な意味を持つてゐるものであると人々に信ぜられて來た理由は、一體に夢そのものが重大な、殊に豫言的な意味をもつと信ぜられてゐる上に、一年の最初の夢であるために、一そう意味深長であると信ぜられたにある。

一生の計は少年時にあり、一年の計は元旦にあり、一日の計は朝にありといふやうに、人々は何でも最初を大切とする。これは當然である。

さうして人々は人間の力が有限で、何者か自分等よりも大きな力あるものによつて、自分の運命が支配せられてゐるといふ宗教的觀念を持つてゐる。さうしてその支配者は、夜の夢において、われわれにまで交通して來ると信仰せられてゐた。であるから、初夢を重大視するといふことは、一種の宗教的信念に根ざしてゐるのである。

## 夢は果してナンセンスか

しかしながら、現代の教養ある人々は夢をそれほど宗教的な意味のあるものとは考へてゐない。まづ、たいていの知識階級者は、夢を全然ナンセンスであるとさへ考へてゐる。しかし、精神分析學者は夢をナンセンスであるとは考へない。重大な意味があると考へてゐる。だが、昔の人々のやうに宗教的な、神人交通としての意味があるといふやうには考へない。これを夢の本人の心の働きとしての重要な意味があると考へるに過ぎない。

精神分析學は科學であるから、夢の見方も全然現實的である。宗教的な見方のやうに神祕的ではない。從つて、初夢とても神祕的なもの、豫言的なものとは考へない。やはり、普通の夢と同じやうにその前日の經驗の名殘、その當時心理狀態、過去一切の經驗、將來への願望、不安などを參照することによつて、心理的な判斷を下す。

もちろん、人々は元日においては、過去を顧み、將來を慮つて、いろいろな思ひを繞らすに相違ない。さうして寢たときに見る夢は、必ず平常の夢とは違つた、特別の意味を帶びるであらうことはいふまでもない。しかしそれはあくまでもその本人の心の働きであつて、別に神樣や魔物が、その夢を見させてゐるのだとは考へないのである。

## 一富士、二鷹、三茄子

だから、初夢には、現代人の初夢にでも特殊の意味があることはもとより當然

であるが、その特殊の意味がどんな意味であるかは、個人々々に就いて細かく分析研究して見なければ、輕卒な判斷は下せない。昔の人々のやうに一富士、二鷹三茄子なんて、呑氣な判斷法は絶對に駄目である。寶船を見たから芽出度いなどゝいふのもお氣の毒ながら駄目である。

けれども、昔の人々は何故に富士や鷹や茄子の夢を芽出度い夢と考へ、寶船の繪を枕の下に置いて咒としたかといふことを、今日の心理學（精神分析）的見地から研究し、判斷することは、もちろん、できる筈である。昔の人々がさう考へたといふことは、一つの心理現象としてたしかに事實である。然るに事實に對して解釋の下し得ないのは科學の恥である。

精神分析學による夢の心理現象の科學的判斷は、いかに下すかといふことに就いては、一寸說明を加へておきたいが、それは問題が大きすぎて、ただ今倉卒の場合、限られた紙面においてなし得ないから、それは他の機會に讓つて、こゝでは初夢に對する昔の人々の心理を、科學的に研究して見ることにしよう。

## 人情當然の大願望を象徵

何故、富士と鷹と茄子との夢は吉である、と昔の人々は考へたのであらうか。これは何萬人のうちで富士の夢を見たものが何百人、その何百人が十年、二十年の後に幾何の金持になつたといふやうな統計でもとつてあるならともかく、いやもちろん、そんな調査の結果などからして下した判斷でないことは明かである。して見れば、これは夢として考へるよりは、人々が富士や鷹や茄子を見ることによつて、いかにして、いかなる芽出たいものを聯想したかといふことに、問題を移して考へる方が合理的である。

富士――これは日本人なら何人にとつても憧憬の對象であるに相違ない。秀麗優雅であるが、凜乎として馴るゝを許さぬその威容、而も日本本土の中央に位して、その高さにおいても群峰を遙に凌いでゐる。況んやその名には「富」の字や「不二」（第一）の字が充てゝある。（元來、フジの名はアイヌ語の火の義であるが……。）即ち「富」においても「位」においても、天下「第一」、この山ほどにありたいと思ふことはけだし人情の自然。

鷹はこれまた群鳥の王であつて、常に俗塵を離れ、人間を超えて高く雲間を飛翔してゐると信ぜられてゐる。山ならば富士、鳥ならば鷹になりたいと思ふことは、これまた萬人必然の願望。

では、茄子は何か。その字を分解して見ても分る通り、草木（草冠）にして「子」を「加」へること最も多きものゝ一つである。その音からいつても、「なす」は「生す」に通じ、子孫の繁榮を意味してゐる。それのみならず色黑く、逞く、光澤美しくいかにも頑健な男性の生殖力をも同時に象徵してゐるのであらう。現に、昔の夢判斷の書物にも、「食茄子主妻有子」とあつて、茄子を喰ふと夢みれば、妻に子が出來る象徵であると判斷したのである。勿論、そんな豫言的價値を我々は認めないが、茄子と子孫とが昔の人の無意識に於いてコムプレスクされてゐたこと

だけは、この判斷を判斷することに依つて明であると思ふ。

卽ち、一富士、二鷹、三茄子とは、富士の山ほど金銀財寶を積み、鷹ほどの高位に就き、茄子ほど澤山の子孫を生み、繁昌したいとの萬人共通の「夢」（願望）を表したものに外ならない。卽ち、富貴榮達、子孫繁昌は萬人が一生の理想であるとともに、みな人が年々歳々、元旦において今年こそその大理想、大願望の一端を實現したいと「夢想」するが故に、元旦においてこの夢を見ることは今年にその願望の實現が豫言せられ、約束せられたものと解說したのだと斷言して差支へないであらう。

## 寶船は何を意味するか

次に、われ〳〵は寶船を考究しなければならない。種々の寶物と七福人とを載せた船の繪を描き、その上に「なかきよのとおのねふりのみなめさめなみのりふねのおとのよきかな」といふ、上から讀んでも下から讀んでも同文の歌をその上に書き記し、それを枕の下に敷いて吉夢を祈り、惡夢を川へ流す兇とした、その心理過程はいかに明すべきであるか。

まづ、われ〳〵は、吉夢を載せて來り或は惡夢を載せて流れ去るものが何故に船でなければならないか、といふことを問題にして見る。車や雲ではどうしていけないかといふことを問にして見る。

卽ち、われ〳〵は種々な土俗習慣を參考にして重要なる意義は舟とともに水にあることを知るのである。一切の善と幸福とは水の中から船に載つて來り、一切の惡と不幸とは舟に載つて、水に流れ去るものであることを知るのである。各地方の神社の祭禮において、その祭神の出產（出現）を象徵する儀が、常に「船渡御」の形をとつてゐることを知るのである。

しかるに、またその正反對の一切の忌みと穢れとも、また、船に載せて流されたことを知るのである。大昔は死骸は沖に流され、かくて沖津城（奧津城、塚）の名が生じたり、お盆にはその反覆として祖先の精靈は流されてゐることを、われ〳〵はなほ毎年現前に眺めてゐる。卽ち船と水とは吉（出產）とともに凶（死）を意味することを知るのである。

卽ち、初夢の寶船は、吉來らばこれを迎へ上げ、凶來らばこれをそのまゝ暗から暗に葬り去らうとの、相反共存（精神分析學はこれをアムヴレンツといふ語をもつて呼んでゐる）的態度を意味してゐるのであると、解することができるであらう。

そのことはまた、かの「長き夜の遠の眠りのみな目さめ波のり舟の音のよきかな」といふ廻文歌の分析によつて證明することができるが、これには輪廻や復活の思想も含まれてゐて、なか〳〵複雜であるから、次の宗教心理研究號に讓ることにしよう。（完）

探訪

（八）

# バーナード・リーチに英國心理學界の現狀を訊く

英人陶工バーナード・リーチ氏は、わが國に於いては東洋美に理解ある歐人美術家として旣に一般によく知られてゐるが、彼は單なる工藝家ではなく、詩人でもありまた思想家でさへもある。このやうに思想家として彼は心理學にも興味を持つてゐるから、英國斯學界の現勢を彼に尋ねて見ては如何との、式場隆三郎博士の勸めにより、去る十一月二十三日、午後、銀座鳩居堂三階の靜かな日本間に三人で會談した。

折から丁度、鳩居堂の三階では數日前からリーチ氏の陶器作品展覽會が催されてゐて、彼は非常に多忙であつたが、式場博士の斡旋で快く會合を承諾した。

思想家であるとは云へ、彼は根が藝術家であるから、さう科學的なものには十分に理解と關心とを持たないのであらうと私は想像してゐたが、果して私の豫想の如く、彼は英國のフロイド派に就いては殆ど知識を持つてゐなかつた。アーネスト・ジョーンズの名も知らず、フロイドの思想に就いて常識程度の知識しかなかつたやうだ。併し碩學として尊敬はしてゐるやうだ。ユングの名を確實に記憶してゐず、スキツルの心理療法家と云つてその名を想起し難くさうであつたから「ユング？」と暗示したら、さう〳〵と云つてゐた。ユングの學徒も英國には相當あると云ふ事である。ユングの著書が直ぐに英譯されるところを見ても、それは確に相違ない。

彼は最もアードラー派に興味を持つてゐる。The Association of Individual Psychology と云ふ協會が存在し、その會員二百名と號せられてゐる。内にミトリノキツチ D. Mitrinovic と呼ぶセルギア人がある。齡四十ばかりであるが、ナポレオン、キリアム、ブレーク、ムソリーニ等を偲ばせる風貌を具へ、明かに偉傑であると云ふ。彼は心理學者と云ふよりは哲學者、哲學者と云ふよりは豫言者と云ふべきで、異常な綜合的頭腦を有してをり、東洋の禪宗の思想などにも、透徹した理解を得してゐると云ふ。日本の將來に就いても豫言してゐたと云ふから、どんな豫言であつたかと尋ねて見たら、彼はいさゝか聲を落して、あまり樂觀的なものではない、滿洲問題その他のために非常な窮地に陷るであらうと云ふことであつた。尤も、日本にもさう云ふ豫言をする宗教家がゐて、アメリカはなくなる、ロシアは亡ぶなどゝ大膽な放言をした人があつたと云ふことを、記者は仄聞してゐる。我々は科學者として豫言

鳩居堂二階．リーチ個展會場にて寫す。左よりバーナード・リーチ．式場隆三郎．大槻憲二の三氏

などを誠しやかにする人々の勇氣に敬意を表することは出來ないし、それを信ずるにはなほさら尊敬を拂ふことは出來ない。尤も、リーチ氏は必ずしもその豫言を信じてゐるのではなくたゞそれを私に傳達したに過ぎないのであらう。

リーチ氏が前に日本を去つた頃はまだ白樺一派の全盛時代であつたが、その後震災とプロレタリア運動と經由して今日に至つてゐるので、リーチ氏の藝術に對する現代青年の態度にも昔日のやうな熱意は見られないであらう。彼も今昔の感に堪え得ぬものゝやうな表情を示してゐた。如何にも工藝家らしく純眞卒直な、併し何處か駄々子のやうな氣魄のある。容貌端麗なこの英人を眺めてゐることは一種の愉快であつた。

同じ英國人で先輩の工藝家だからと思つてヰリアム・モリスの事を訊いて見たがアムビバレンツの態度を持つてゐることが分つた。式場博士は綠茶をいれたり、日本菓子をすゝめたりして、斡旋者としての骨折りをとつて下さつたことを、こゝに深く感謝しておきたい。　（K）

## 前號正誤

| 頁數 | 行數 | 誤 | 正 |
|---|---|---|---|
| 一(第三段) | 八 | 塚原政治 | 塚原政次 |
| 三(第一段) | 七 | 菅村芳松 | 菅村芳弘 |
| 三五 | 一〇 | give | gives |
| 同 | 最後行 | Aduet | Adult |
| 六二(最下段) | 八 | シェレーミール | シュレーミール |
| 同 | 一一 | きらひたい | きらひだい |
| 六三(上段) | 三 | 少年救護法 | 少年教護法 |
| 六四(下段) | 一一 | 錦旗 | 聯隊旗 |
| 同 | 一五 | 同 | 同 |
| 六七(上段) | 六 | 奮ふ | 奪ふ |
| 六九(下段) | 二二 | 晝問 | 晝間 |
| 七〇(上段) | 六 | 護渡 | 讓渡 |
| 八一(上段) | 一一 | たあである | ためである |
| 同(下段) | 一四 | 「女」 | 「母」 |
| 八九(中段) | 一一 | 孔子様 | 莊子 |
| 九三(下段) | 七 | 雑誌委員 | 雜誌委員 |

## 內外彙報

### 「精神分析評論」昨年七月號

米國の精神分析學雜誌として、本誌上で屢々言及の機會はあつたが、その內容を紹介するのは、これを以て最初とする。創刊以來廿一年、季刊制、編纂者はホワイト、ジェリフ兩博士（W. A. White, M. D. Smith Ely Jelliffe, M, D.）。發行所はワシントンの「神經病及び精神病出版會社」である。左に第二十一卷第三號の內容を紹介する。

一、鳥類の本能的情緒生活（H・フリイドマン稿）――なかく組織的な大論文で、內容をこゝに詳しくは紹介出來ないが、人類と鳥類との本能生活、性生活、愛情生活などの比較は興味深し。

一、或る偏頭痛病患者の分析（ギイン、グートハイル稿）――その近親姦空想と罪惡感とに溯つての精緻なる分析。

一、文學の精神分析者ルドギヒ・レギゾーン（シラキウスのL・J・プラグマン稿）――米文豪エマースンやソーローの哲學の思想をその性生活の根抵より批評したレギゾーンの研究。

一、憂鬱病に於ける自己意識と視覺影像（ニウヨオクのP・シルダー稿）――ナルチスムスやサド・マゾヒスムスからの研究

一、新造語は無意識の言葉に入り得るか（パレスタインのイムマヌエル・ヹリコウスキー稿）――夢の象徵起源を異にするさまぐの國語に於いて同一であるか否かの問題は、ひとり夢の領域に止まらず廣汎な重要性を持つてゐる。この問題の解決への一つの試みである。

一、フロイド著、精神分析新講への批評（フランツ・アレクザンダ稿）――その他雜報、新刊評等。

### 「精神分析教育雜誌」昨年三四月號

一、少年裁判可否の問題（アウグスト・アイヒホルン稿）――犯罪學の權威の所說。

一、或る幼兒との分析的對話（クゼロッテ・ゲレー稿）。

一、知的禁制と食事障害（メリッタ・シミーベルグ稿。）

一、幼兒の指しやぶりに就いて（S・リンドナー稿。）――小兒科醫として指しやぶり研究の權威リンドナーのその後の興味ある研究。挿圖二十二葉。

### 「精神分析教育雜誌」五―八月號

一、勉强嫌ひの子供の分析技法（プラーグのステフ・ボルンシタイン稿）。

一、「勉强嫌ひ」の意味について（ギインのフリッツ・レードル稿）。

一、幼兒の夜尿に就いて（ブダペストのカータ・レュギー稿）。

一、三歲女兒の遊戲分析（ロンドンのメリッタ・シュミーデベルグ稿）。

一、或る夜尿症女兒の分析（ギインのアンニ・アンゲル稿。）

一、一時的症候としての遺尿及び盜癖（ギインのベルタ・ボルンシタイン稿。）

一、露出症的自慰癖の或る患者に就いて（ギインのエディト・ブクスバウム稿。）

一、懲罰の心理（バーゼルのハインリヒ・メング稿）。

一、遺尿の生理（バーゼルのH・クリストフェル稿）。

一、その他新刊圖書雜誌の批評など、幼兒教育家必讀の文字。やがて本誌上に紹介するであらう。

## 英文「國際精神分析學雜誌」昨年四、七月號

一、分析治療に於ける自我の運命（R・ステルバ稿）。

一、精神分析的治療行爲の本性（J・ストレイチ稿）。——分析治療の現象を各方面から考究した總論的好論文。

一、知力喪失症に於ける口唇的色慾（A・J・W・ホルスティイン稿）。

一、感染する擬似行爲（アレクザンダ・スァライ稿）。

一、豫言的の夢（ハンス・ツリガー稿）。

一、精神病者の分析（パウル・フエーデルン稿）。

一、無氣味の精神分析（ギインのエドムンド・ベルグラー稿）。

一、三歲女兒の遊戲分析（ロンドンのメリッタ・シュミーデベルグ稿）。

一、エリー・メチニコフとその「死の本能」說（A・L・コクレーン稿）——一八四五年ロシアに生れたユダヤ系生物學者として有名なメチニコフの死の本能說とフロイドのそれとの比較論類似點五條を擧ぐ。但しフロイドはメ氏說の存在は知らなかつた由。

一、思想行爲の色情化とその關係に於ける非人格化（ニウヨウクのC・P・オーベルンドルフ稿）

一、その他、雜報、新刊批評、各國斯學界活動情勢。わが國にては矢部八重吉氏等の精神分析學會、東北帝大の精神病學教室、及び本研究所の事どもが報導せられてある。

## 最近國內事實

★『思想問題と精神分析』紀平正美講演——昭和九年十月二十一日、東京帝國大學醫學部講堂に於ける精神衞生學會例會にて....。

★『ハーバート・リードの精神分析』森六郎講演、——第六回日本英文學會大會は十月廿三、四、五日の三日間、京都帝大で開催され、その第三日、法經教室にて....。

★『實生活と精神分析（主として母性愛について）』大槻憲二講演、伸びる會十月例會として十月廿一日、神田大日本中學會ビル三階にて....。

★『精神分析學から見た宗教心理』同氏稿——『人生創造』十一月號。

★『同性愛の心理』同氏稿——同誌同號。
★『食慾と性慾との關係』同氏稿 ——同氏十二月號。
★『兒童相談に現れた父兄の態度』霜田靜志稿——『兒童』十一月號。
★『内辨慶の精神分析』矢部八重吉談——都新聞家庭欄十一月八日。
★『故水蔭氏と矢立』長谷川誠也稿——『藝術殿』十二月號。
★バートランド・ラッセルの心理的兒童教育論「カレント・オヴ・ザ・ワールド」誌一月號に原文掲載。なほ同紙九年一月號には「ヒトラーとその一黨の精神分析」(英國の一心理治療家)と云ふ記事が揭げてある。
★『精神分析語彙より見たる N. E. D. Supplement (1933) と Webster, 2nd Ed (1934)』大槻憲二稿(「カレント・オヴ・ザ・ワールド」誌一月號。)
★『子供の取扱の實際』霜田靜志講演——十一月十八日午後、甲府市山梨縣教育會館ホールにて。山梨民報及びラ・フオンテーヌ母の友社主催、
★『東北帝大醫學部、精神病學教室業報(精神分析論叢)』第三卷一・二號は昭和九年十二月十七日發行。
★本誌前號内容に關しては、巻末廣告を參照ありたし。

## 「子供の家」兒童美術展

霜田靜志氏の主宰する「子供の家」では十二月十六日に第二回兒童美術展覽會を催した。氏が「子供の家」では「子供のための創作指導」の實績を世に問ふためである。なほこの「子供の家」では毎日曜午前、子供のための教育相談と指導とに當つてゐる。詳しくは杉並區井荻二丁目六五(女大通內田邸横北に入る)「子供の家」につきて問合せらるべし。

## 本研究所研究會例會

十一月例會は第三日曜の十九日夕、日比谷美松五階に催す。食前、雜誌「性慾號」の講座につき長崎文治氏から講義があり終つて食事に入つた。

食後、まづ長谷川誠也氏立つて、わが幼兒期の經驗談一つと題して、氏が幼時に或る意地わるい老婆の災難を痛快に思つた心理を自己分析せられた。續いて高橋鐵氏は「洒落の研究」と題して種々の洒落の實例を擧げてそれを分類し、興味ある話材を提供せられた。席上分析者らしい洒落の交換などもあつて、座は賑つた。

次に大槻憲二氏立つて「喰ふことのアムビバレンツ」と題し、飲食の愛慾的取込と憎悪的攻擊との相反並存性を研究せられた最後に、土屋喜一氏は『ゲーテの「魔王」の分析』を試みられたが、なほ多少公式的に過ぐるとの批評もあつたが、暗示的な點は認められた。

出席者は右言及諸氏の他に立川玄一郎、大槻岐美、大久保眞太郎、小林正、岩倉具榮、同良子、伊藤芳子、福間光、高橋春子、小松德の諸氏の他に、英語研究社長今井信之氏、代理皆川郁夫氏、並びに本誌に毎號執筆せられる平塚義角氏が新顔として出席せられた。

×

十二月例會は十七日夕、美松地下室食堂別室に催された。會場が急に模様がへになつて最初少し氣分を損はれたが、會談の內容は充實していゝ集りであつた。

食後、雜誌第二卷第六號二十三頁に就き、大槻氏より「超自我と罪惡とに關する講義あり、續いて霜田靜志氏の「子供親及び教師分析の二三の經驗談があり、それに就いて小學校訓導なる小杉長平氏その他の方々の所感、殊に夜尿症についての問題などあつた。次に大槻氏再び立つて「正月は何故芽出たいか」の題下に中古人の生死觀と輪廻思想と復活思想とに就いて話があつた。內に長崎文治氏の所謂「變移の儀式」(性慾心理號の內)に就いての言及があつたので、續いて長崎氏立つて、その說を敷衍せられた。最後に、毎回面白い話をする高橋鐵氏立つて「サイコロ・サイコロヂー(賭博の心理)」(別世界へ逃避の心理)に就いての例の機智縱橫なる研究談があつて、散會は十時過ぎであつた。

出席者は前言の諸氏の他に、土屋喜一、福間光、伊藤芳子、大久保眞太郎、立川玄一郎、岩倉具榮、大槻岐美、の諸氏並びに初出席の方々として、豐浦忠、倉橋久雄、鈴木眞一、田卷ミタ、內山澎彥の四氏があつた。都合十七名出席。缺席挨拶のあつたのは今井信之、長谷川誠也、小山良修、皆川郁夫の四氏であつた。缺席の場合にはなるべく、事情お知らせ願へると司會者並びに來會者一同には非常に嬉しいものであります。

## 分析講習會報告

分析講習會十一月例會は五日(第一月曜日)午後六時半より當研究所にて催された。參會者は、福間、吉田、平野、阿部、服部、横井の諸孃、高橋、長崎、小林正、小松、大槻、同岐美の諸氏であつた。講義は始めからの計畫通りフロイド全集中「總論」第一講より初められてこれを終了した。講師は大槻氏、後茶菓を攝りつゝ分析的雜談に入り、女性の貞操に就いての分析的考察それに就いての質問などあり、解散十時半頃。

×

十二月例會は三日(第一月曜)開催。出席者は高橋鐵。同はる子、土屋、長崎、大槻、服部、吉田、横井、福間、大槻岐美及び初めての倉橋久雄の諸氏「總論」中第二講を終る。講師は長崎氏。會後例に依り研究的雜談に移り福間氏より、「精神分析から見た迷信と宗教の差違は?」と云ふ質問あり、これに對して各氏の答ありて結局「迷信とは强迫神經症的徵候としての原始的宗教であり、宗教とはその儀式化したものであつて、迷信

には昇華が無いが宗教にはそれがある」と云ふ處で落着いた。雜談中得る處多く面白かつた。他に分析的映畫觀賞會の計畫に對する準備的雜談等あつて、解散十一時過ぎ。

## 相　談

### 家に落着かぬ夫

問――卅五歳になる私の夫ですが、毎日々々遊びぐせがついて困つて居ります。殆ど毎日の樣に競馬麻雀、玉突その他遊び事ばかりに日を暮して居ります。たまに用事に出かけてもその歸りはやつぱり遊び場により道してなか／＼歸りません。競馬などになると店の事もかまはず夢中になり、麻雀は夜更までして來ます。たま／＼注意でもしますと、女道樂するより良いだらうと平氣で續けて居ます。餘り遊びがはげしいので近所でも評判になつて蔭でいろ／＼と云はれて居ります。それでゐて私などがたまに外出しますと、とても不服でいくら早く歸つてもぐづぐづしてゐると云つて歸ると早々小言を言はれます。女と云ふものはそれほど迄に家事の事ばかりにかゝつて、年中働いてゐなければならないものでせうか。年老いた母は何も言ひませんが氣の毒でなりません。私のする事が嫌なのか。それとも私といふものが嫌なのかと思つてみますが、そんな事もないらしいのです。たゞ家の中にじつとしてゐる事が出來ないらしいのです。店の者か眞黒になつて働いてゐるのに主人である夫が遊び廻つてゐるので、使用人の手前が惡くて仕方ありません。どの樣にすればよろしいでせうか。使用人は良く働いては異れますが、夫がやさしい言葉一つかけると云ふ事がないのであまり良くは云ひません。たまに夫が家にゐれば店の者も大變喜ぶのですから何とか店にゐつく方法はないでせうか(下谷惱める妻)

答――それだけの病狀(と云ふのも少し大袈裟ですが)を承つたゞけで、私に殆ど疑へないのは、御主人には自慰の惡癖が恐らくは幼兒時代からついてゐると云ふことです。幼兒時代からこの癖ある者は、成人後になつても、異性的交渉よりはその方がよいと云ふ人が隨分あります。併しそれを抑制すると、その代償として賭博や勝負事に向ふやうになりますことは、フロイドのドストイエフスキー論(本誌昨年五月號に譯載)に詳論してある通りであります。女道樂さへしなければ遊ぶことと位はよからうと云ふ御主人の自己辯護は寧ろ氣の毒な感じがします。で、御主人は、自慰の癖あるために妻君に對してはその能力を發揮することが不可能でないまでも不十分であることを意識してゐますので、そこに劣等感(ひけ目)を持ちます。で、妻君に十分な滿足を與へてゐないから、その不滿を妻君が何等かで充たして來はせぬかと云ふ不安が他方に起きますので、外出して來る妻君に對しては非常に嫉妬的に嚴重になります。分析に依つて直るかどうか。診斷せずに只今明言することは出來ません。

恭賀新年・雜誌委員一同

## 編輯後記

本研究所は創立以來こゝに第八周年を本誌は創刊以來第三周年を迎へることになり、こゝに第三卷第一號を公にして、滿天下の讀者執筆者諸賢の熱心な支援により愈々隆昌の域に入りますことは、同胞邦人の精神的健康のために誠に同慶の至りで御座います。本年中は種々特別な計畫も御座いますこと故、なほ一層御助力の程願上げます。

×

新執筆者窪田甲子郎氏は、甲府山梨民報社々會部長の椅子にある傍、自宅にラフォンテーヌ、母の友社を經營してゐられる。兒童心理と兒童教育には特別の關心を持つてゐられる方。その日常觀察の一端をこゝに披歴せられました。

土屋喜一氏は某會社に勤務しつゝ斯學に特別の興味を見出され、「自己の性格改造と人間生活再認識との希望」を抱いてゐられる方である。

倉持久雄氏は先頃まで郵便局に勤務してゐられたが、今は生活の不安なく分析學その他を勉强してゐられる誠に惠まれた身の上の方。

×

高橋鐵氏には社會分析を、奥本島田氏には生物分析を、將來着々進めて行つて頂きたい希望を切に感じます。

×

前號餘白に「エディポス」劇上演の噂を報道しましたが、あれは新演劇協會の都合でとりやめになつたらしく、小誌が噓を云つたやうな形になり、誠に申譯ありません。新聞の演劇欄の報道をそのまゝ取次いだのは輕卒でしたが、あしからずお許し下さい。

×

小誌合本「第二卷・下」(昭和九年五月號より十一、十二月號に至る)は出來てをります。御申込みを待ちます。

昭和九年十二月二十五日印刷
昭和十年一月一日發行
(隔月刊) 定價五十錢 (郵税二錢)

東京市本郷區駒込動坂町三二七
編輯及發行 大槻憲二
東京市牛込區改代町廿四
印刷所 理想社印刷所

定價一部 五拾錢 (郵税二錢)
半年分 一圓五十錢 (送料共)
一年分 三圓 (送料共)

### 御注文規定

- 本誌の御注文は一切前金に御願ひ致します。
- 御送金はなるべく安全至便なる振替を御利用下され度く、振替口座東京七八八一七番へ御拂込み下さい。
- 郵券代用の場合は一割增に願ひます。
- 本誌廣告に關しては、御照會次第部員を伺はせます。

東京市本郷區駒込動坂町三二七
發行所 東京精神分析學研究所
振替口座東京七八八一七番

大賣捌所 東京堂・東海堂 大東館・北隆館

# 研究所事業案内

一、分析部

・神經症治療（ヒステリー、强迫症、恐怖症、妄想症、その他）

・性格改造（惡癖、奇習など現實生活に不適當なる性向にして無意識病根に基くもの）

・客員の診察（分析的又は醫術的）希望の方には、紹介の勞をとるべし

二、通信分析部

・分析法は毎日、患者が分析者の許に通ひて、處置を受けるが正當なれど、遠隔の地に居られたり、その他、經濟上、健康上、それの出來にくい人々のために、この部を設く。

・希望者は、その姓名、年齢、病歴、手記、感想、夢の記述などに、料金（十圓）を添へて當研究所にお送り下され度。分析診斷明細書を相當期日の後に送る。手記その他は絶對に他に洩らすことはなし。文字は明瞭に書かれたし。

・擔當者は研究所に御一任ありたし。それ〴〵適當の人々にふり向ける。

三、教育部

・當研究所主催の講演會、公開講習會、演劇、その他。

・所員並に客員に對して他より依頼の講演又は講習會。

四、出版部

精神分析に關する雜誌及び圖書の出版。

五、研究會

・研究の發表とその討議を目的とす。毎月一回、第三月曜夕、日比谷美松五階貴賓室にて開催その都度通知、出席希望者に對しては別に資格制限を設けず。會費は食費、會場費、通信費とも出席の都度、六十錢。（但し誌代を申受く。雜誌購讀は會員の義務とす。）

・雜誌のみに依りて研究の發表又は諸般の事業に參與せんと欲する向は特別誌友（直接購讀者）となるべし。

六、講習會

毎月一回、第一月曜夜、於研究所開催。當分主としてフロイド著書の精讀。會費二十錢。

## 次號内容豫告

# 宗教心理研究號

目下、宗教復興の聲が社會諸方面に聞こえますが、果してどのやうな根柢を有するものでありませうか。精神分析學の研究結果こそ、この方面に窮極の斷定を下し得るものであると、我等は確信してゐます。論より證據を見て頂きたいものです。

キリスト教と佛教との比較論……長谷川誠也
精神分析學から見た宗教心理……大槻憲二
宗教理想の象徴としての青の研究……高水力太郎
「青い花」と「青い鳥」と「青の光」の比較研究
輪廻思想と復活思想との同一性……大槻憲二
强迫神經症と宗教儀禮との類似……長崎文治
宗教家への轉嫁愛について……今福由江
トルストイの宗教心理（オシポー）……平塚義角譯
ゲーテとフロイド（續）……武田忠哉
子供の精神分析學的研究（續）……霜田靜志
宗教的昇華に於ける性慾の危機……高橋鐵
或る自我軟弱者の分析診斷……高水力太郎

隔月刊雜誌
定價五十錢
送料二錢

半年 一圓五十錢
一年 三圓
送料ナシ

昭和九年十一月十二月　**夫婦生活研究號**　第二卷第八號

夫婦生活に於ける性的關係と道德的關係……大槻憲二

★一夫一婦制の必然性★一夫多妻制などの必然性★一夫一婦制の非必然性★婦人解放と有閑夫人問題★男子憂鬱と本能昇華★リビドー昇華の個人差★果して夫人たちの罪か

初夜權を考察して現代夫婦生活の葛藤に及ぶ……長崎文治

夫婦生活と「坤卦」（古今東西の夫婦生活に於ける闘爭觀に就いて）……長谷川誠也

夫婦生活分析臨床講義（夫婦生活の三要素とは何か）……高水力太郎

性交と受胎との生物分析（フエレンチーの劃期的名論）高水力太郎譯

發情帶域論（精神分析的部分本能觀の歴史的背景ついてのHエリスの論文）……千葉廣洋譯

ドストイエフスキーの作品分析（彼のニヒリズムの心理的起源その他について）……平塚義角譯

時評

◇少年教護法の實施◇松田文相の教育方針◇乃木將軍の悲劇的性格の分析◇上林曉の小説「景色」◇……大槻憲二

弘津千代の「妖鱗草紙」◇市電罷業時のエディポス◇無意識犯罪と刑法（「猫眼石怪事件」を見て）……岩倉具榮

ブリル孃（ナルチスムスの幻滅の悲哀を描けるマンスフイールドの短篇小說。ブリル（輝き）孃が曇り孃となる心理過程如何。）岩倉具榮譯

雜話

★蝶番の語源とその性的意義★乘馬と性★鳥居と鋏は何故立小便を禁ずるか（森巣山人）——川柳に依る夫婦生活の分析（高橋鐵）

精神分析學語彙表（十四回）—本研究所關係者名簿—本研究所例會報告—外國斯學雜誌內容報告—通信分析部創設報告—研究所事業案內—編輯後記

東京精神分析學研究所出版部
本郷區動坂町三二七
振替・東京七八八一七番

# 藝術殿

坪內逍遙博士會號執筆


一月號（第五卷第一號） 要目

藝術殿……長谷川誠也

柿の蔕……坪內逍遙

——『論語』の現代化——自分と『論語』との因緣——飜譯式の三大別——室伏氏の『論語』の現代語譯——岡田正三氏の口語譯——辭達而已矣——結語——

曾我狂言の研究……渥美清太郎

新劇觀衆の翫賞態度について……小畠元雄

アト・ランダム

五十嵐力　池田大伍　長谷川誠也　本間久雄
大村弘毅　金子馬治　河竹繁俊　吉江喬松
伊達豐　坪內逍遙　坪內士行　中村吉藏
楠山正雄　山田清作　日高只一

明治文壇回顧錄（續）……後藤宙外

文藝座の思ひ出（續）……林和

梨園の細道（續）……水口薇陽

劇場めぐり……佐原包吉

文藝時評……井上英三

演劇時評……川島順平

海外文藝ニュース……山口太郎

特別附錄 日本劇場讀史表（一）……須田進治





一部 定價五十錢（送料一錢五厘）

編輯 財團法人國劇向上會 東京市淀橋區戸塚一丁目 振替（東京二〇二九〇番）

發行 梓（あづさ）書房 東京市神田區駿河臺町一ノ八 振替（東京七八六四四番）

昭和八年七月七日　第三種郵便物認可
昭和九年十二月廿五日印刷納本　隔月一回一日發行　精神分析　一・二月號
昭和十年一月一日發行

定價金五十錢　郵税二錢

III. Jahrgang, Heft 1, Jan.-Feb. 1935. Erscheint zweimonatlich.

# ZEITSCHRIFT FÜR PSYCHOANALYSE

Herausgegeben vom „Tokio Institut für Psychoanalyse."

(II. Sonderheft für Kinderpsychologie)

## Inhalt

Lehrer-und Elternanlyse vor Kinderanalyse················*Redakteur*

**Studien**

Die Kinderseele und die Psychoanalyse ················*S. isi S'modı*
Analyse der Phobie eines fünfjährigen knaben (S. Freud)
············übersetzt von *Kenji Ohtski*
Tolstois Kindheitserinneruugen (N. Ossipow)
········übersetzt von *Yosizumi Hiratska*
Goethe und Freud (*F. Wittles*) ········übersetzt von *Tadoya Takeda*
Über die Symbolik dis Wassers, ····················*Tetsu Takahasi*
Über die Sonderbarkeit der Psychoanalyse als Wissenschft
············*Kenji Ohtski*

**Literarisches Werk**

An Ideal Family (*T. Mansfield*) ····übersetzt von *Tomohide Iwakura*

**Kritik und Methodik**

Über verschiedene Zeitfragen, ·······················*Kenji Ohtski*
Über "La Maternelle" Léon Frapies ············*Tomohide Iwakura*
Über einige Fälle von Kinderverbrechen,··· ······*Kosiro Kubota*
Eine Kindheitserinnerung,·····························*Kiiti Tutiya*
Einige Beobachtuugen über das Leben des Kindes, ··*Hisao Kurahasi*
Meine Selbstanalye an intellektuellen Narzissmus,····*Simada Okumoto*
Aus den analytischen Notizbuch einer Mutter,···········*Kimi Ohtski*

**Einführung in die Psychoanalyse**

Über die kindersexualität und ihre Behandlung, ··········*Redakteur*
Terminologie (15)·······································

**Varia**

Psychoanalytische Überlegungen über sogenannten Neujahrstraum,

**Neuigkeiten des In-und Auslandes**

Inhalt der "Psychoanalytic Review" vol XX. 1. No. 3··············
Inhalt der "Psychoanalytischen Pädagogik" Jg. VII, Nr. 3—4,u. 5—8··
Kleine Mitteilungen, ········································

**Ratgeber**

Über einen Gatte, der zu Hause nicht bleiben will··············

Preis des Einzelheftes, 50 Sen

Tokio Psychoanalytischer Verlag
327, Dozakacho, Hongo-ku Tokio Nippon.